
大里郡岡部町

宮西遺跡

県道蛭川普濟寺線関係埋蔵文化財発掘調査報告

— II —

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



鉄鏃



宮西遺跡全景

序

埼玉県では、新たな時代の大きな潮流を踏まえ「環境優先」「生活重視」「埼玉の新しいくづくり」を基本理念とし、豊かな彩の国づくりをめざした施策を行っております。その一環として、交通の要衝としての地理的条件を生かし、県民の生活圏の拡大や高度化する産業活動の円滑化を図るため、生活環境の保全と道路交通の安全性を重視しながら、総合的な道路交通網の整備が進められています。

特に、県内を結ぶ幹線道路の整備については、地域間の連携を高めるために、県内1時間道路網構想を目指して進められ、県道蛭川普濟寺線の建設がそれらの一つとして計画されました。

この路線は、児玉郡児玉町蛭川から美里町小茂田を経由して、国道17号線の大里郡岡部町普濟寺を結ぶ、地域住民の生活に密着した道路です。また、国道17号バイパスや関越自動車道の本庄・児玉インターにアクセスでき、今後、一層重要性が高まる県道であります。

岡部町の道路建設予定地には、遺跡の存在が知られており、これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、関係機関で慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、現状保存ではなく、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査については埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が、埼玉県道路建設課の委託を受け、実施することになりました。

岡部町には、国指定重要文化財の緑釉手付瓶、灰釉

瓶を出土した西浦北遺跡や和同開珎を出土した内出遺跡など多くの遺跡が所在しています。また、榛沢郡衙の正倉跡と推定される中宿古代倉庫群は県指定史跡であり、古くから人々の生活が営まれてきました。

宮西遺跡の発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけての住居跡や中世の道路跡などが発見されました。住居跡は重なり合うように検出され、奈良・平安時代を通して何度も住居を建て替えた様子が明らかになりました。出土した遺物には、脚部に透かしの付いた円面硯や鉄鍬などが発見され大変貴重なものであります。

この時代、円面硯は役所や寺院などで使われていました。宮西遺跡の性格を考える上で極めて貴重な資料を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護及び普及・啓発、学術研究の基礎資料、教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いと存じます。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただいた埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部道路建設課、同熊谷土木事務所、岡部町教育委員会、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成11年8月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県大里郡岡部町に所在する宮西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届けに対する指示通知は、以下のとおりである。

宮西遺跡 (MYNS)
大里郡岡部町大字榛沢字宮の西528番地2他
平成9年7月4日付 教文第2-75号
3. 発掘調査は、県道蛭川普濟寺線(岡部町地内)建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のあと、埼玉県土木部道路建設課の委託によって、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は第I章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、小野美代子、伴瀬宗一が担当し、平成9年6月1日から平成9年7月31日まで実施した。整理・報告書作成事業は、赤熊浩一が担当し、平成11年4月1日から平成11年6月30日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量は株式会社東京航業研究所に委託した。遺物のカラー写真は小川忠博氏に委託した。
6. 発掘調査時の遺構写真撮影は小野、伴瀬が行った。遺物の撮影は赤熊、大谷道則が行った。
7. 出土品の整理・図版の作成は真野目洋子の協力を得て、赤熊が行い、縄文時代の遺物については新屋雅明が行った。

本文の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、IV-3を新屋が、それ以外は赤熊が行った。
8. 本書の編集は、赤熊が行った。
9. 本書にかかる資料は平成12年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
恋河内昭彦・小林 高・鈴木徳雄・鈴木秀雄・鳥羽政之・平田重之・宮本直樹・岡部町教育委員会

凡例

1. 本書の遺跡全体図におけるX・Yの座標数値は、国土標準平面直角座標第IV系に基づく座標数値を示し、方位は、全て座標北を示している。
2. グリッドは10m×10m方眼で設定した。グリッドの名称は方眼の北西隅の杭番号である。
3. 遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、その他のものについてはスケールで示している。

遺構図	住居跡・溝跡・土壌	1/60
	カマド	1/30
遺物	須恵器・土師器	1/4
	縄文時代の石器	1/3
4. 須恵器は断面に黒塗りを施している。
5. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。
6. 遺物観察表は次のとおりである。
 - ・口径、器高、底径は、cmを単位とする。
 - ・()内の数値は推定値である。
 - ・胎土は肉眼で観察できるものを次のように示した。
A-白色粒子、B-角閃石、C-石英、
D-雲母、E-長石、F-酸化鉄粒子・赤色粒子・
黒色粒子、針-白色針状物質、片-片岩
 - ・焼成は良好、普通、不良の3段階に分けた。
 - ・残存率は図示した器形に対し、5%単位で示した。
7. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25000地形図、寄居町都市計画図を改図・転載したものである。

目次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	(4) 柱穴・掘立柱建物跡	39
1. 調査に至る経過	1	(5) グリッド	44
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. 中・近世	48
3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3	(1) 溝跡	52
II 遺跡の立地と環境	4	(2) 道路状遺構	59
III 遺跡の概要	11	(3) 土壌	61
IV 遺構と遺物	13	3. その他	65
1. 奈良・平安時代	13	V 結語	67
(1) 竪穴住居跡	13	1. 古代の集落形態について	67
(2) 焼土遺構	37	2. 中世の道路状遺構について	69
(3) 土壌	38		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第18図 第12号住居跡出土遺物	26
第2図 周辺の遺跡	6	第19図 第13号住居跡出土遺物	27
第3図 周辺遺跡遺構分布図	8・9	第20図 第16号住居跡出土遺物	28
第4図 宮西遺跡第3次調査区位置図	10	第21図 第17号住居跡出土遺物	29
第5図 宮西遺跡グリッド網図	11	第22図 第18号住居跡出土遺物	29
第6図 宮西遺跡全体図	12	第23図 第19・20・21・22号住居跡	30
第7図 第1・2・3号住居跡	14	第24図 第20号住居跡出土遺物	31
第8図 第1・3号住居跡出土遺物	15	第25図 第21号住居跡出土遺物	32
第9図 第4・5・15・23号住居跡・出土遺物	17	第26図 第24・25・26・27号住居跡	33
第10図 第5号住居跡・出土遺物	17	第27図 第24号住居跡遺物分布図・出土遺物	34
第11図 第6号住居跡	18	第28図 第26号住居跡出土遺物	36
第12図 第7号住居跡	19	第29図 第27号住居跡出土遺物	36
第13図 第8号住居跡	20	第30図 焼土遺構	37
第14図 第9～13・16～18号住居跡	21	第31図 焼土遺構出土遺物	37
第15図 第9～13号住居跡柱穴	22	第32図 第24・25号土壌・出土遺物	38
第16図 第9・11・16号住居跡遺物分布図	23	第33図 第1号掘立柱建物跡	39
第17図 第10号住居跡出土遺物	25	第34図 第2号掘立柱建物跡	40

第35図	第3号掘立柱建物跡	41	第51図	第6・7・8号溝跡・遺物分布図	57
第36図	第10・17・18・19・25・26号柱穴	42	第52図	第6・7号溝跡出土遺物	58
第37図	柱穴出土遺物	42	第53図	道路状遺構・出土遺物	60
第38図	第20号柱穴・出土遺物	43	第54図	第1～4・6～12号土壙	62
第39図	第21号柱穴・出土遺物	43	第55図	第13～15・17～23号土壙	63
第40図	グリッド遺物分布図	44	第56図	性格不明遺構	65
第41図	グリッド出土遺物(1)	45	第57図	表面採集遺物	65
第42図	グリッド出土遺物(2)	46	第58図	縄文時代の遺物	66
第43図	遺構図(1)	48	第59図	竪穴住居跡の軸方位	67
第44図	遺構図(2)	49	第60図	宮西遺跡の古代集落単位図	68
第45図	遺構図(3)	50	第61図	宮西遺跡道路状遺構	69
第46図	遺構図(4)	51	第62図	鎌倉街道と周辺遺跡分布図	70
第47図	第1・2号溝跡	53	第63図	鎌倉街道の調査遺跡1	72
第48図	第3・4号溝跡	54	第64図	鎌倉街道の調査遺跡2	73
第49図	第3・5号溝跡	55	第65図	沖田III遺跡検出の道路状遺構	74
第50図	溝跡出土遺物	56			

表 目 次

第1表	第1・3号住居跡出土遺物観察表	15	第20表	第17号住居跡出土遺物観察表	29
第2表	第1・3号住居跡出土遺物計量表	15	第21表	第17号住居跡出土遺物計量表	29
第3表	第4号住居跡出土遺物観察表	18	第22表	第18号住居跡出土遺物観察表	29
第4表	第4号住居跡出土遺物計量表	18	第23表	第18号住居跡出土遺物計量表	29
第5表	第5号住居跡出土遺物観察表	18	第24表	第20号住居跡出土遺物観察表	31
第6表	第5号住居跡出土遺物計量表	18	第25表	第20号住居跡出土遺物計量表	31
第7表	第6号住居跡出土遺物計量表	18	第26表	第21号住居跡出土遺物観察表	32
第8表	第7号住居跡出土遺物計量表	19	第27表	第21号住居跡出土遺物計量表	32
第9表	第8号住居跡出土遺物計量表	20	第28表	第24号住居跡出土遺物観察表	35
第10表	第9号住居跡出土遺物観察表	23・24	第29表	第24号住居跡出土遺物計量表	35
第11表	第9号住居跡出土遺物計量表	24	第30表	第25号住居跡出土遺物計量表	35
第12表	第10号住居跡出土遺物観察表	25	第31表	第26号住居跡出土遺物観察表	36
第13表	第10号住居跡出土遺物計量表	25	第32表	第26号住居跡出土遺物計量表	36
第14表	第12号住居跡出土遺物観察表	26	第33表	第27号住居跡出土遺物観察表	37
第15表	第12号住居跡出土遺物計量表	27	第34表	第27号住居跡出土遺物計量表	37
第16表	第13号住居跡出土遺物観察表	27	第35表	焼土遺構出土遺物観察表	37
第17表	第13号住居跡出土遺物計量表	27	第36表	焼土遺構出土遺物計量表	37
第18表	第16号住居跡出土遺物観察表	28	第37表	第24・25号土壙出土遺物観察表	38
第19表	第16号住居跡出土遺物計量表	28	第38表	第24・25号土壙出土遺物計量表	38

第39表	柱穴出土遺物観察表	42	第45表	溝跡出土遺物観察表	55
第40表	第20号柱穴出土遺物観察表	43	第46表	第6・7号溝跡出土遺物観察表	57
第41表	第21号柱穴出土遺物観察表	43	第47表	道路状遺構出土遺物観察表	61
第42表	Nグリッド出土遺物計量表	44	第48表	道路状遺構出土遺物計量表	61
第43表	Oグリッド出土遺物計量表	44	第49表	表面採集遺物観察表	65
第44表	グリッド出土遺物観察表	44・47			

写真図版目次

図版1	宮西遺跡遠景 大寄八幡神社		第1・2号溝跡	
図版2	第1号住居跡・第1号土壙 第2・3号住居跡・第1号掘立柱建物跡 F区全景(西から)		図版11	D区全景(西から) 第9～13・16～18号住居跡 第6・7・8号溝跡 A区全景(西から)
図版3	第6号住居跡 A区全景(西から)・第7号住居跡 第8号住居跡・第1・2号溝跡		図版12	第4号土壙 第8・9・10号土壙 第11・12号土壙・第4号溝跡 第13号土壙 第14号土壙・第3号溝跡 第17・18号土壙 第19号土壙 第25号土壙
図版4	第4・15号住居跡 第4・5・15・23号住居跡・第20号土壙 第5号住居跡		図版13	N2グリッド遺物出土状況 道路状遺構掘り方 第2号性格不明遺構 道路状遺構(西から) N2グリッド(東から) 道路状遺構(西から)
図版5	C区全景1(西から) C区全景2(東から) C区全景3(西から)		図版14	第9号住居跡出土遺物 Nグリッド出土遺物 Oグリッド出土遺物
図版6	第9～13・16～18号住居跡(西から) 第9～11・16～18号住居跡(北から) 第12・13号住居跡		図版15	須恵器 出土遺物一括
図版7	第19号住居跡 第20号住居跡 第21・22号住居跡		図版16	Oグリッド出土鉄鏟 Nグリッド出土円面硯 土錘 中世遺物
図版8	第1・2号溝跡 A区全景(東から) B区全景(西から)			
図版9	第5号溝跡・第15号土壙 第3・5号溝跡 第9・10・11号溝跡			
図版10	第3号溝跡 A区全景(東から)・第3号溝跡 A区全景(東から)			

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は関東地方の中西部に位置し、県全域が都心から100kmの圏内に含まれる。県では快適でうるおいのある生活空間の形成のために、道路網の整備を進めている。「県内1時間道路網構想」を推進し、高速道路、地域高企画道路、インターチェンジにアクセスする道路、都市内街路などの、幹線道路から生活道路に至るまで、体系的な道路網の整備計画である。一般県道蛭川普濟寺線の整備もこうした事業の一つである。

道路建設課から一般県道蛭川普濟寺線の建設に先立ち、平成8年4月24日付け道建第16号で、文化財の所在及びその取り扱いについて、文化財保護課長あて照会があった。それに対して文化財保護課は、平成8年7月19日付け教文第552号で、概ね次のような回答をした。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、次の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称	種別	時代	所在地
宮西遺跡	集落跡	奈良 平安	岡部町榛沢 地内

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づき、文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘の実施については当課と別途協議してください。

その後、道路建設課と文化財保護課との間で取扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であり、記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査の実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画・調査期間などについて協議し、平成9年6月1日から平成9年7月31日までの期間、発掘調査を実施することとした。

文化財保護法第57条3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査に係わる通知は以下のとおりである。

平成9年7月4日付け 教文第2-75号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

本事業は、兎玉町蛭川と岡部町普濟寺を結ぶ県道の整備事業に伴う発掘調査である。この内、岡部町榛沢郡宮の西地内の道路拡幅工事に伴い、宮西遺跡の発掘調査を実施した。発掘調査期間は平成9年6月1日から実施し、平成9年7月31日に終了した。2ヶ月間の事業であった。調査面積は550㎡である。検出された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡26軒、中・近世の溝跡11条、土壇20基、道路状遺構である。

6月初旬、調査事務所を設置した。同時に、調査区域の縄張りを行い、併せて、重機を導入しA区より表土を掘削した。県道蛭川普濟寺線の拡幅部分の調査であり、道路隣接地であることから、交通の妨げや調査作業の安全確保のため警備員を配置し、掘削作業を進めた。さらに、調査区は、安全対策のためバリケードを置き、松杭により柵を施した。

6月中旬、基準点測量を実施し、グリッドを設定した。遺構確認作業を行い、F区から発掘調査を開始した。第1・2・3号住居跡および土壇、ピットを調査し全景写真を撮影した。次いで、A区の調査に着手した。近世の第3・4・5号溝跡を調査し、第6・7号住居跡および土壇、ピットを調査した。A区では、調査区をほぼ東西方向に走る第3号溝跡の調査に着手。

6月下旬、E区の調査に着手。近世の第1・2号溝跡を調査し、第4・5・15・23号住居跡および土壇、ピットを調査した。A区の調査をほぼ終了し全景写真を撮影した。さらに、第3号溝跡が伸びる東側のB区の調査に着手した。

7月初旬、B・E区の調査をほぼ終了し全景写真を撮影した。D区の調査に着手した。第19～22号住居跡を調査、住居跡は複雑に切り合い調査はやや難航した。また、調査区東端には第6・7・8号溝跡を検出した。D区の調査区東側のN-2およびO-2グリッドからは遺構に伴わない黒色土中に多くの遺物が分布し、鉄鏃・円面硯などを検出した。あわせて、土壇、ピットを調査し全景写真を撮影した。

7月中旬、調査区の中央にあたるC区の調査に着手した。第9～14・16～18号住居跡の調査を開始した。隣接するD区と同様に住居跡は複雑に切り合い調査は難航した。調査区が狭いため住居跡の全体をつかむことができず、わずか、幅2m×8mの範囲に9軒の住居跡を確認した。B区中央付近でも幅2m×9mの範囲で第24～27号住居跡を確認した。

7月下旬、C区西側で道路状遺構を確認し調査した。C区全景写真を撮影し宮西遺跡の調査を終了した。7月末、調査区の埋め戻し作業を行い、調査事務所を撤収し、本事業を終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成事業は平成11年4月1日から6月30日までの3ヶ月間実施した。

4月初旬、宮西遺跡の整理事業を開始する。出土遺物の水洗・注記の後、遺物の接合・復元作業を行う。

4月中旬、遺物は復元作業の終了した住居跡から器種ごとに分類し、破片数と重量を計量した。遺構図は住居跡から平面図と断面図を合わせ第二原図の作成。

4月下旬、遺物は計量が終了したものから、遺物実測を開始した。遺構図は第二原図の完成したものから土層注記の入力作業を行った。

5月初旬、遺物実測を継続。溝跡の第二原図の作成を進めた。遺物復元作業、遺物計量作業をほぼ終了。

5月中旬、遺物実測をほぼ終了し、版組作業を開始。ピット・土壇の第二原図の作成を進めた。

5月下旬、遺構図および、遺物図版のトレース作業を行い、遺物観察表のデータ入力を行う。遺物撮影のための土器に石膏を入れ色塗りを行う。

6月初旬、図版にインレタ・スクリーントーンを貼り込む。遺物計量表の作成。遺物の写真撮影を行った。

6月中旬、全体図、周辺遺跡分布図を作成、遺構遺物図版の完成。原稿執筆を進める。

6月下旬、割付作業を行い、報告書印刷の起案を行う。遺物収蔵の整理。

7・8月、入札を実施し、校正作業を行い、刊行。

3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成9年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	塩野 博
常務理事兼管理部長	稲葉 文夫
理事兼調査部長	梅沢 太久夫

<管理部>

庶務課長	依田 透
主任	西沢 信行
主任	長滝 美智子
主任	腰塚 雄二
専門調査員兼経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主任	福田 昭美
主任	菊池 久

<調査部>

調査部副部長	今泉 泰之
調査第三課長	浅野 晴樹
主任	小野 美代子
主任調査員	伴瀬 宗一

(2) 整理事業 (平成11年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長	広木 卓

<管理部>

管理部副部長兼経理課長	関野 栄一
庶務課長	金子 隆
主任	田中 裕二
主任	江田 和美
主任	長滝 美智子
主任	福田 昭美
主任	腰塚 雄二
主任	菊池 久

<資料部>

資料部長	高橋 一夫
専門調査員兼資料部副部長	石岡 憲雄
専門調査員	市川 修
統括調査員	赤熊 浩一

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

宮西遺跡が所在する位置は、埼玉県大里郡岡部町大字榛沢字宮の西である。この地点は利根川の支流である小山川と志戸川の合流点に近い西南側にあたる。遺跡の北東側にはJR高崎線が敷設され、高崎線本庄駅より南東3km、岡部駅より北西3kmの中間地点に位置する。

荒川以北の埼玉県北部地域は、第1図に示されるように、上武山地。児玉丘陵・松久丘陵・本庄台地・櫛引台地・妻沼低地に区分される。西は神流川、東に利根川が流れる。全体的な地形の傾斜は、南西から北東に向け低くなる。河川は、上武山地を分水嶺とし、南面は荒川に注ぐが、北面は利根川に注ぐ。本地域の河川には、女堀川、小山川、志戸川、藤治川等が傾斜に沿って北東に流れ、利根川に注ぐ。

宮西遺跡は、小山川左岸に広がる本庄台地と志戸川右岸に広がる櫛引台地に挟まれた扇状地で、両河川の開析が著しく進んだところに位置する。

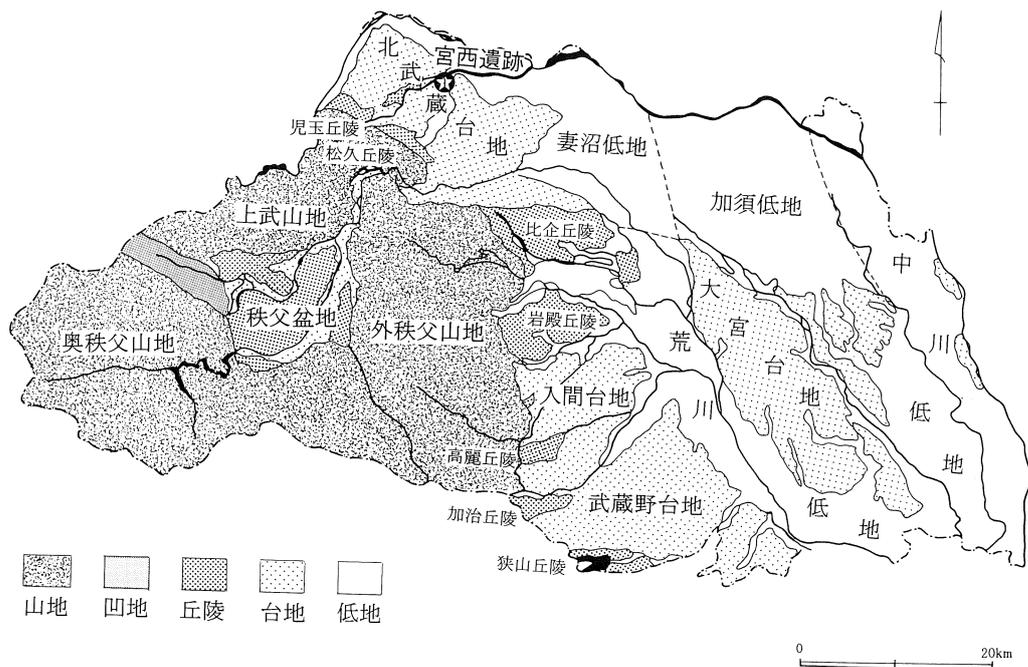
台地の北東側は利根川の開析によって形成された妻沼低地が広がる。台地との境は上里町・本庄市・岡部町・深谷市にまたがりほぼ直線的に段丘を形成する。崖線の直下には湧水線が存在する。現在の、高崎線や国道17号線はこの台地縁辺に敷設された幹線である。

小山川左岸には児玉丘陵から北東に生野山丘陵・浅見山丘陵の残丘が存在し、志戸川右岸には、松久丘陵から北東に諏訪山丘陵・山崎山丘陵が存在する。これらの丘陵は標高100～130mである。小山川と志戸川に挟まれた沖積台地に宮西遺跡が位置し、残丘は認められない。台地北東端で両河川は、合流し小山川として流れ、妻沼低地を東流し、利根川に注ぐ。

台地の扇頂部は、美里町広木、駒衣あたりで標高は120m、扇端部は岡部町六反田で標高は50mである。宮西遺跡は標高53mである。

宮西遺跡の周辺の地理的景観については、六反田遺跡(1981 梅沢)で詳細な検討が行われている。この

第1図 埼玉県の地形



中で歴史地理の見地から明治18年以降の地図、航空写真の検討から小山川の流路が変化していることを明らかにし、遺跡や現在の集落は自然堤防状の微高地に形成されたものであることを指摘している。現在の大寄八幡神社を中心とした宮西遺跡の周辺には、西浦北遺

2 歴史的環境

本地域は数多くの遺跡が存在する。特に、古墳時代以降の遺跡は調査例も多く歴史的環境の検討が行われている。

古墳時代から奈良時代への変化は遺跡にも現れる。これまで、志戸川や小山川によって形成された自然堤防や微高地に営まれていた集落は、広大な台地の開発とともに集落の占地を大きく変化させると考えられる。

古墳時代の集落は、六反田遺跡をはじめとし周辺の微地形によって小規模な集落が微高地上に広範囲に展開していたものと考えられる。宮西遺跡や大寄遺跡、沖田遺跡などはそうした集落である。一方で、砂田前遺跡のように、低地帯の自然堤防上には大規模な集落も営まれている。また、古墳群は、台地や丘陵上に形成され、西五十子古墳群、東五十子古墳群、西山古墳群、千光寺古墳群、四十塚古墳群、白山古墳群などが知られる。

こうした景観が古代律令社会のなかでどのような変化をしたのか解明することが重要である。本遺跡は古代において、武蔵国榛沢郡にあたる。榛沢郡は、新居・榛沢・膽形・藤田・餘戸の5郷からなる小郡であり、宮西遺跡は現在の岡部町榛沢に所在し、武蔵国榛沢郡榛沢郷にあたると思われる。藤田郷は現在の寄居町花園山に居を構えた藤田氏に求められることから、このあたりが榛沢郡藤田郷にあたると思われる。新居郷と膽形郷は比定地不明である。これまでの、発掘調査の成果をもとにすると、榛沢郡の役所が置かれた地は榛沢郷ではなく、現在の岡地区である。この地は、櫛引台地の縁辺部にあたり、台地縁辺に中宿遺跡、滝下遺跡、高大な台地平坦部には熊野遺跡、岡麩寺が位置する。中宿遺跡は郡衙正倉と考えられており、整然と建物跡が並ぶ。滝下遺跡からは大溝跡や鍛冶工房跡

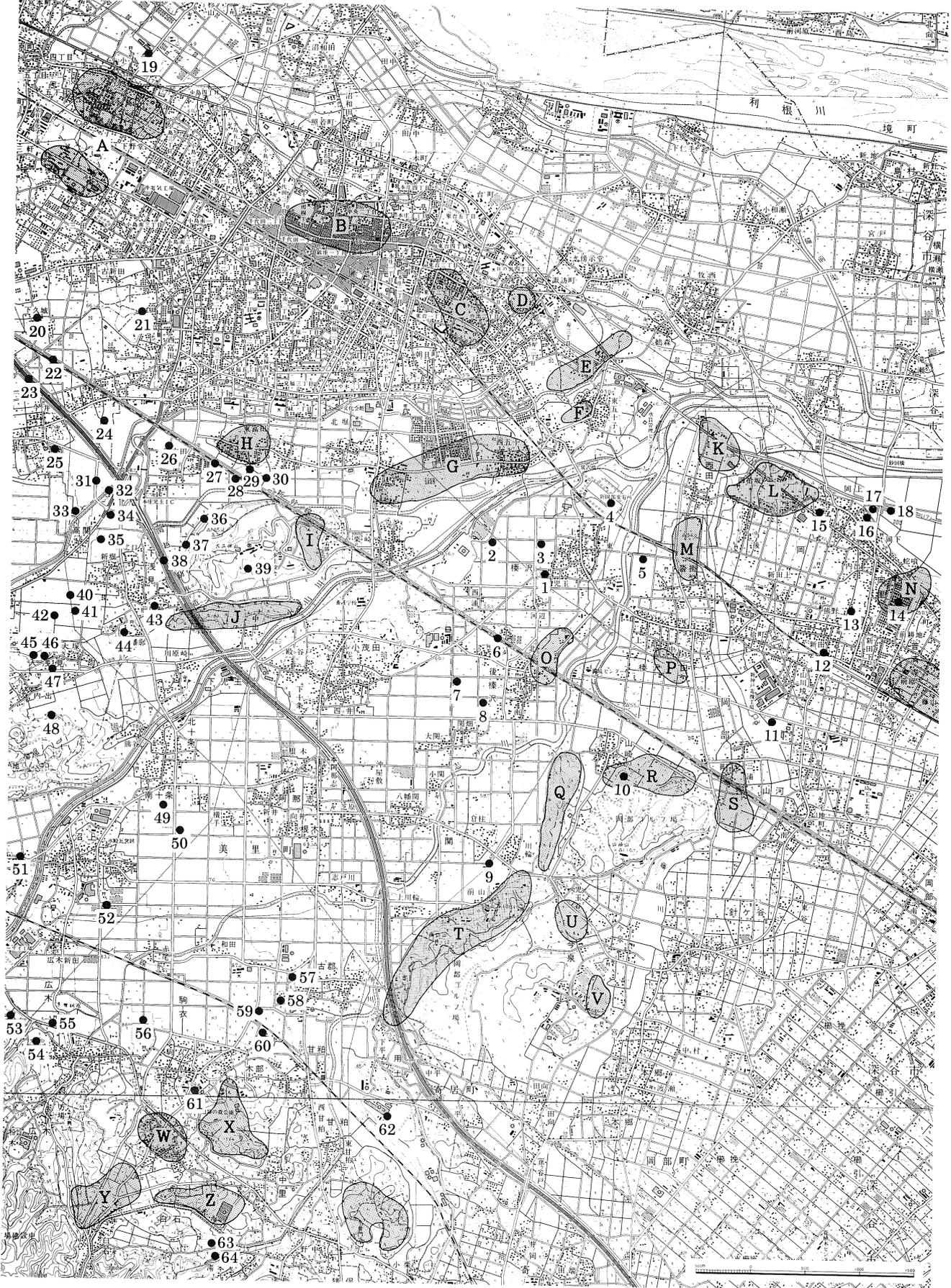
跡、稲荷塚遺跡、沖田遺跡、大寄遺跡、そして、六反田遺跡が存在し、これら遺跡の広がりには旧小山川の開析によって形成された台地上に位置していることが近年の沖田遺跡（1999 木戸）をはじめとする岡部西部工業団地の調査でも明らかになっている。

が検出された。また、熊野遺跡は政庁部分の確認はされていないが、大規模な建物跡、土橋をもつ大溝跡、道路状遺構などが確認され、陶製仏殿、畿内産暗文土器、陶枕が出土している。7世紀後半には榛沢郡衙の施工が開始されたと考えられている。また、低地部では、岡部条里遺跡の発掘調査が行われ、施工時期は明らかではないが、条里遺構が検出された。少なくとも古代律令制の施策がこの地を中心として7世紀後半にはおよんでいたことを物語る。台地上には官衙を中心に熊野遺跡をはじめ、白山遺跡、内出遺跡、新田遺跡など大規模集落が形成され、周辺の景観を一変させた。

榛沢郡内には、生産遺跡も多く認められる。西部の丘陵地帯には末野窯跡群が存在し、古墳時代後期から奈良・平安時代にいたる窯跡が広がっている。末野遺跡では、古墳時代後期の窯跡3基、古墳時代後期から奈良・平安時代の灰原跡、平安時代の窯跡1基、奈良・平安時代の工房跡などが調査され、須恵器生産の様相が明らかにされた。また、7世紀後半になると末野産の須恵器は、宮西遺跡、熊野遺跡、新田遺跡をはじめとし、郡内外に供給が行われる。土師器は古墳時代以来伝統的に生産されているが、新井遺跡では土師器焼成遺構が16基確認されている。

平安時代になると、相次いで製鉄遺跡が確認され、製鉄技術がこの地にも導入されたことがわかる。榛沢地区の岡部工業団地造成に伴って宮西遺跡を調査した際に、製鉄炉跡を検出した。また、竪穴住居跡からは小金銅仏が出土している。隣接する西浦北遺跡からも小型の製鉄炉跡が14基検出され、緑釉手付瓶、灰釉瓶が検出された。岡地区でも中宿遺跡からは、鉄滓・羽口が出土し、最近になって製鉄炉跡が確認されている。また、菅原遺跡では縦型炉を検出し、多量の鋳型も検

第2図 周辺の遺跡



出されている。鋳型は獸脚鋳型・容器鋳型などが見られ、仏具用品の生産を行っていたと考えられる。鉄生産は微地形の起伏を利用し、小型の縦型炉で行われている。このように榛沢郡では平安時代になって、鉄生産が盛んであったと考えられる。

武蔵では、猿貝北、大山、台耕地遺跡など9世紀後半頃から元荒川流域に沿って鉄生産が行われる。これとは、形態や規模・占地などが異なった小規模な縦型炉による鉄生産が榛沢地域で認められ、製鉄技術の系譜が異なると考えられる。

中世の遺構は溝跡と道路状遺構などを検出した。

平安時代末期から中世になると、この地方は、中世武士団の発生した地として知られ、主に、武蔵七党の丹・児玉・猪俣党の活躍した地域である。しかし、考古学的にはいまだ不明な点も多く、文献や伝承によるところが多い。

宮西遺跡の南には、丹党の榛沢六郎成清の墓と伝え

る地があり、この一帯を「蔵屋敷」と称し、成清の館跡との伝承がある。また、川辺館跡は、南北約130m、東西約100mの複郭構造で、堀・土塁が二重に巡る。堀の調査では15世紀以後のかわらけなどが出土している。ここも成清の館跡との伝承がある。

六反田遺跡では、南北約50m以上、東西約60mの館跡を検出し、堀状遺構に囲まれた建物跡や井戸跡を検出した。岡地区の熊野遺跡37次では、箱葉研状の溝跡や土壙墓、竪穴状遺構を検出した。また、白山遺跡でも館跡が検出されている。普濟寺地区には、小野姓猪股党に属す岡部六弥太忠澄の墓が所在する。榛沢六郎成清や岡部六弥太忠澄は、源頼朝の父義朝に仕え保元・平治の乱(1156・1159年)を記した『保元物語』にその名が見られ、頼朝の挙兵、一ノ谷の合戦、奥州征伐などでも活躍したことが『吾妻鏡』などに記されている。彼らはこの地を本拠地とし館を構えていた。

参考文献

- 梅沢太久夫 1981 『六反田遺跡』岡部町六反田遺跡調査会
木戸春夫 1998 『沖田Ⅰ／沖田Ⅱ／沖田Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第231集
埼玉県教育委員会 1987 『埼玉の館城跡』
坂戸市教育委員会 1992 『坂戸市史』通史編1
平田重之 1989 『皂樹原・檜下遺跡Ⅰ』(中世編)皂樹原・檜下遺跡調査会
鳥羽政之・平田重之 1997 『熊野遺跡』埼玉県大里郡岡部町遺跡調査会発掘報告書 第6集
中村倉司 1999 『岡部条里／戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第217集
美里町教育委員会 『美里町史』通史編

周辺の遺跡

- 1 宮西遺跡 2 大寄遺跡 3 西浦北遺跡 4 六反田遺跡 5 新井遺跡 6 東光寺裏遺跡 7 石碓遺跡 8 地神祇遺跡
9 石神遺跡 10 千光寺遺跡 11 西龍ヶ谷遺跡 12 新田遺跡 13 熊野・内出遺跡 14 白山遺跡 15 上宿遺跡
16 中宿遺跡 17 滝下遺跡 18 砂田前樋詰遺跡 19 石神境遺跡 20 下廓遺跡 21 夏目遺跡 22 諏訪遺跡
23 久城前遺跡 24 地神塔頭遺跡 25 北廓遺跡 26 九反田遺跡 27 観音塚遺跡 28 下田遺跡 29 元富遺跡
30 七色塚遺跡 31 1丁田遺跡 32 川越田遺跡 33 今井川越田遺跡 34 梅沢遺跡 35 東牧西分遺跡 36 山根遺跡
37 根田遺跡 38 雷電下遺跡 39 大久保山遺跡 40 浅見境北遺跡 41 浅見境遺跡 42 東田遺跡 43 南ノ前遺跡
44 鷺山南遺跡 45 日延遺跡 46 城の内遺跡 47 新屋敷遺跡 48 入浅見向田遺跡 49 樋之口遺跡 50 烏森遺跡
51 児玉大久保遺跡 52 宮下遺跡 53 諏訪平遺跡 54 広木上宿遺跡 55 貳麩神社前遺跡 56 北貝戸遺跡
57 上耕地遺跡 58 下道堀遺跡 59 北谷戸遺跡 60 畑中遺跡 61 木部原遺跡 62 甘粕山遺跡群 63 引地遺跡
64 滝ノ沢遺跡 A 旭小島古墳群 B 北原古墳群 C 塚合古墳群 D 御堂坂古墳群 E 鶴の森古墳群
F 東五十子古墳群 G 西五十子古墳群 H 東富田古墳群 I 浅見山古墳群 J 塚本山古墳群 K 西田古墳群
L 四十坂古墳群 M 水窪古墳群 N 白山古墳群 O 後榛沢古墳群 P 中南古墳群 Q 西山古墳群 R 千光寺古墳群
S 茶白山古墳群 T 諏訪山古墳群 U 貉山古墳群 V 大明神古墳群 W 大仏古墳群 X 木部山古墳群
Y 白石古墳群 Z 羽黒山古墳群

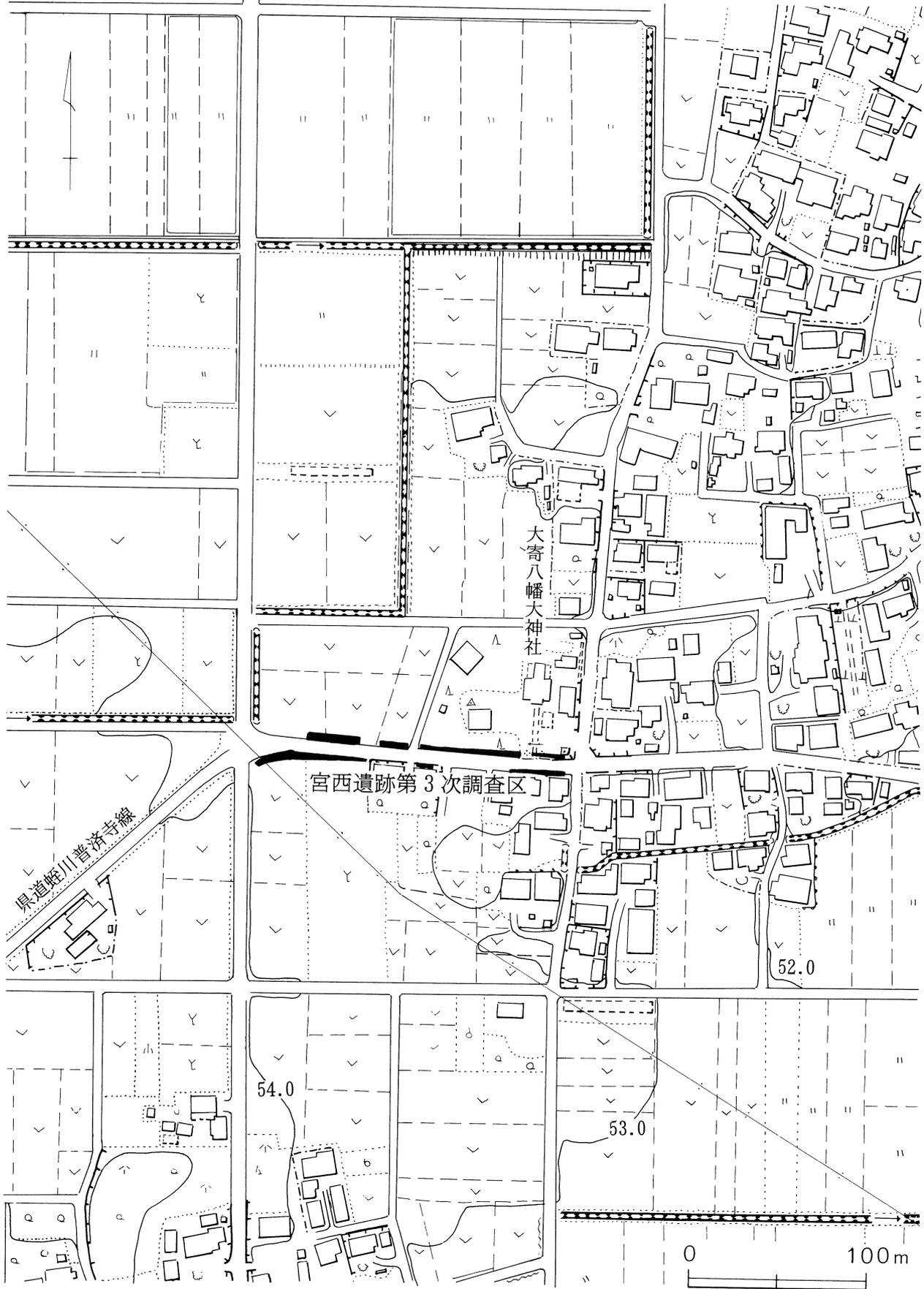
第3図 周辺遺跡遺構分布図





木戸春夫 1998 「沖田Ⅰ／沖田Ⅱ／沖田Ⅲ」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第231集より転載

第4図 宮西遺跡第3次調査区位置図



Ⅲ 遺跡の概要

宮西遺跡は、埼玉県大里郡岡部町大字榛沢字宮の西に所在する。楯引台地が小山川と志戸川の侵食を受けた北東端にあたる。遺跡の範囲は南北約230m、東西約500mである。遺跡の面積は推定で約110,000㎡である。現地表面の標高は、中心部今回の調査区で53m、である。遺跡は南西部で54m、北東部で52mと低く、全体の地形は平坦であるが緩やかに北東に向かって傾斜をもつ。

周辺には、台地の開析によって形成された小支谷と小山川の氾濫によって形成された自然堤防が発達しており、微高地を単位に遺跡が分布する。宮西遺跡に隣接して、沖田遺跡、大寄遺跡、西浦北遺跡、六反田遺跡が分布する。

本書で報告する宮西遺跡は 県道蛭川普済寺線の建設に伴う発掘調査であり、当事業団が平成9年度に実施し、宮西遺跡の第3次調査にあたる。第1・2次調査は平成8年と平成9年にそれぞれ岡部西部工業団地造成に伴い発掘調査が実施されている。

遺跡は宮西遺跡の範囲のほぼ中央部にあたり、大寄八幡神社に面した現道の拡幅調査である。調査面積は550㎡、調査区は幅1～1.5m、全長150mほどである。便宜的に調査区をA～G区に分けた(第5図)。G区か

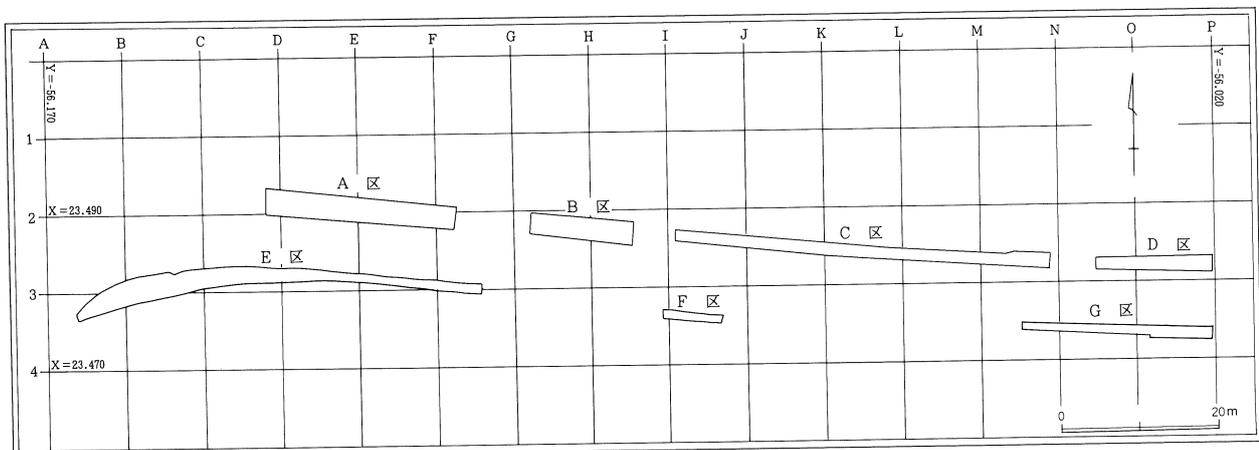
らの遺構、遺物は検出されなかった。

調査区は、国家座標第IV系に基づく、北西方向から10mグリッドを設定した(第6図)。グリッドの原点の座標はX=23,500、Y=-56,170である。

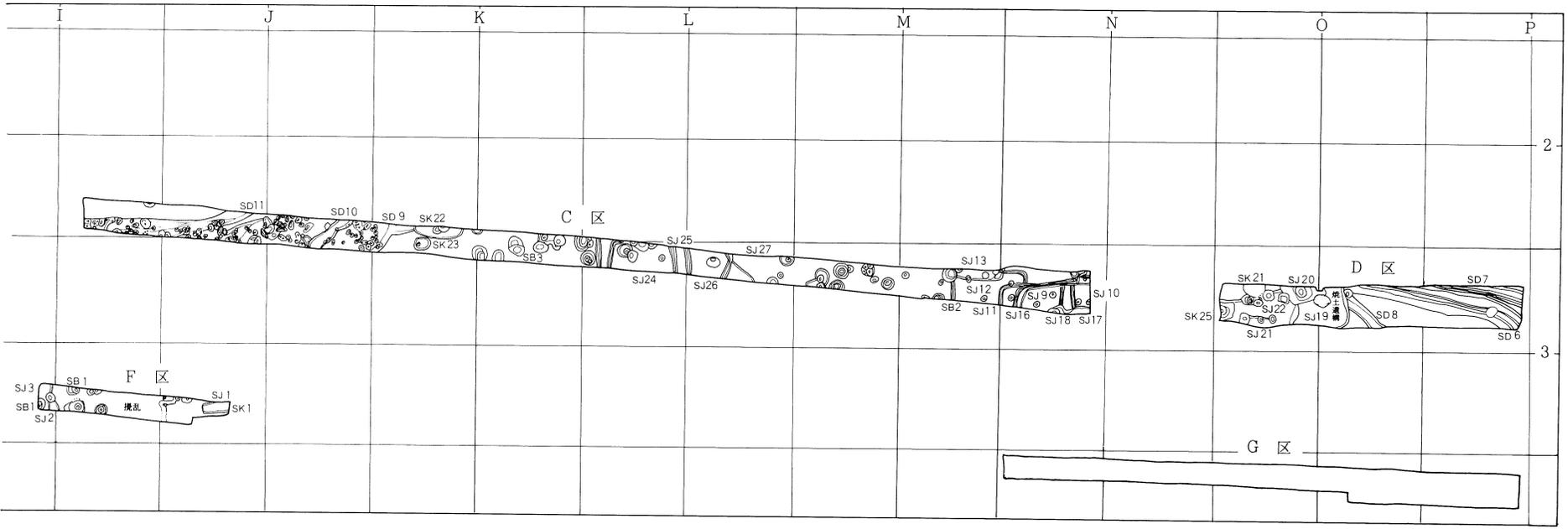
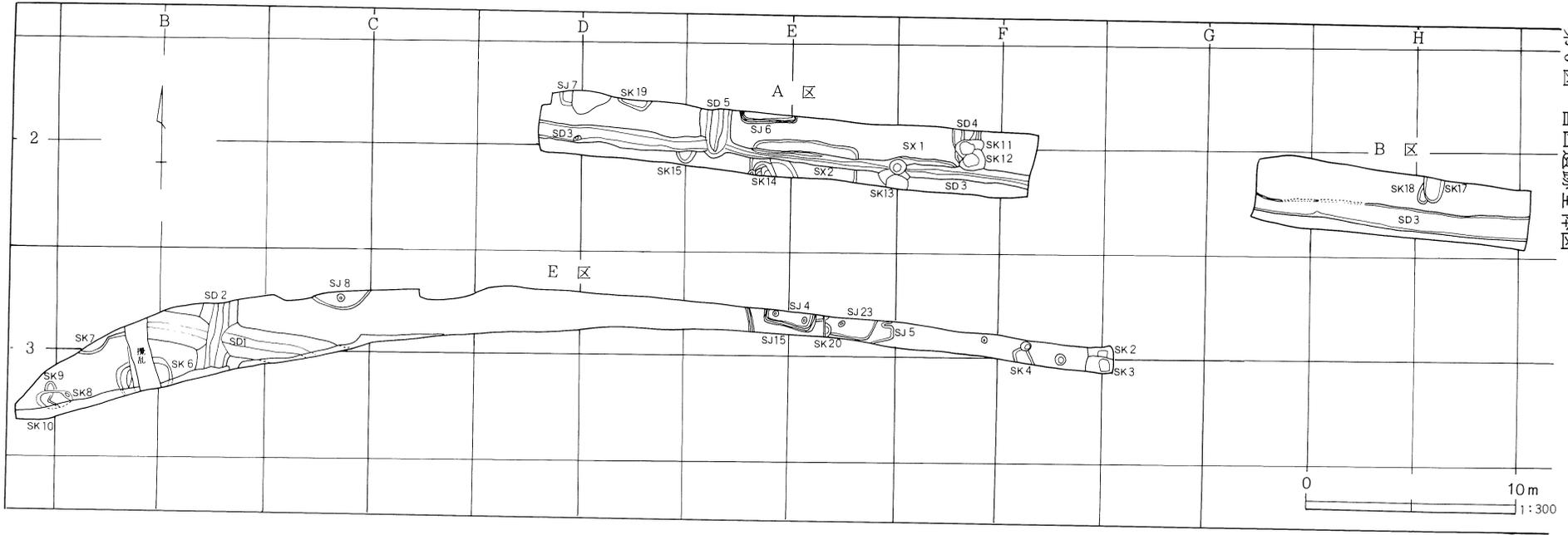
調査の結果、宮西遺跡では、奈良・平安時代の竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡3棟、土壙、ピットを検出した。中・近世の遺構は溝跡5条、土壙、道路状遺構を検出した。調査区が道路拡幅であるため幅が狭くいずれの遺構も全体が明らかにできない。奈良・平安時代の竪穴住居跡は、壁の一部のみ検出されたり、カマドの煙道部分がわずかに断面で確認された。また、遺構は単独で重複の見られない住居跡と、数軒が主軸方向をほぼ同じくして、わずかにずらして建て替えが行われる住居跡などが存在し、狭い調査範囲にもかかわらず多くの竪穴住居跡を検出した。竪穴住居跡からは土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・蓋・皿・高台付坏・甌・甕などの遺物を検出した。特に、調査区の東側では遺構確認面に遺物が多く分布していた。8世紀前半の土器に伴い鉄鏃や脚部に透かしをもつ円面硯が検出した。

中・近世の遺構は、溝跡、土壙と硬化面をもつ道路状遺構が検出された。

第5図 宮西遺跡グリッド網図



第6図 宮西遺跡全体図



IV 遺構と遺物

1. 奈良・平安時代

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第7図)

調査F区の東側のI-3グリッドに位置する。調査区は幅1.2mと狭い。北側と南側は調査区域外となり遺構が伸びる。また、東側は攪乱によって遺構が壊されていた。床面まで達しており、西側の壁も確認できず、住居の規模を判断することはできなかった。このため検出した遺構部分は、カマド南側半分のみであった。

住居跡の平面形態は、攪乱範囲内で広がるものと仮定すれば、小型の方形となる。規模は不明であり、確認面からの深さは10cm程と極めて浅い。主軸方位はN-90°-Eである。

床面は、カマド南側にわずかに残存する。地山のロームを利用し、床面上には微量の炭化物粒子と焼土粒子が確認された。床面は軟らかく周溝は検出されなかった。調査範囲が狭いため貯蔵穴や柱穴は検出できなかった。

カマドは、東壁に設置されていた。壁からの掘り込みは東側へ0.45m、深さは床面とほぼ同じレベルで掘り込まれており10cmと浅い。カマドの形態は隅丸方形である。焚き口幅は20+ ϵ cm、燃焼部と煙道部との境は段をもちわずかに直立して立ち上がる。煙道部分は短く立ち上がりは緩やかである。カマドは奥壁構造の形態である。カマド底面は平坦で、側面はともに連続して立ち上がる。カマド埋土は、3層に分層でき、下層の3層は灰層で、中層の2層は焼土粒子および炭化粒子を多く含む堆積層であった。

出土遺物は、土師器環、鉢、小型甕、甕、台付甕、須恵器環などをカマド内から検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはなかった。図示した遺物は第8図1~6である。1は暗文環である。口縁部の横ナデは幅1.55cmとやや幅をもつ。内面には放射状の暗文が施されている。体部に未調整部を

もち、底部は丸底気味になる。赤褐色で胎土は緻密である。2は小型の鉢である。口縁部は横ナデを施し、体部外面は平滑な横ヘラケズリ、内面も平滑でナデ調整が施されている。3は小型甕の口縁部と考えられる。口唇部外面には幅0.6cmほどの面をもち、断面三角形状になり尖る。4は北武蔵型甕の底部である。器肉は薄く、底径は小さい。外面は縦ヘラケズリ、下端は横方向に一条のヘラケズリを施す。内面は木口状の工具によってナデが施され器面は滑らかである。5は台付甕の脚部である。3、4、5の土師器は胎土に雲母片を多く混入させる。6は末野産の須恵器環である。器面はザラザラする。口唇部は外に大きく開き、膨らみをもつ。

図示した遺物はいずれもカマド内から出土した。このほかカマド内からは甕の胴部破片と須恵器環の破片が検出された。

第2号住居跡 (第7図)

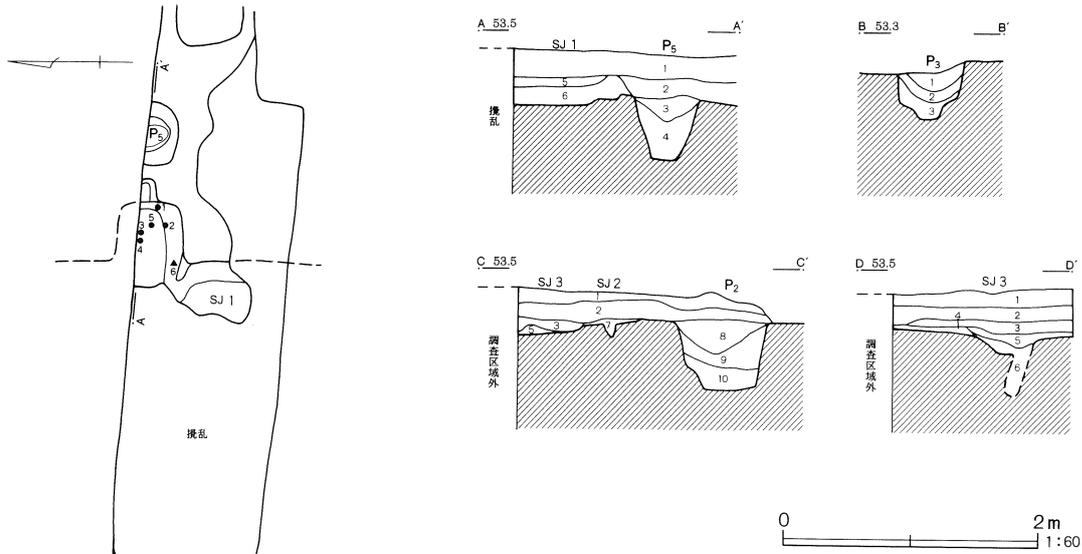
調査F区西側のH・I-3グリッドに位置する。南側は調査区域外となり遺構が伸びる。また、西側は第3号住居跡と重複関係にある。住居跡は南北方向に伸びる北東コーナー部から東壁の一部を検出し、それ以外は確認できなかった。西側は第3号住居跡が、やや深く掘り込んでいるため本住居跡の壁は確認できず、住居の規模を判断することはできなかった。このため検出した遺構部分は、北東側の壁および床面の一部であった。

住居跡の平面形態、規模は不明である。カマドの位置も不明であることから主軸方位が判断できないが壁の方向から判断すると概ねN-75°-Eである。

床面は、確認面から5cm程と浅い掘り込みであった。ローム面を床面としやや硬化面をもつ。壁溝は検出されず、壁の立ち上がりは緩やかである。

出土遺物は検出されなかった。

第7図 第1・2・3号住居跡



第1号住居跡カマド Pit5

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 焼土粒子、炭化粒子を少量含む (SJ2・3、Pit2の2層に同じ)
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子を少量、焼土粒子、炭化粒子を含む
- 3 黒色土 (10YR2/1) ローム粒子を多量含む
- 4 黒色土 (10YR2/1) ロームブロックを多量含む
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子を少量、焼土粒子、炭化物を含む
- 6 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土ブロック、炭化物を多量、ローム粒子を少量含む

第2・3号住居跡 Pit2 SB1 Pit1

- 1 黒色土 (10YR2/1) ローム細粒子を微量、径5mm~10mmの砂利を含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 焼土粒子、炭化粒子、鉄分少量、白色細粒子含む
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) 白色細粒子微量、炭化粒子、ローム粒子、ロームブロックを含む
- 4 黒褐色土 (10YR3/2) ロームブロックを多量、ローム粒子、黒色粘土ブロックを含む
- 5 黒褐色土 (10YR2/2) ロームブロックを多量、焼土粒子を少量含む
- 6 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土粒子、炭化粒子を少量、ローム粒子、ロームブロックを含む
- 7 暗褐色土 (10YR3/3) ロームブロックを含む
- 8 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子を多量含む
- 9 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土粒子、炭化粒子を少量、ロームブロックを多量含む
- 10 褐色土 (10YR3/3) 焼土粒子、炭化粒子を少量、ロームブロックを多量含む

第3号住居跡 (第7図)

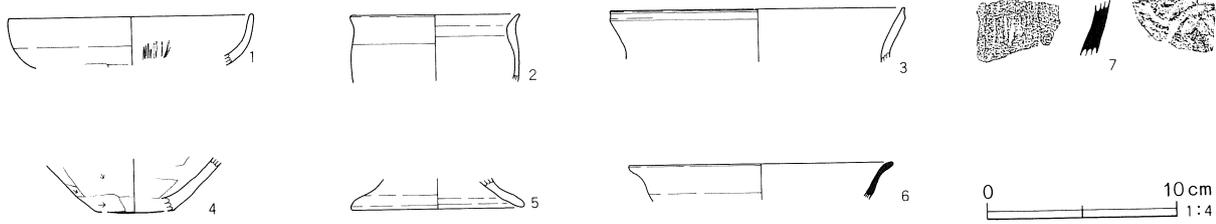
調査F区東端のH-3グリッドに位置する。調査区は幅1.2mと狭く、北側と南側は調査区域外となり遺構が伸びる。また、東側も調査区域外となり遺構が伸びる。住居跡の全体が不明である。このため検出した遺構部分は、東壁と床面の一部のみであった。

住居跡は、三方が調査区域外であるため平面形態、規模を判断することはできなかった。また、住居跡に敷設されるカマドや貯蔵穴ならびに柱穴も確認できなかった。主軸方位は、カマドの位置も不明であることから判断できないが壁の方向から判断するとS-78°-Eである。

床面は、確認面から10cm前後と極めて浅い。断面観察でも認められたが第4層はシルト質でロームブロックを多く含むことから張り床と考えられる。壁溝は検出されず、壁は直立して立ち上がる。

出土遺物は、土師器坏・甕の破片と図示した須恵器甕の胴部破片(第8図7)を検出した。7は小型の須恵器甕の胴部破片とみられ、末野産である。調整は、外面に平行叩きを施し、内面に青海波文が残る。また、図示できなかったが土師器甕の小破片は口縁部下端から胴部にかけての一部で外面には横方向のヘラケズリがみられた。

第8図 第1・3号住居跡出土遺物



第1表 第1・3号住居跡出土遺物観察表 (第8図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(12.8)	(2.6)		AB C D F	普通	赤褐色	5	S J - 1 カマド No. 1	暗文
2	土師器鉢	(8.8)	(3.6)		A B D F	普通	黒褐色	10	S J - 1 カマド No. 1	
3	土師器小型甕	(15.4)	(2.8)		A B D F	普通	暗褐色	5	S J - 1 カマド	
4	土師器甕		(2.8)	(4.1)	A B C D E F	普通	褐色	20	S J - 1 カマド	
5	土師器台付甕		(1.6)	8.9	A B C D	普通	褐色	40	S J - 1 カマド	
6	須恵器坏	(13.8)	(1.9)		A B C 片	普通	灰色	5	S J - 1 カマド	末野産
7	須恵器甕				A C F	普通	褐灰色		S J - 3	

第2表 第1・3号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師器類	土師甕類	土師壺類	須恵器類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J - 1	F	破片数(片)	7	22		3				
S J - 1	F	重量(g)	35.8	258.2		6.5				
S J - 3	F	破片数(片)	1	1			1			
S J - 3	F	重量(g)	2.9	4.2			17.2			

第4号住居跡 (第9図)

調査E区中央やや東側のD・E-2グリッドに位置する。調査区は幅1.2mと狭く、北側は調査区域外となり遺構が伸びる。このため、住居跡は南壁と東西壁の一部を確認でき、北側に伸びる東西壁および北壁は不明である。住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複関係は、本住居跡の外側に第15号住居跡が位置する。また、東側には第5号住居跡、第23号住居跡、第20号土壌が位置する。

住居跡の平面形態は、小型の方形と推定される。規模は東西軸2.42m、南北軸0.91+ \pm m、深さ0.12mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はS-77°-Eである。

床面は、南側半分ほどが検出された。地山のロームを利用し、緩やかな凹凸をもつ。床面上には微量の炭化物粒子と焼土粒子が確認された。床面は比較的堅く踏み固められていた。

周溝は、調査範囲にかかる壁部の直下で全て確認できた。幅12cm、深さ8cmである。

柱穴は、住居跡南半部であることから2ヶ所検出した。P1は西壁から約0.38mの位置に掘り込まれていた。直径0.18m、深さ0.20mであった。P2は東壁から約0.38mの位置に掘り込まれていた。直径0.22m、深さ0.20mであった。P1とP2の柱穴間隔は1.50mであった。掘り込まれた柱穴の位置は両柱穴とも壁から同じ位置であった。

調査範囲が狭いため貯蔵穴、カマドは検出できなかった。

出土遺物は、土師器甕、須恵器甕などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはなかった。図示した遺物は第9図1・2である。いずれも土師器甕の底部破片である。1は二次的焼成を受け内外面とも黒褐色をしている。底部外面は丁寧なヘラケズリ調整を、内面はナデ調整を施している。2は内外面とも暗褐色をしている。底部外面は細かなヘラケズリ調整を、内面はナデ調整を施している。1・2ともに器肉がやや厚く丸底気味に開いて立ちあがり、推定底径は7.0cmとやや大きい。

第5号住居跡（第9・10図）

調査E区中央やや東側のE-2グリッドに位置する。調査区は幅1.2mと狭く、北側および南側は調査区域外となり遺構が伸びる。このため、住居跡はカマドの一部、東壁と南壁の一部を確認した。カマドは東壁に敷設されているが、中心部から右袖にかけて検出でき、北側に伸びている。住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複関係は、本住居跡の西側に第23号住居跡が位置する。また、その東側には第4号住居跡、第15号住居跡、第20号土壙が位置する。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸1.22+ \pm m、南北軸1.20+ \pm m、深さ0.29mである。主軸方位は、N-85°-Eである。

床面は、住居跡の南東コーナー部分のみ検出できた。地山のロームを利用し、緩やかな凹凸をもつ。床面上には微量の炭化物粒子と焼土粒子が確認された。床面は比較的堅く踏み固められていた。

カマドは、東壁に設置されていた。壁からの掘り込みはほとんど認められず、わずかに東側へ0.10m程で住居内に袖が長く伸びて検出された。右袖は地山のローム土を掘り残して構築されている。袖幅0.18m、長さ1.00mであった。掘り込みの深さは、床面から10cm程である。カマドの形態は隅丸方形である。焚き口が最も広がっており幅50+ \pm cm、燃焼部と煙道部との境はわずかに段をもち、底面は緩やかに立ち上がる。煙道部分は短く直に立ち上がる。側面は底面から直立して立ち上がり、被熱により焼土化している。カマド埋土は、第5層に焼土粒子が多く認められ、ローム粒子が多いことから、天井の崩落土の可能性が考えられる。

周溝、柱穴、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は、土師器環・甕などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはなかった。図示した遺物は第10図1・2である。いずれも土師器環の口縁部破片である。1は口唇部と体部中位の外面に輪積み痕が明瞭に残る。内面は丁寧な横ナデを施し平滑である。2も1と同様の手法によるが、外面は横ナデを施し、やや丁寧に仕上げている。この

ほか土師器甕の胴部破片を検出している。

第15号住居跡（第9図）

調査E区中央やや東側のD・E-2グリッドに位置する。調査区は幅1.2mと狭く、北側および南側は調査区域外となり遺構が伸びる。このため、住居跡は中央部の一部、東壁と西壁の一部を確認した。住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複関係は、本住居跡の中央に第4号住居跡、東側に第23号住居跡、第5号住居跡が位置する。また、東壁には第20号土壙が位置する。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸3.98m、南北軸1.20+ \pm m、深さ0.06mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はS-87°-Eである。

床面は、住居跡の中央部分と考えられる。地山のロームを利用し、緩やかな凹凸をもち比較的堅く踏み固められていた。中心部分は第4号住居跡によって切り込まれ凹む。

周溝は、調査範囲にかかる東壁・西壁部分の直下で全て確認できた。幅12~16cm、深さ8~12cmである。

カマド、柱穴、貯蔵穴は検出できなかった。

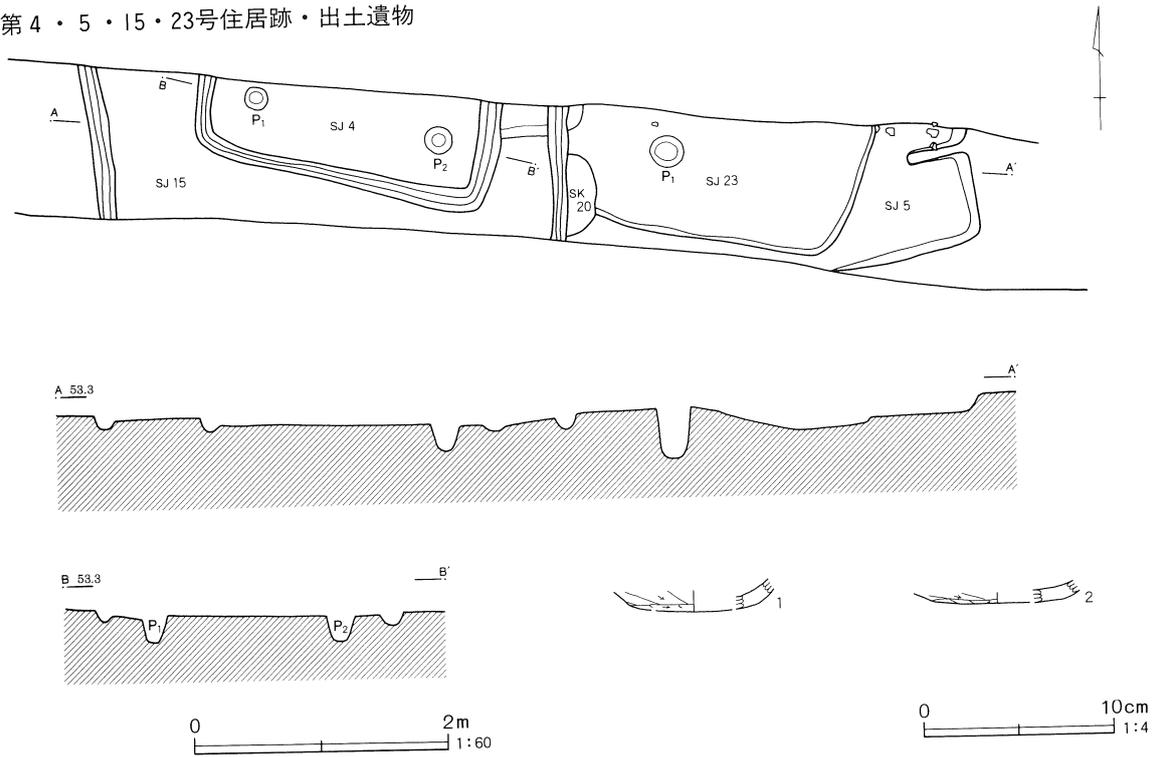
出土遺物は、検出されなかった。

第23号住居跡（第9図）

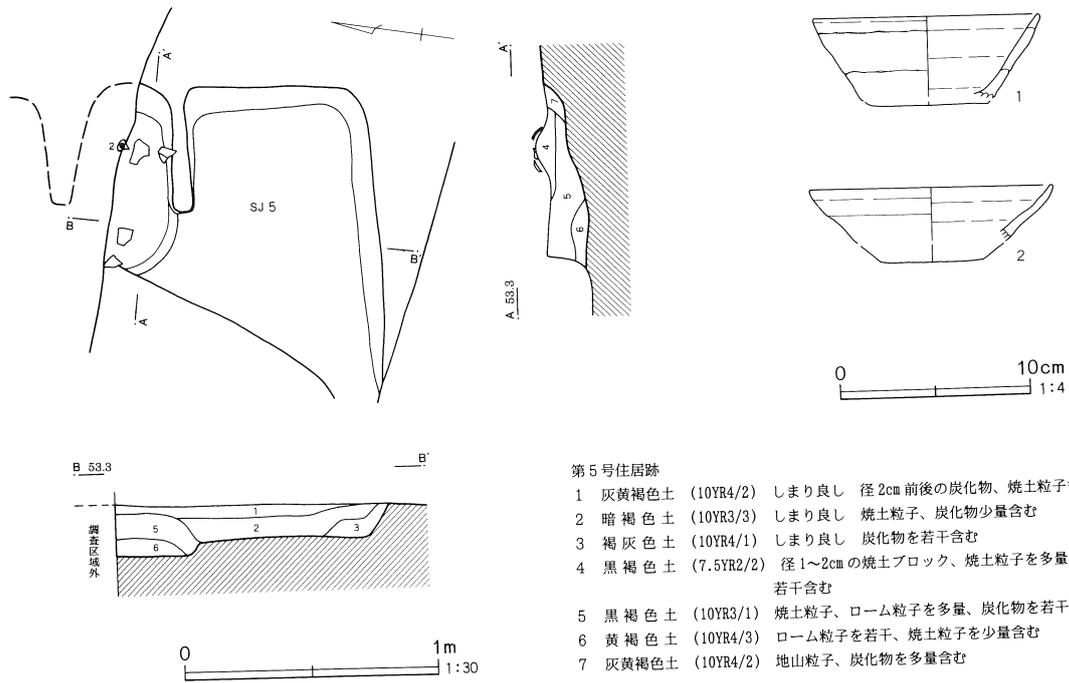
調査E区中央やや東側のE-2グリッドに位置する。調査区は幅1.2mと狭く、北側は調査区域外となり遺構が伸びる。このため、住居跡は南側の一部、東壁の一部を確認した。住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複関係は、本住居跡の西側に第4号住居跡、東側に第5号住居跡が位置する。また、南壁の西寄りに第20号土壙が位置する。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸2.42+ \pm m、南北軸1.10+ \pm m、深さ0.04mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが、東西軸の方位はS-78°-Eである。軸方向は第4号住居跡とほぼ同じであることから軸をそろえた立て替えの住居跡と考えられる。両住居跡の関係が注意される。

第9図 第4・5・15・23号住居跡・出土遺物



第10図 第5号住居跡・出土遺物



第5号住居跡

- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりよし 径2cm前後の炭化物、焼土粒子多量含む
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) しまりよし 焼土粒子、炭化物少量含む
- 3 褐灰色土 (10YR4/1) しまりよし 炭化物を若干含む
- 4 黒褐色土 (7.5YR2/2) 径1~2cmの焼土ブロック、焼土粒子を多量、炭化物を若干含む
- 5 黒褐色土 (10YR3/1) 焼土粒子、ローム粒子を多量、炭化物を若干含む
- 6 黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒子を若干、焼土粒子を少量含む
- 7 灰黄褐色土 (10YR4/2) 地山粒子、炭化物を多量含む

床面は、住居跡の南半部分と考えられる。地山のロームを利用し、中央部分が高く地山を掘り残してつくられ、周囲は深いところで約40cm程掘り込み張り床を施す。ドーナツ型の掘り方をもつ住居跡と推定される。西側は第15号住居跡によって切り込まれ、西壁を検出

することはできなかった。

周溝、カマド、柱穴、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物も、検出されなかった。

第3表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第9図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器甕			(7.0)	A E F片	普通	暗褐色	15	カマド	
2	土師器甕			(7.0)	A B D F	良好	黒褐色	20	カマド	

第4表 第4号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師環類	土師甕類	土師壺類	須恵環類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-4	E	破片数(片)	1	4			1			
S J-4	E	重量(g)	1.7	46.0			17.0			

第5表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第10図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器環	(11.8)	(4.3)		A B C D F片	普通	褐色	20		
2	土師器環	(12.8)	(2.8)		A B C D F	良好	茶褐色	10	No.3	

第6表 第5号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師環類	土師甕類	土師壺類	須恵環類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-5	E	破片数(片)	2	8						
S J-5	E	重量(g)	31.0	122.5						

第6号住居跡 (第11図)

調査A区中央のD・E-2グリッドに位置する。調査区は幅3.0mと狭い。北側は調査区域外となり遺構が伸びる。このため、住居跡は南側の一部、東壁、西壁の一部を確認した。住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複関係は、認められなかった。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸2.74m、南北軸0.60+£m、深さ0.33mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はN-87°-Eである。

住居跡の埋土は自然堆積と考えられるが、第2～6層は焼土粒子が多量に含まれ、ロームブロックが混在

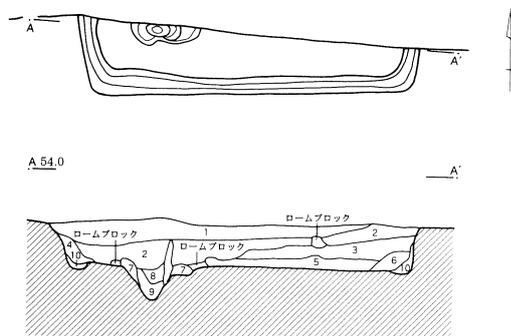
することから短時間に埋まったと推定される。また、床直上の第5層と第6層は焼土粒子・炭化物を多量に含むことから焼失家屋の可能性が考えられる。

床面は、住居跡の南半部分を検出した。地山のロームを利用し、ほぼ平坦である。

周溝は、調査範囲にかかる東壁から南壁および西壁部分の直下で全て確認できた。幅13cm前後、深さ6cmである。周溝埋土はしまりのない柔らかな黒褐色土を主体とする。

カマド、柱穴、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物はわずかであり、第1層からは土師器甕の器肉の薄い胴部破片が検出された。



第6号住居跡

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) しまりよし 焼土粒子、炭化物、土器の小片を含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) しまりよし 1層よりも軟らかい。焼土粒子を多量含む
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) しまりよし ローム粒子を若干、焼土粒子を多量含む
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) 軟らかい土 焼土微粒子を多量含む
- 5 暗褐色土 (10YR3/4) やや粘性有り ローム粒子、焼土粒子、炭化物多量含む
- 6 暗褐色土 (10YR4/4) ザクザクの土 焼土粒子、炭化物を多量、黒褐色土を含む
- 7 黄褐色土 (10YR4/3) しまりよし 黒褐色土粒子を若干含む
- 8 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子を多量、炭化物を少量含む
- 9 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性有り 鉄分を多量含む
- 10 褐色土 (10YR4/4) ザクザクの土 黒褐色土を多量含む

0 2m
1:60

第7表 第6号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師環類	土師甕類	土師壺類	須恵環類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-6	A	破片数(片)	2			1				
S J-6	A	重量(g)	3.0			2.7				

第7号住居跡 (第12図)

調査A区の西端側のC-1・2グリッドに位置する。北側は調査区域外となり遺構が伸びる。東側は倒木痕によって住居跡は壊されている。このため、住居跡は南西コーナーの一部を確認した。南東コーナーは住居跡の掘り込みも浅いため検出できず、住居跡全体の規模を判断することはできなかった。

住居跡の平面形態は、不明である。規模は東西軸0.68± ϵ m、南北軸0.50± ϵ m、深さ0.07mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はS-88°-Eである。軸方向は第6号住居跡とほぼ同じであることから軸をそろえて住居跡が構築されていると考えられる。両住居跡の関係が注意される。

床面は、住居跡の南西コーナー部分のみ検出された。地山のロームを利用し、確認面からの掘り込みは浅く、平坦である。

東側は深さ0.70m、上幅で1.84mの倒木痕によって大きく壊されており、南壁は確認できない。また、東壁は、掘り込みが浅いためか、あるいは、倒木痕の範囲内の規模によるものか不明だが検出することはでき

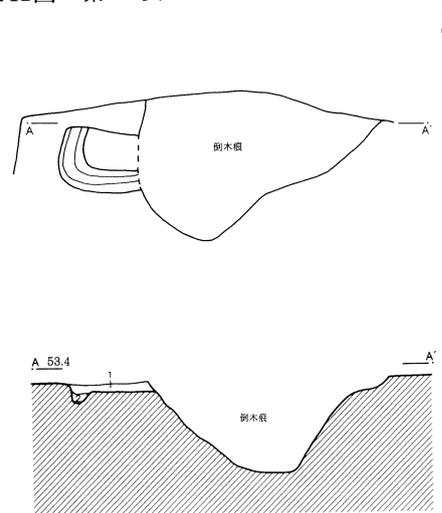
なかった。

周溝は、調査範囲にかかる南西壁部分の直下で確認できた。幅18cm、深さ10cmであった。

カマド、柱穴、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は、少量検出された。

第12図 第7号住居跡



第7号住居跡

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) フカフカの土 径3~5cmの地山ブロックを含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) フカフカの土 径2cm前後の地山ブロックを含む

0 2m 1:60

第8表 第7号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師坏類	土師甕類	土師壺類	須恵坏類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-7	A	破片数(片)		1						
S J-7	A	重量(g)		4.0						

第8号住居跡 (第13図)

調査E区西側のB-2グリッドに位置する。北側は調査区域外となり遺構が伸びる。

住居跡は南東コーナーの一部を確認した。コーナー部分はやや隅丸方形をしていた。住居跡全体の規模を判断することはできなかった。

住居跡の平面形態は、不明である。規模は東西軸1.82m、南北軸1.80m、深さ0.18mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はS-67°-Eである。軸方向は他の住居跡とはやや異なる。

住居跡の埋土は、4層の堆積層からなる。第2層は

地山粒子・焼土粒子を多量に含み床面直上に堆積していた。住居跡とした根拠は覆土の土層堆積の様子から判断した。

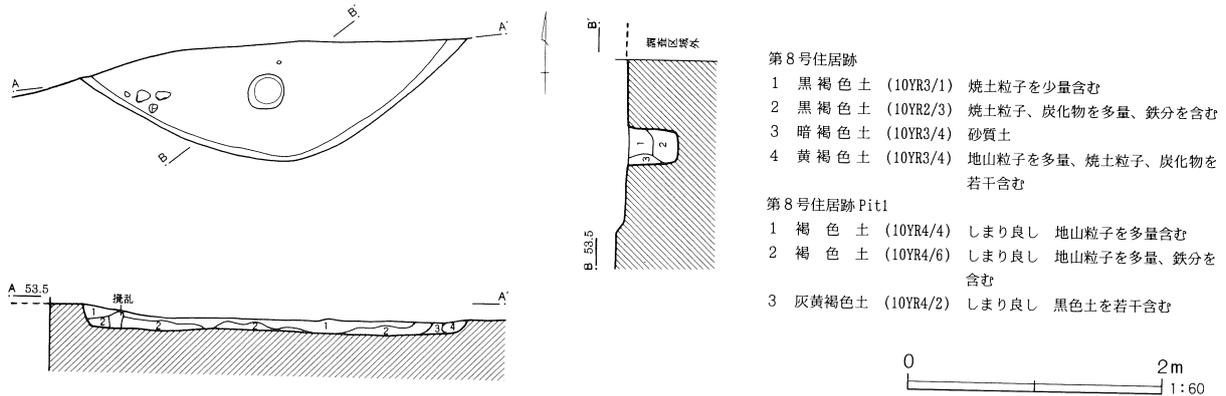
床面は、住居跡の南東コーナー部分のみ検出された。地山のロームを利用し、確認面からの掘り込みは浅く、平坦である。

柱穴は、1ヶ所検出できた。南壁から43cm程の位置に掘り込まれ直径27cm、深さ40cmであった。

周溝、カマド、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は、ほとんど検出されなかった。わずかに、南壁際の床面直上から自然石が4点まとまって検出された。

第13図 第8号住居跡



第9表 第8号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師坏類	土師甕類	土師壺類	須恵坏類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-8	E	破片数(片)							1	
S J-8	E	重量(g)							2.3	

第9号住居跡 (第14・15図)

調査C区東側のM-2グリッドに位置する。調査区は幅2.0~1.5mと狭く、北側および南側は調査区域外となり遺構が伸びる。また、東側もC区東端にあたり調査区域外となる。第9号住居跡を検出した地点からは、幅6.5mの距離の中に9軒の住居跡の重複が確認され、第10・11・12・13・16・17・18号住居跡が存在する。

本住居跡は、検出した9軒の住居群の中の中央部分に位置し、北壁と西壁の一部を確認した。南側に伸びる南壁および西壁の一部は不明であり、東側も調査区域外となることから東壁および北壁の一部は不明である。このため、住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複する遺構は、断面観察から本住居跡の上層部分に第10・17・18号住居跡が存在する。また、本住居跡に切られる第11・16号住居跡が存在し、西側に第12・13号住居跡が位置している。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸3.40+ \pm m、南北軸1.40+ \pm m、深さ0.24mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はN-90°-Eである。

住居跡の埋土は断面観察の第9~12層である。

床面は、北側部分が検出された。地山のロームを利用し、ほぼ平坦である。床面上には微量の炭化物粒子

と焼土粒子が確認された。床面は比較的堅く踏み固められていた。

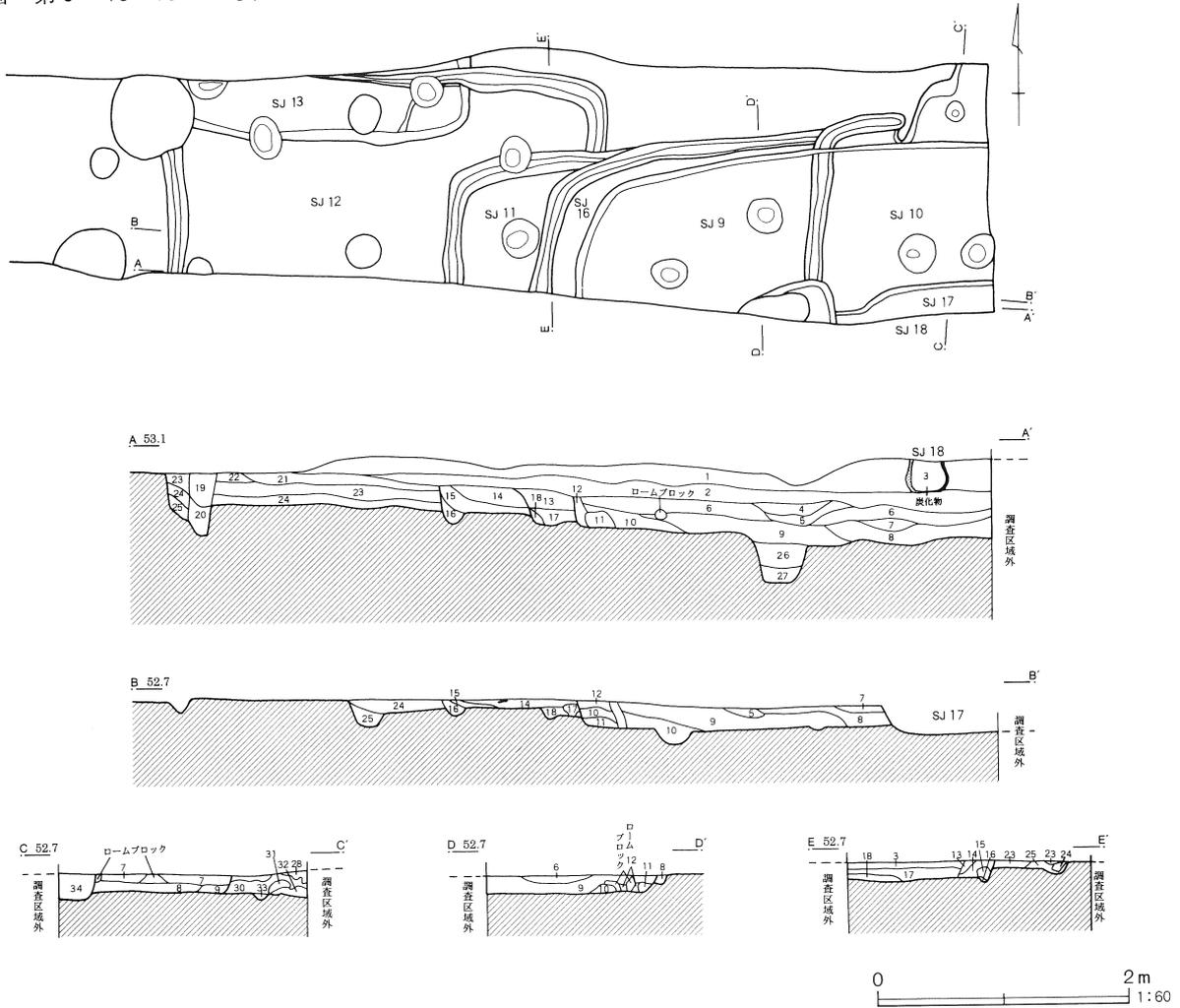
柱穴は、住居跡北半部であることから2ヶ所検出した。P1は北壁から約0.72mの位置に掘り込まれていた。直径0.27m、深さ0.08mであった。P2は北壁から約0.62mの位置に掘り込まれていた。直径0.29m、深さ0.12mであった。P1とP2の柱穴間隔は中心部で2.50mであった。掘り込まれた柱穴の位置は両柱穴とも壁からほぼ同じ位置であった。

周溝は、検出されず、調査範囲が狭いため貯蔵穴、カマドは検出できなかった。

出土遺物は、土師器坏・皿・甕、須恵器坏・皿・蓋などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはなかった。図示した遺物は第16図1~22である。重複が多く第9号住居跡の上層にも住居跡が存在していたことから遺物は他時期のものが認められた。しかし、いずれの遺物も第9号住居跡として取り上げを行った。遺物分布図(第16図)および出土レベルなど詳細に検討すると、4~8の土師器坏、12の暗文坏、16の須恵器蓋、および、22の須恵器坏は上層に存在する第10・17・18号住居跡の出土遺物の可能性がある。

本住居跡に伴う遺物は、1~3、9、10の土師器坏、11の暗文坏、13~15の土師器皿と考えられる。

第14図 第9～13・16～18号住居跡



C区 南壁 (第9・10・11・12・14・16・17・18号住居跡 Pit24・Pit26)

- 1 暗褐色土 (7.5YR3/4) しまり良し 焼土粒子を多量、地山粒子を若干含む
- 2 灰褐色土 (7.5YR4/2) 2層よりもしまり良し 焼土粒子、炭化物を多量、地山粒子を若干含む

第18号住居跡

- 3 暗褐色土 (7.5YR3/3) 炭化物を多量含む 側壁と底面は焼土化 SJ-18の煙道部分

第9号住居跡

- 4 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土粒子を多量含む
- 5 黒褐色土 (10YR3/1) 径2~3cmの焼土ブロックを多量含む
- 6 黒褐色土 (10YR3/2) しまり良し 焼土粒子を多量含む

第17号住居跡

- 7 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を多量、焼土粒子、炭化物を少量含む
- 8 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ブロック、炭化物を多量含む

第9号住居跡

- 9 暗褐色土 (10YR3/3) 地山粒子、焼土粒子、炭化物を若干含む
- 10 褐色土 (10YR4/1) 地山粒子を少量含む
- 11 灰黄褐色土 (10YR4/2) 炭化物、地山粒子を多量含む
- 12 黒褐色土 (10YR3/2) 焼土粒子、炭化物を多量含む

第11号住居跡

- 13 黒褐色土 (7.5YR2/2) 焼土粒子を少量含む
- 14 黒褐色土 (7.5YR3/1) 13層に比し焼土粒子を多量、地山粒子を若干含む
- 15 黒褐色土 (10YR3/1) しまり良し ロームブロックを含む
- 16 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を若干、焼土粒子、炭化物を多量含む

第16号住居跡

- 17 黒褐色土 (10YR3/1) しまり良し 地山粒子、焼土粒子、炭化物を多量含む

- 18 灰黄褐色土 (10YR4/2) やや粘性有り 地山ブロックを含む

C区 Pit24

- 19 黒色土 (10YR2/1) 地山粒子、炭化物を少量含む
- 20 黒褐色土 (10YR3/1) やや粘性有り 地山小ブロックを多量含む

第12号住居跡

- 21 黒褐色土 (10YR2/3) しまり良し 炭化物を少量含む
- 22 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良し 地山粒子を多量含む
- 23 黒褐色土 (10YR3/2) しまり良し 焼土粒子、炭化物を少量含む
- 24 褐色土 (10YR4/1) しまり良し 地山粒子、地山ブロックを含む
- 25 黒褐色土 (2.5Y3/1) 地山粒子を多量、炭化物を若干含む

C区 Pit26

- 26 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を多量、焼土粒子を若干含む
- 27 黒褐色土 (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む

第10号住居跡

- 28 黄褐色土 (10YR6/3) 径約4~8cmの焼土ブロックを部分的に含む (カマドの天井が崩落した粘土)

- 29 黒色土 (10YR2/1) 径3~4cmの地山ブロックを含む

- 30 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物を多量、径2~3cmの粘土ブロックを含む

- 31 黒色土 (10YR1.7/1) 径4cm前後の地山ブロックを多量含む

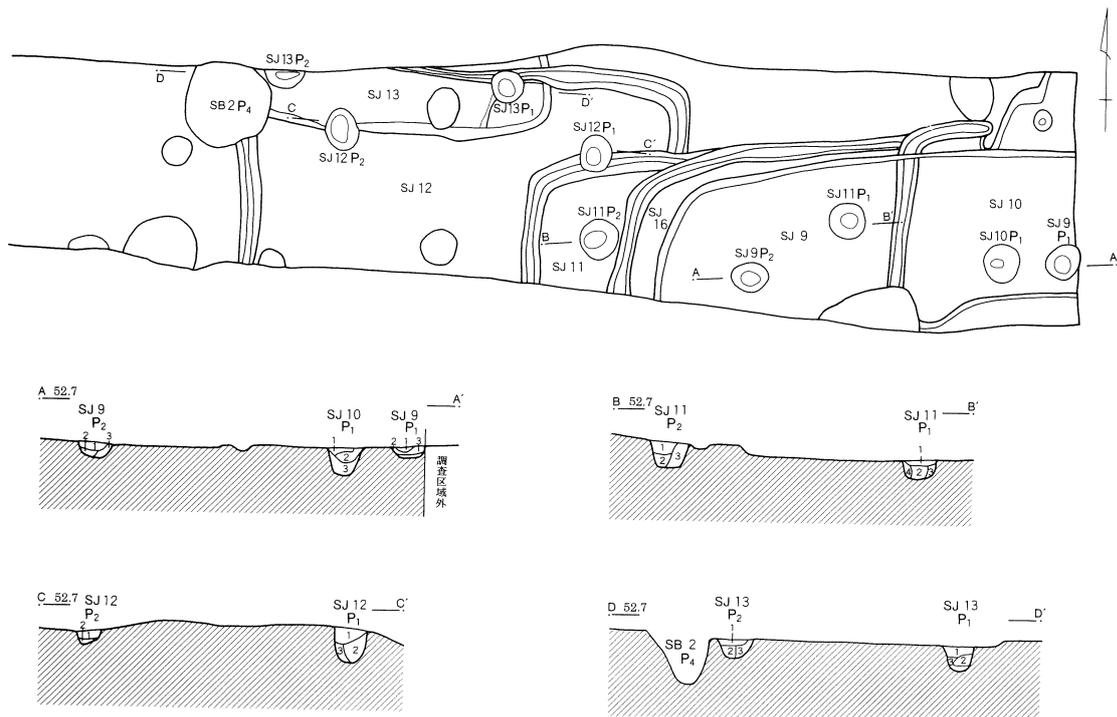
- 32 灰黄褐色土 (10YR6/2) 焼土粒子、炭化物を含む (カマド内の灰層)

- 33 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性有り 炭化物若干含む (カマド掘り方の内ピット)

第17号住居跡

- 34 暗褐色土 (10YR3/3) やや粘性有り 地山粒子を多量含む

第15図 第9～13号住居跡柱穴



第9号住居跡 Pit1

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子を若干含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を多量含む
- 3 灰黄褐色土 (10YR5/2) やや粘性有り 炭化物を多量含む

Pit2

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子を若干含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を多量含む
- 3 灰黄褐色土 (10YR5/2) やや粘性有り 炭化物を多量含む

第10号住居跡 Pit1

- 1 褐灰色土 (10YR4/1) 地山粒子を多量、炭化物を少量含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子を多量、焼土粒子、炭化物を若干含む
- 3 灰黄褐色土 (10YR5/2) 粘性有り 炭化物を含む

第11号住居跡 Pit1

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を若干含む
- 2 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性有り 炭化物を多量含む
- 3 黄橙色土 (10YR6/3) 粘性有り 黒色土、炭化物を含む
- 4 黄橙色土 (10YR6/4) 粘性有り しまりよし 炭化物含む

Pit2

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を多量含む
- 2 褐灰色土 (10YR4/1) しまりよし 炭化物を若干含む
- 3 灰黄褐色土 (10YR5/2) しまりよし 炭化物を若干含む

第12号住居跡 Pit1

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) やや粘性有り 炭化物を含む
- 2 黄褐色土 (10YR4/3) 粘性有り 地山粒子を含む

Pit2

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 炭化物を多量含む
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 地山ブロックを含む
- 3 黄褐色土 (10YR4/3) やや粘性有り 炭化物を含む

第13号住居跡 Pit1

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 径5～7cmの地山ブロックを含む
- 2 褐灰色土 (10YR4/1) フカフカの土 炭化物を多量含む
- 3 灰黄褐色土 (10YR6/2) しまりよし 炭化物を若干含む

Pit2

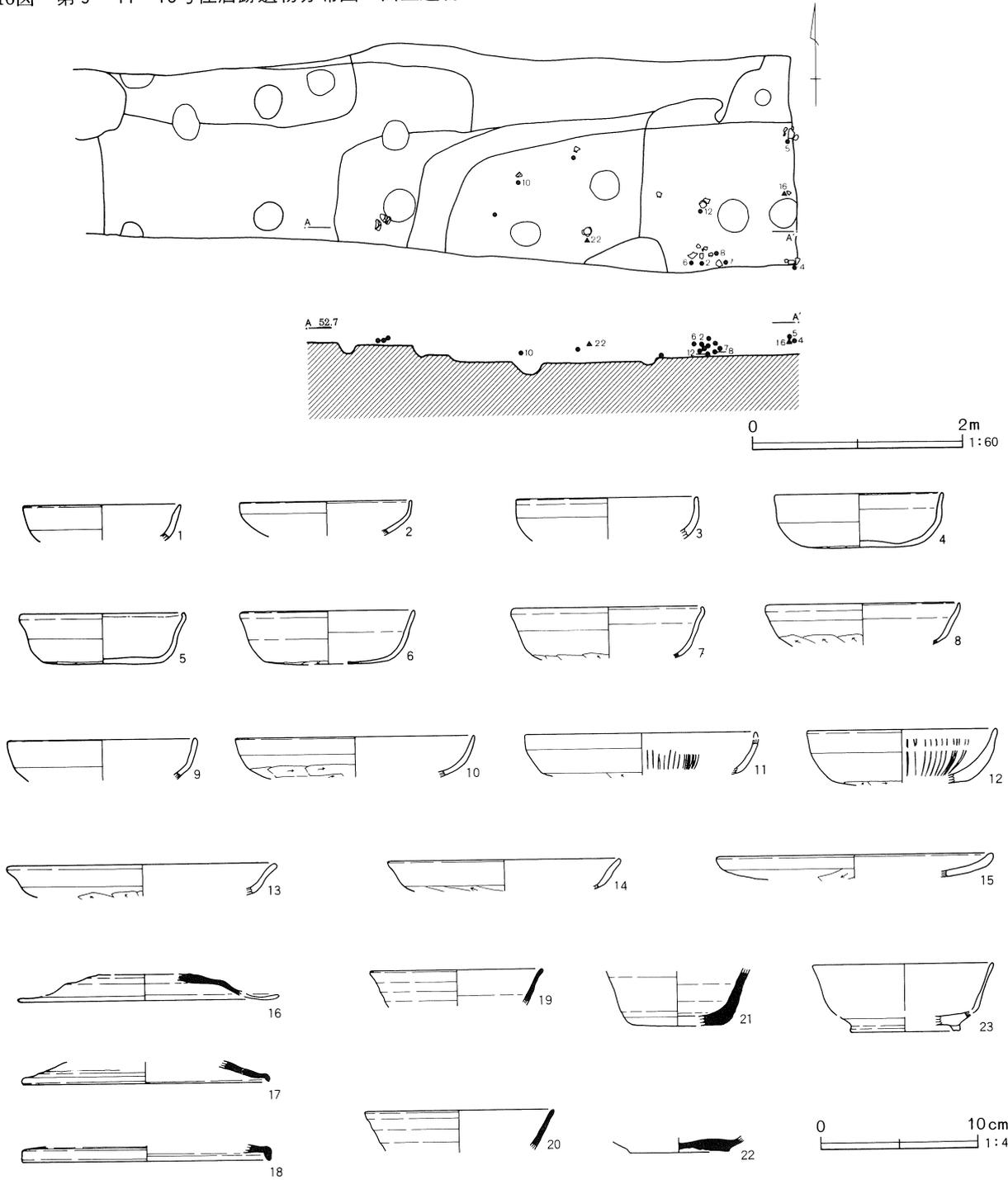
- 1 褐灰色土 (10YR4/1) 地山粒子を多量含む
- 2 黄褐色土 (10YR5/4) 地山ブロックを含む
- 3 灰黄褐色土 (10YR4/2) フカフカの土 炭化物を含む

土師器環は、いずれも丸底の北武蔵型環の範疇でとらえられるものであるが、口縁部の形態に差が認められ、タイプが異なる。1は口唇部直立し、わずかに開く、推定口径10.0cmと小型である。2は口縁部のヨコナデが短くわずかに内湾する。口縁部と体部の境は未調整となり屈曲をもつ。3は1に類似するがわずかに内湾する。9、10は口縁部が直線的に立ち上がり、体部下端に丁寧なヘラケズリを施す。いずれも体部外面に未調整部をもつ。11は口唇部を欠損する。口縁部は

横ナデを施し、体部外面に未調整部をもつ。体部下端からヘラケズリを施している。内面は不均質であるが上から底部に向かって細い工具により細かい間隔で放射状暗文を施している。

土師器皿は、13、14が口縁部を外に大きく開く皿である。15は皿であるが13・14の形態とは異なり、器高も浅い。口縁部が短く、口唇端部の内面に面をもち、断面三角状になりやや尖る。両者の形態が共伴することは、この時期の大きな特徴であると考えられる。

第16図 第9・11・16号住居跡遺物分布図・出土遺物



第10表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(10.0)	(2.2)		AB C D F	普通	褐色	10	東半分	
2	土師器坏	(10.8)	(2.2)		A B C F	普通	明褐色	15	No. 8	
3	土師器坏	(11.5)	(2.6)		A B C F	普通	明褐色	5		
4	土師器坏	(10.6)	3.4	(7.3)	A B D F	普通	明褐色	30	No. 3	
5	土師器坏	(10.4)	3.2	(7.7)	A B C D	良好	赤褐色	40	No. 1	
6	土師器坏	(11.0)	3.4	(8.0)	A B D F 片	普通	明褐色	20	No. 9	
7	土師器坏	(12.1)	(3.2)		B C D	普通	褐色	15	No. 6	

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
8	土師器坏	(12.3)	(2.6)		A B C D F	普通	褐色	10	No.7	
9	土師器坏	(11.9)	(2.6)		A B D F	普通	褐色	5		
10	土師器坏	(15.2)	(2.6)		A B C D F	普通	明褐色	10	No.16	
11	土師器坏		(2.3)		A B F片	普通	褐色	5	東半分	暗文
12	土師器坏	(12.0)	(3.5)	(8.6)	A B D F片	普通	褐色	20	No.5	暗文
13	土師器皿	(17.0)	(2.0)		A B C D	普通	明褐色	5	西半分	
14	土師器皿	(14.8)	(2.0)		A B C D F	普通	褐色	5	西半分	
15	土師器皿	(17.6)	(1.5)		A B D F片	普通	明褐色	5	東半分	
16	須恵器蓋		(1.4)	(5.9)	A F片	普通	褐灰色	15	No.2	末野産
17	須恵器蓋	(15.7)	(1.4)		A C D F片	良好	青灰色	5		末野産
18	須恵器蓋	(16.0)	(1.0)		C D F片	普通	淡灰色	5		末野産
19	須恵器坏	(11.0)	(2.3)		F針	良好	暗灰色	10	西半分	南北企産
20	須恵器坏	(12.0)	(2.6)		D E片	普通	青灰色	5	東半分	末野産
21	須恵器坏		(3.7)	(5.7)	A D F	良好	淡灰色	10		体部外面自然釉付着 群馬?
22	須恵器坏		(1.0)	(6.4)	B D F片	普通	灰色	80	No.14	末野産
23	土師器坏		(1.0)	(6.8)	A C D E F	良好	橙褐色	10		酸化炎焼成のロクロ土師器

第11表 第9号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師坏類	土師甕類	土師壺類	須恵坏類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-9	C	破片数(片)	79	108		15				
S J-9	C	重量(g)	397.2	341.4		110.1				
S J-9.11	C	破片数(片)	9	13		5	4			
S J-9.11	C	重量(g)	64.4	82.5		31.8	56.3			
S J-9~13	C	破片数	6	5			1		1	
S J-9~13	C	重量	12.6	15.3			26.0		124.3	

第10号住居跡 (第14・15区)

調査C区東側のM-2グリッドに位置する。調査区は幅2.0~1.5mと狭く、北側および南側は調査区域外となり遺構が伸びる。また、東側もC区東端にあたり調査区域外となる。9軒の住居跡の重複が確認され、第9・10・11・12・13・16・17・18号住居跡が存在する。

本住居跡は、第9号住居跡を切り込んで造られ、新しい遺構である。検出部分はカマドの敷設された北壁と西壁の一部を確認した。南側に伸びる南壁および西壁の一部は調査区域外となり不明である。東側も調査区域外となることから東壁および北壁の一部は不明である。このため、住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複する遺構は、断面観察から本住居跡の上層部分に第17・18号住居跡が存在する。また、本住居跡に切られる第9・11・16号住居跡が存在し、西側に第12・13号住居跡が位置している。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東

西軸1.55+ \pm m、南北軸1.67+ \pm m、深さ0.23mである。主軸方位は、カマド軸N-1°-Eである。東西軸の方位はS-1°-Eである。

住居跡の埋土は断面観察によると第9号住居跡の覆土である第9層を切り込む本住居跡の第7・8層を確認した。

床面は、北西コーナー部が検出された。地山のロームを利用し、ほぼ平坦である。床面上には微量の炭化物粒子と焼土粒子が確認された。貼り床は認められなかった。床面は比較的堅く踏み固められていた。

カマドは、北壁に設置されていた。煙道部は北側の調査区域外に伸び、東側も調査区域外のため西側半分のみ検出できた。カマドの形態は凸型と推定される。壁からの掘り込み長さは0.62+ \pm m、焚き口幅0.63+ \pm mである。左袖は地山の掘り残しとみられ、南側へ裾部で幅18cm、長さ23cm程住居内に伸びて検出された。掘り込みの深さはほとんど認められず、焚き口は床面から連続し平坦である。燃焼部と煙道部との境は

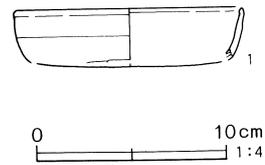
わずかに段をもち、底面は緩やかに立ち上がる。側面は底面から直立して立ち上がり、被熱により焼土化している。カマド埋土は第28～33層である。第28層は黄橙色土で直径4～8cm程の焼土ブロックが含まれ天井の崩落粘土と判断した。第32層は灰黄褐色土で焼土粒子、炭化物を含み灰層と判断した。

柱穴は、住居跡北西コーナーであることから1ヶ所検出した。P1は北壁から約0.94m、西壁から0.78mの位置に掘り込まれていた。直径0.30m、深さ0.21mであった。

周溝は、調査範囲にかかる北西壁部分の直下で確認できた。幅19cm、深さ4cmであった。

出土遺物は、第9号住居跡と混在しているため明瞭に分離できないが出土状況から判断して土師器環・皿、甕、須恵器環、皿・蓋などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはなかった。図示した遺物のうち遺物分布図(第16図)および出土

第17図 第10号住居跡出土遺物



レベルなど詳細に検討すると、第16図4～8の土師器環、12の暗文環、16の須恵器蓋は上層に位置することから本住居跡の出土遺物の可能性がある。

土師器環は口縁部から体部にかけて緩やかな屈曲をもち、底部は平底となる。調整は口縁部にヨコナデを施し、体部外面は未調整、底部外面にヘラケズリを施す。4、6は底部から体部にかけて丸味をもつ。5、7、8は口唇部の内側にわずかであるが膨らみをもつ。12は平底の暗文環で、器肉がやや厚い。16は須恵器の蓋で胎土から末野産と考えられる。

第12表 第10号住居跡出土遺物観察表(第17図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器環	(12.0)	(2.7)		A B D	普通	橙褐色	5		

第13表 第10号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師環類	土師甕類	土師壺類	須恵環類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-10	C	破片数(片)	1							
S J-10	C	重量(g)	3.3							

第11号住居跡(第14・15・16図)

調査C区東側のM-2グリッドに位置する。調査区は幅2.0～1.5mと狭く、南側は調査区域外となり遺構が伸びる。また、東側も第9・16号住居跡が位置する。西側には、第12・13号住居跡が位置している。

本住居跡は、検出した9軒の住居群の中央部分に位置し、北壁と西壁の一部を確認した。南側に伸びる西壁および南壁は調査区域外となり不明である。北壁および東壁は第9・16号住居跡と重複し切られている。また、本住居跡は西側の第12号住居跡を切り込んで構築されている。このため、住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複する遺構は、断面観察から本住居跡の東側に新しい第9・10・16号住居跡が存在する。また、西側には本住居跡に切られる第12号住

居跡が存在し、住居の建て替えは西側から東側へ行われていた。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸1.10+ \pm m、南北軸1.50+ \pm m、深さ0.20mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はN-90°-Eである。

住居跡の埋土は断面観察の第14～16層である。

床面は、北西コーナー部分が検出された。地山のロームを利用し、ほぼ平坦である。床面の高さは重複する第9・16号住居跡よりも高く、比較的堅く踏み固められていた。

柱穴は、住居跡の北半部が調査区内に位置することから第9号住居跡の床面下から検出することができ、2ヶ所検出した。P1は北壁から約0.48mの位置に掘

り込まれていた。直径0.28m、深さ0.17mであった。P2は北壁から約0.53mの位置に掘り込まれていた。直径0.30m、深さ0.20mであった。P1とP2の柱穴間隔は中心部で2.00mであった。掘り込まれた柱穴の位置は両柱穴とも壁からほぼ同じ位置であった。

周溝は、北西壁部分の直下で確認できた。幅17cm、深さ8cmであった。東壁の周溝は第9号住居跡の床レベルが低いと検出できなかった。

調査区が狭いため、貯蔵穴、カマドの検出もできなかった。

出土遺物は、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはない。図示した遺物の中の第16図21である。底部回転ヘラケズリを施している。器肉は厚く、外面には自然釉が付着する。産地不明である。また、須恵器の底部破片が検出され、底部外面に全面回転ヘラケズリが施されている。産地は胎土から末野産とみられる。

第12号住居跡 (第14・15図)

調査C区東側のM-2グリッドに位置する。調査区は幅2.0~1.5mと狭く、南側は調査区域外となり遺構が伸びる。また、東側も第9・11・16号住居跡が位置する。北側には、第13号住居跡が位置している。

本住居跡は、検出した9軒の住居群の西側部分に位置し、北壁、西壁と東壁の一部を確認した。南側に伸びる南壁は調査区域外となり不明である。北壁は第13号住居跡と切り合い、調査区域外に一部伸びる。東壁は第9・11・16号住居跡と重複し切られている。このため、住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複する遺構は、断面観察から本住居跡の東側に新しい第9・10・11・16号住居跡が存在する。また、北西側には本住居跡に切られる第13号住居跡が存在し、住居の建て替えは西側から東側へ行われていた。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸3.55m、南北軸1.77+ ϵ m、深さ0.27mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はN-90°-Eである。

住居跡の埋土は断面観察の第21~25層である。

床面は、北側半分が検出された。地山のロームを利用し、ほぼ平坦である。床面の高さは重複する第11号住居跡よりも高く、比較的堅く踏み固められていた。

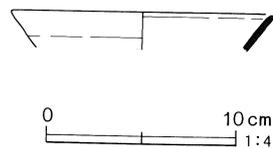
柱穴は、住居跡の北半部が調査区内に位置することから2ヶ所検出した。P1は東壁から約0.60mの位置に掘り込まれていた。直径0.25m、深さ0.27mであった。P2は西壁から約0.70mの位置に掘り込まれていた。直径0.27m、深さ0.12mであった。P1とP2の柱穴間隔は中心部で2.00mであった。掘り込まれた柱穴の位置は両柱穴とも壁からほぼ同じ位置であった。

周溝は、西壁部分から北東壁コーナー部分にかけて確認できた。幅20cm前後、深さは床面から12cmであった。東壁の周溝は第11号住居跡の床レベルが低いと検出できなかった。

調査区が狭いため、貯蔵穴、カマドの検出もできなかった。

出土遺物は、土師器杯・大型の杯・暗文杯・甕、須恵器杯などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはない。図示した遺物は第18図1である。1は須恵器杯の口縁部の破片で推定口径は13.7cmである。胎土から末野産と判断した。

第18図 第12号住居跡出土遺物



第14表 第12号住居跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵器杯	(13.7)	(1.9)		ACDF片	普通	褐灰色	5		末野産

第15表 第12号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師環類	土師甕類	土師壺類	須恵環類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-12	C	破片数(片)	2	3		2				
S J-12	C	重量(g)	9.7	51.8		3.7				

第13号住居跡 (第14・15図)

調査C区東側のM-2グリッドに位置する。北側は調査区域外となり遺構が伸びる。また、西側は第2号掘立柱建物跡のP4が位置する。

本住居跡は、検出した9軒の住居群の西側部分に位置し、南壁と東壁の一部を確認した。北壁は調査区域外となり不明である。西壁は第2号掘立柱建物跡と切り合い、調査区域外に伸びる。東壁および南壁は第12号住居跡と重複し切られているが、周溝部分は第12号住居跡の床面よりも深く掘り下げられていた。このため第12号住居跡構築の際に埋め戻しが行われていたが、明瞭に検出できた。調査区域が狭いため住居跡全体の規模を判断することはできなかった。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸2.22+ \pm m、南北軸0.60+ \pm m、深さは0.36mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はN-90°-Eである。

床面は、南側半分が検出された。地山のロームを利用し、ほぼ平坦である。床面の高さは重複する第12号住居跡よりも9.2cm前後掘り下げられわずかに低く、比較的堅く踏み固められていた。

第16表 第13号住居跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	器種	残存率	出土位置	備考
1	土錘	残存長 4.7、幅 2.1、孔径 0.6cm、重量 17.5g	90	上面

第17表 第13号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師環類	土師甕類	土師壺類	須恵環類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-13	C	破片数(片)	8			1			1	
S J-13	C	重量(g)	12.4			3.6			17.5	

第16号住居跡 (第14・16図)

調査C区東側のM-2グリッドに位置する。南側は調査区域外となり遺構が伸びる。また、東側も第9号住居跡が位置する。西側には、第11号住居跡が位置している。

第19図 第13号住居跡出土遺物



柱穴は、住居跡の南半部が調査区内に位置することから2ヶ所検出した。P1は東壁から約0.20mの位置に掘り込まれていた。直径0.28m、深さ0.22mであった。P2は西壁からの距離は不明、南壁から約0.27mの位置に掘り込まれていた。直径0.30m、深さ0.18mであった。P1とP2の柱穴間隔は中心部で1.75mであった。

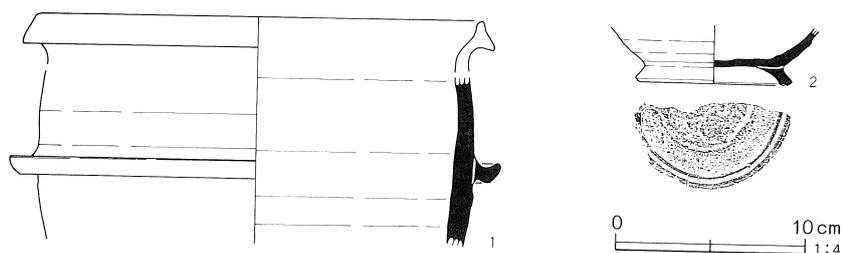
周溝は検出されず。貯蔵穴、カマドは調査区が狭いため検出できなかった。

出土遺物は、土師器環、須恵器環などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはない。このほか、図示した第19図1は土錘である。

本住居跡は、検出した9軒の住居群の中央部分に位置し、北壁と西壁の一部を確認した。南側に伸びる西壁および南壁は調査区域外となり不明である。北壁および東壁は第9号住居跡と重複する。

重複する遺構は、断面観察から本住居跡の東側に新

第20図 第16号住居跡出土遺物



しい第9・10号住居跡が存在する。また、西側には本住居跡に切られる第11号住居跡が存在し、住居の建て替えは西側から東側へ行われていた。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸2.40+ \pm m、南北軸1.53+ \pm m、深さ0.28mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はN-90°-Eである。

住居跡の埋土は断面観察の第13・17・18層である。

床面は、北西コーナー部分が検出された。地山のロームを利用し、ほぼ平坦である。床面の高さは重複する第9号住居跡よりも高く、第11号住居跡よりも低い。比較的堅く踏み固められていた。

周溝は、北西壁部分の直下で確認できた。幅18cm前後、深さ4cmであった。

柱穴は、検出できなかった。また、調査区が狭いため、貯蔵穴、カマドの検出もできなかった。

出土遺物は、須恵器高台付坏、甑などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはない。図示した遺物の中の第20図1・2である。1は須恵器の甑である。胴部上半部に幅0.9cm、長さ1.4cm程の鏝をもつ。口縁部および胴部下半は欠損する。末野産とみられる。2は須恵器高台付坏である。高台部貼り付け、産地は胎土から末野産とみられる。

第18表 第16号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵器甑		(8.9)		ACDEF片	普通	灰色	5	No.1	末野産
2	須恵器高台付坏		(3.0)	(7.8)	ACE片	普通	灰色	20		末野産

第19表 第16号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師坏類	土師甕類	土師壺類	須恵坏類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
SJ-16	C	破片数(片)				1	1			
SJ-16	C	重量(g)				42.8	58.1			

第17号住居跡（第14図）

調査C区東側のM-2グリッドに位置する。南側および東側は調査区域外となり遺構が伸びる。また、西側はP26によって切られている。

本住居跡は、第10号住居跡と重複する新しい遺構である。住居跡の埋土は断面観察によると第9号住居跡の覆土である第9層を切り込む本住居跡の第7・8層を確認した。

検出部分は北西コーナーの一部を確認した。南側に伸びる西壁の一部および南壁は調査区域外となり不明

である。東側も調査区域外となることから東壁および北壁の一部は不明である。このため、住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複する遺構は、断面観察から本住居跡の上層部分に第18号住居跡が存在する。また、本住居跡に切られる第9・10・11・16号住居跡が存在し、西側に第12・13号住居跡が位置している。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸1.40+ \pm m、南北軸0.25+ \pm m、深さ0.18mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であ

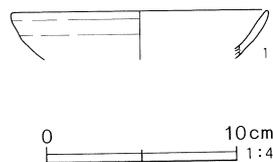
るが東西軸の方位はN-90°-Eである。

床面は、北西コーナー部が検出された。地山のロームを利用し、緩やかな凹凸がみられる。床面は比較的柔らかい。

柱穴、カマド、貯蔵穴は、調査区が狭いため検出できなかった。

出土遺物は、第9号住居跡と混在しているため明瞭に分離できないが出土状況から判断して土師器坏・皿・甕、須恵器坏・皿・蓋などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはなかった。図示した遺物のうち遺物分布図(第16図)および出土レベルなど詳細に検討すると、第16図6~8の土師器坏、16の須恵器蓋は上層に位置することから本

第21図 第17号住居跡出土遺物



住居跡の出土遺物の可能性がある。

土師器坏は口縁部から体部にかけて緩やかな屈曲をもち、底部は平底となる。調整は口縁部にヨコナデを施し、体部外面は未調整、底部外面にヘラケズリを施す。6は底部から体部にかけて丸味をもつ。7、8は口唇部の内側にわずかであるが膨らみをもつ。16は須恵器の蓋で胎土から末野産と考えられる。

第20表 第17号住居跡出土遺物観察表(第21図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(13.4)	(2.5)		A B D E F	普通	明褐色	10		

第21表 第17号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師坏類	土師甕類	土師壺類	須恵坏類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-17	C	破片数(片)	3	3						
S J-17	C	重量(g)	9.1	6.9						

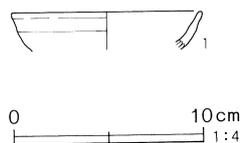
第18号住居跡(第14図)

調査区C区東側のM-2グリッドに位置する。

本住居跡は、検出した9軒の住居群に位置する。第14図A-A'の南壁断面に煙道部分のみ検出された。住居跡は南側に伸びるものと判断され、北側に構築されたカマドの煙道部が検出されたことになる。煙道部は暗褐色土が堆積し、炭化物を多量に含む。側壁と底面は焼土化していた。

住居跡の平面形態、主軸方位、周溝、柱穴、貯蔵穴などは検出できなかった。

第22図 第18号住居跡出土遺物



出土遺物は、煙道覆土から土師器坏、甕の破片を検出した。第22図1は土師器坏である。口縁部ヨコナデ、体部外面に未調整部をもち、底部は平底気味でヘラケズリを施す。

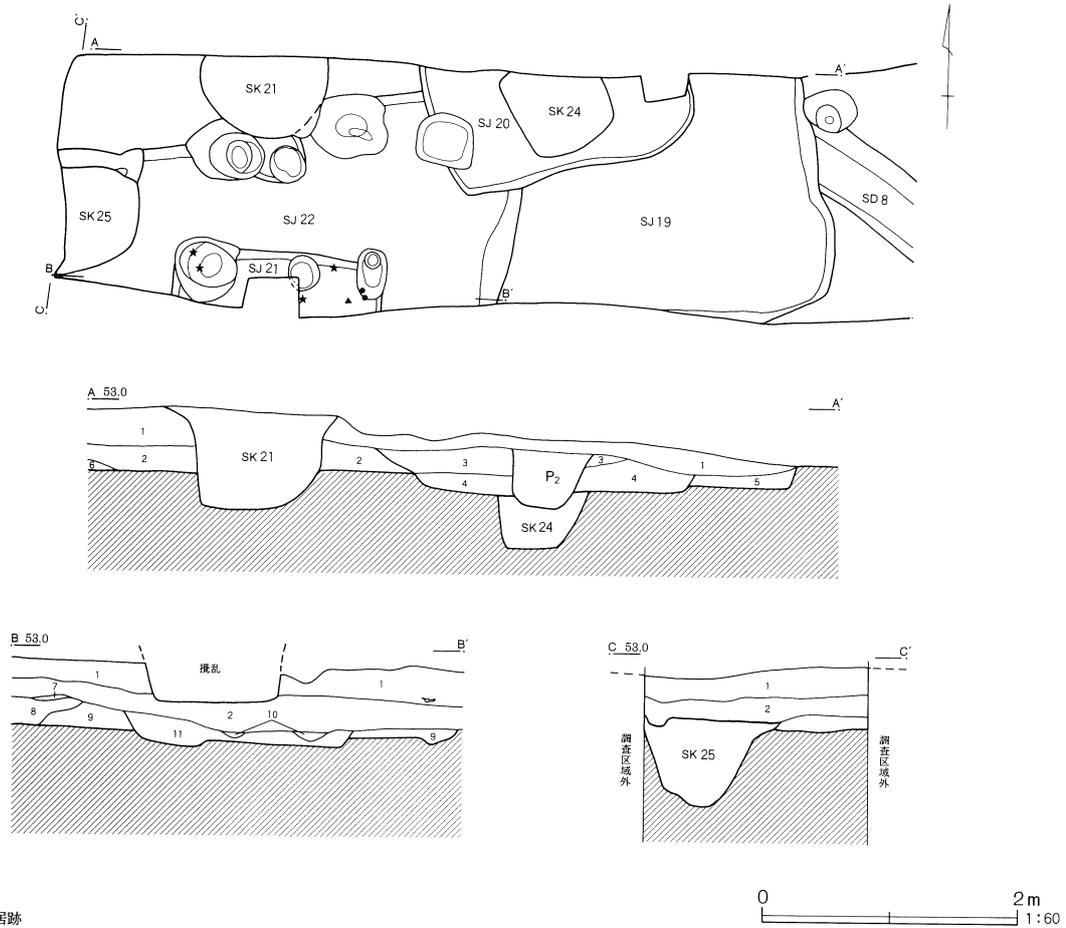
第22表 第18号住居跡出土遺物観察表(第22図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(10.0)	(2.0)		A E F	普通	明褐色	10	一括煙道	

第23表 第18号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師坏類	土師甕類	土師壺類	須恵坏類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-18	C	破片数(片)	1	1						
S J-18	C	重量(g)	5.1	28.2						

第23図 第19・20・21・22号住居跡



第19・20・21号住居跡

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土粒子、パミス状白色粒子を多量含む
 - 2 黒褐色土 (10YR2/2) ロームブロック少量、焼土粒子、炭化粒子含む
- 第20号住居跡
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) ロームブロックを多量、焼土粒子、炭化粒子を少量含む
 - 4 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子を少量、焼土粒子、炭化粒子多量、白色粘土を含む
- 第19号住居跡
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) ロームブロック、ローム粒子多量、焼土粒子を少量含む
 - 6 黄褐色土 (10YR5/3) 炭化粒子を少量、白色粒子を多量、焼土粒子、ローム粒子を含む

第22号住居跡

- 7 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土粒子、炭化粒子、白色粘土少量、ローム粒子を含む
 - 8 黄褐色土 (10YR5/8) ロームブロックを多量、ローム粒子を含む
 - 9 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子を含む
- 第21号住居跡
- 10 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土粒子、炭化粒子、ロームブロック少量、ローム粒子を含む
 - 11 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土粒子、炭化粒子少量、ローム粒子、ロームブロック、黄褐色粘土ブロックを含む

第19号住居跡 (第23図)

調査D区西側のN・O-2グリッドに位置する。調査区は幅2.0mと狭く、北側、および南側は調査区域外となり遺構が伸びる。また、西側もD区西端にあたり調査区域外となる。第19号住居跡を検出した地点は、幅6.0mの距離の中に4軒の住居跡の重複が確認され、第19・20・21・22号住居跡が存在する。また、本区の西側にはC区の住居跡群が隣接しており、第9・10・11・12・13・16・17・18号住居跡が存在する。現道部分を含む東西19.0mの範囲に12軒を検出したことになる。

本住居跡は、検出した4軒の住居群の東側に位置し、東壁と南壁の一部を確認した。北側に伸びる北壁および東壁の一部は不明である。西側は第20・21・22号住居跡と重複する。このため、西壁は確認できず、住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複する遺構は、断面観察から本住居跡が第20・21・22号住居跡よりも古いと考えられる。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸2.63±0.05m、南北軸1.97±0.05m、深さ0.20mである。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はN-80°-Eである。

住居跡の埋土は断面観察の第5層である。

床面は、南東コーナー部が検出された。地山のロームを利用し、ほぼ平坦である。床面は比較的軟らかい。

柱穴、周溝は検出されず、調査区が狭いため貯蔵穴、カマドも検出できなかった。

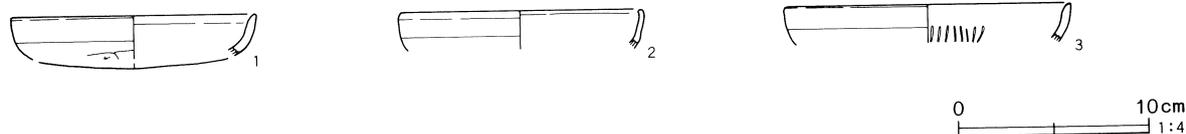
出土遺物も検出されなかった。

第20号住居跡 (第23図)

調査D区西側のN・O-2グリッドに位置する。調査区は幅2.0mと狭く、北側は調査区域外となり遺構が伸びる。本住居跡は第19号住居跡を切り込んで構築されている。非常に小規模な住居跡である。

本住居跡は、東壁、南壁、西壁の一部を確認した。北側に伸びる北壁および東壁、西壁の一部は不明である。住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複する遺構は、南側の第19・22号住居跡である。いずれの住居跡よりも新しく、第24号土壙より新しく、P2に壊されている。

第24図 第20号住居跡出土遺物



第24表 第20号住居跡出土遺物観察表 (第24図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器環	(12.9)	(2.3)		A B C D F	普通	橙褐色	5		
2	土師器環	(12.5)	(2.0)		A D	普通	褐色	5		
3	土師器環	(15.0)	(2.0)		A D F	普通	橙褐色	5		暗文

第25表 第20号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師環類	土師甕類	土師壺類	須恵環類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-20	D	破片数(片)	43	47		2	3			
S J-20	D	重量(g)	117.7	155.7		3.8	32.8			

第21号住居跡 (第23図)

調査D区西側のN-2グリッドに位置する。南側は調査区域外となり遺構が伸びる。本住居跡は第22号住居跡を切り込んで構築されている。非常に小規模な住居跡である。

本住居跡は、東壁、北壁、西壁の一部を確認した。南側に伸びる南壁および東壁、西壁の一部は不明であ

り、住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複する遺構は、南側の第22号住居跡である。ピットに壊されている。

住居跡の埋土は断面観察の第3・4層である。

床面は、南半部分を検出した。地山のロームを利用し、ほぼ平坦である。中央部分には床下に第24号土壙を検出し、明瞭な貼り床は検出されず比較的軟らかい。

柱穴、周溝は検出されず、調査区が狭いため貯蔵穴、カマドも検出できなかった。

出土遺物は、土師器環・甕、須恵器皿・甕の破片を検出した。図示したものは第24図1～3の土師器環の小破片である。1・2は北武蔵型環の口縁部破片である。口縁部はヨコナデを施し、体部外面に未調整部をもつ。底部が丸底気味で外面にヘラケズリ調整を施す。3は暗文環である。

90°-Eである。

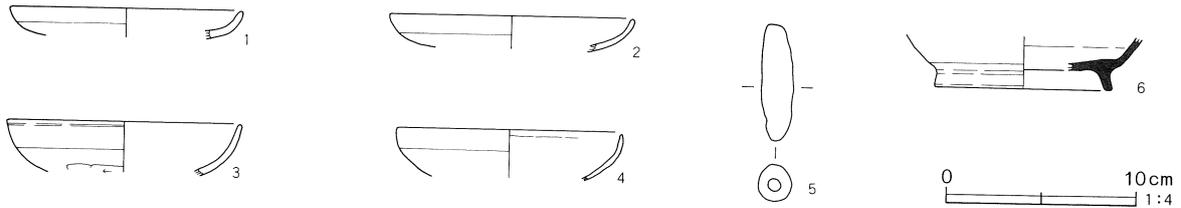
住居跡の埋土は断面観察の第10・11層である。

床面は、北半部分を検出した。地山のロームを利用し、ほぼ平坦である。

柱穴、周溝は検出されず、調査区が狭いため貯蔵穴、カマドも検出できなかった。

出土遺物は、土師器環、甕、須恵器高台付環・土錘を検出した。図示したものは第25図1～4の土師器環の破片である。いずれも北武蔵型環の口縁部破片である。口縁部はヨコナデを施し、体部外面に未調整部をもつ。底部が丸底気味で外面にヘラケズリ調整を施す。5は土錘、6は推定高台径9.3cmである。

第25図 第21号住居跡出土遺物



第26表 第21号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器環	(12.2)	(1.4)		A B C D F	普通	橙褐色	10	No. 1 No. 2	未野産
2	土師器環	(12.8)	(2.0)		A B D F	普通	褐色	10		
3	土師器環	(12.3)	(2.7)		A B D F	普通	暗褐色	15		
4	土師器環	(11.8)	(2.5)		A B D F	普通	明褐色	10		
5	土錘	残存長 6.1、幅 1.7、孔径 0.7cm、重量 16.9g						80		
6	須恵器高台付環	(2.7)	(9.3)	A F片	普通	灰色	20			

第27表 第21号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師環類	土師甕類	土師壺類	須恵環類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-21	D	破片数(片)	45	38		5			1	
S J-21	D	重量(g)	121.1	163.4		41.4			16.9	

第22号住居跡 (第23図)

調査D区西側のN-2グリッドに位置する。北側は調査区域外となり遺構が伸びる。本住居跡は第20・21号住居跡、第25号土壌に切られ、第19号住居跡を切り込んで構築されている。

本住居跡は、東壁、北壁の一部を確認した。南側に伸びる南壁および東壁、北壁の一部は不明であり、西壁は調査区域外に広がり確認できない。このため、住居跡全体の規模を判断することはできなかった。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸3.67+±m、南北軸1.70+±m、床面の深さは第21号住居跡の床面より浅く確認面から約6cm程であった。主軸方位は、カマドが検出できないため不明であるが東西軸の方位はN-80°-Eである。

住居跡の規模は、遺跡内で検出された他の住居跡と比較すると大きく、また、北壁と東壁の角度はやや鋭角に交わっていると見られる。しかし、北東コーナ一部分は第20号住居跡によって切られ壁の連続は認められない。さらに、北壁は、第21・25号土壌によっても切られ断続的に検出された。

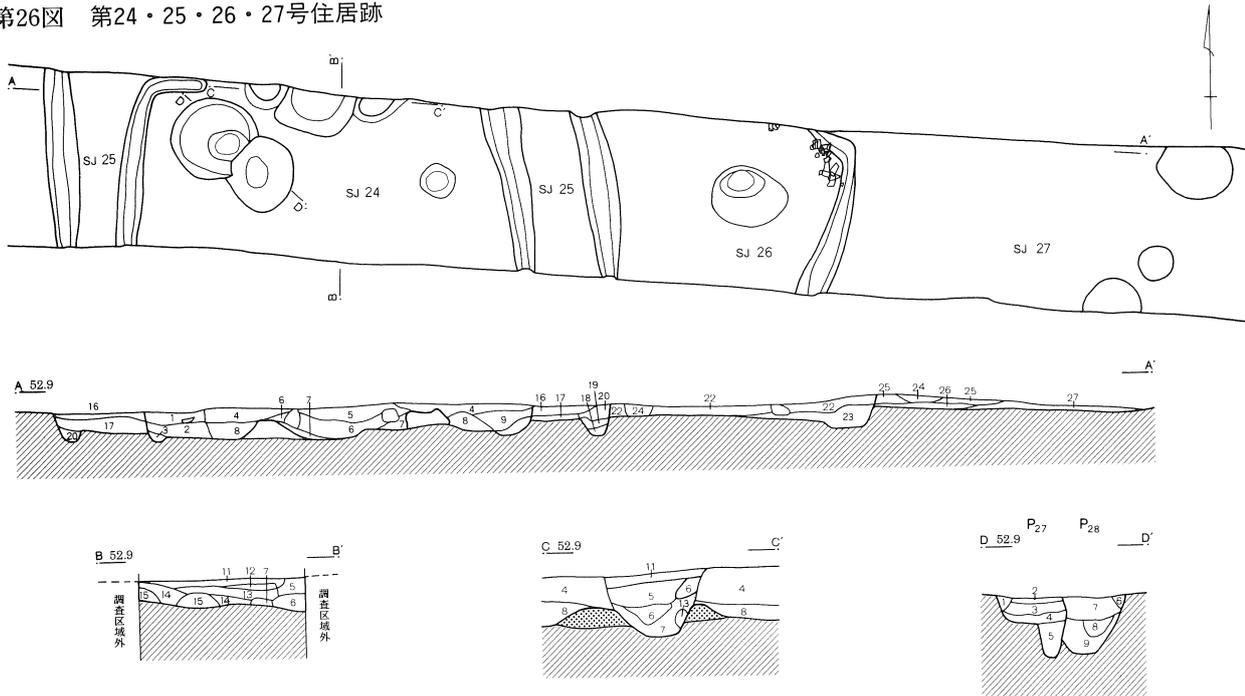
住居跡の埋土は断面観察の第7・8・9層である。この堆積層の存在が住居跡と判断した根拠である。

床面は、北東部分を検出した。地山のロームを利用し、ほぼ平坦であるが、西側の住居中央に向けわずかながらレベルを高くする。

柱穴、周溝は検出されず、調査区が狭いため貯蔵穴、カマドも検出できなかった。

出土遺物は、検出できなかった。

第26図 第24・25・26・27号住居跡



第24号住居跡

- 1 灰黄色土 (2.5Y6/2) しまりよし 灰を多量、径2~3cmの焼土ブロックを含む
- 2 黄灰色土 (2.5Y5/1) 1層に比して灰を少量、径1~2cmの焼土ブロックを含む
- 3 黄灰色土 (2.5Y4/1) 焼土粒子、炭化物を多量含む、灰小ブロックを含む
- 4 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子を若干含む
- 5 黒色土 (7.5Y3/1) 地山粒子を若干、焼土粒子を少量含む
- 6 灰色土 (7.5Y4/1) 焼土粒子を多量、炭化物を若干含む
- 7 黄灰色土 (2.5Y4/1) やや粘性有り 灰、焼土粒子を若干含む
- 8 黄褐色土 (2.5Y5/4) 地山粒子を多量含む
- 9 黒褐色土 (10YR2/3) フカフカの土 地山粒子を若干含む
- 10 暗褐色土 (10YR3/4) しまりよし やや粘性有り

第24号住居跡 カマド掘り方

- 11 黒褐色土 (10YR3/2) 地山粒子を若干含む
- 12 黒褐色土 (7.5YR3/1) しまり良い 径1cm前後の焼土ブロックを含む
- 13 灰黄褐色土 (10YR6/2) 焼土粒子を若干、灰色粘土ブロックを含む
- 14 黄褐色土 (10YR6/3) 径1~3cmの焼土ブロックを多量、地山粒子を含む
- 15 褐色土 (10YR4/1) 径3~5cmの地山ブロックを多量、焼土粒子を若干含む

第25号住居跡

- 16 黒褐色土 (7.5YR3/1) フカフカの土 地山粒子を若干含む
- 17 暗褐色土 (10YR3/3) しまりよし 径2~3cmの地山ブロックを含む
- 18 黒褐色土 (7.5YR2/2) 地山粒子を多量、焼土粒子を若干含む
- 19 黄褐色土 (10YR6/4) ザクザクの土 黒色土を少量含む
- 20 橙色土 (7.5YR7/4) 粘性有り 軟らかい土 炭化物を含む

第26号住居跡

- 21 黒褐色土 (7.5YR2/2) 地山粒子を多量、焼土粒子、炭化物を若干含む
- 22 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子、焼土粒子を少量含む
- 23 黒褐色土 (10YR2/3) 地山粒子を多量含む

第27号住居跡

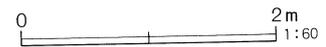
- 24 黒色土 (10YR2/1) 地山粒子を少量含む
- 25 黒褐色土 (7.5YR3/1) 地山粒子を多量、焼土粒子を少量、炭化物を含む
- 26 褐色土 (7.5YR4/1) 径1~2cmの地山ブロックを多量含む
- 27 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径2cm位の砂岩状小ブロックを若干含む

Pit27

- 1 黄褐色土 (10YR5/3) 地山ブロックを含む
- 2 黒色土 (10YR2/1) 地山粒子を少量含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) 径2~5cmの地山ブロック多量含む
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を若干含む
- 5 褐色土 (10YR4/1) 地山粒子、焼土粒子を若干含む

Pit28

- 6 黒褐色土 (10YR3/1) フカフカの土 地山粒子を含む
- 7 黒褐色土 (10YR2/2) しまりよし 地山粒子若干含む
- 8 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を含む
- 9 浅黄褐色土 (10YR8/4) 黒褐色土を若干含む



第24号住居跡 (第26・27図)

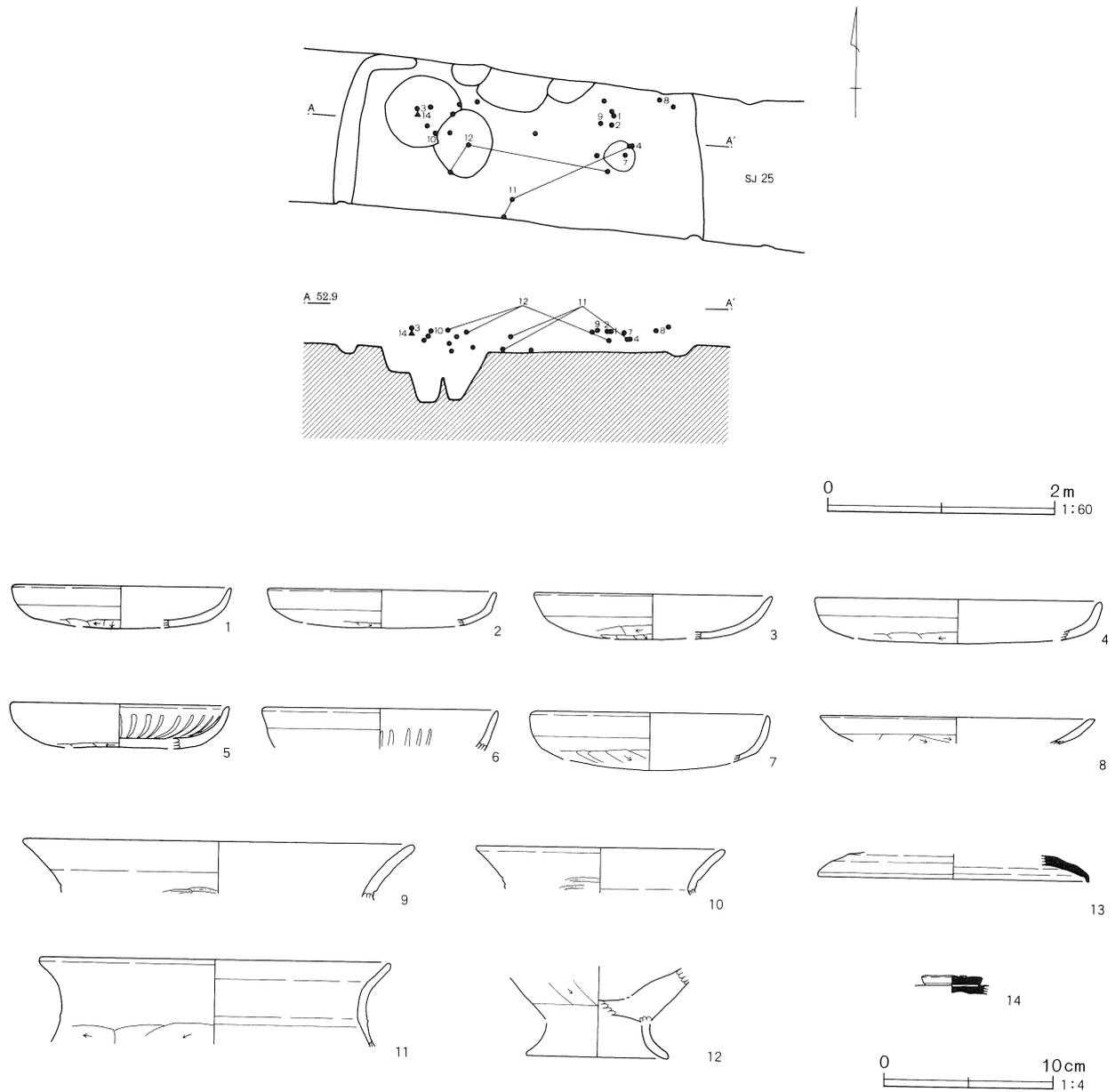
調査C区中央のK-2グリッドに位置する。調査区は幅1.27mと狭く、南側、北側は調査区域外となり遺構が伸びる。このため、住居跡は南壁、東壁と西壁の一部を確認でき、南側に伸びる東、西壁および南壁は不明である。住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複関係は、本住居跡の外側に第25号住居跡が位置する。また、東側には第26号住居跡、第27号住居跡が位置する。

住居跡の平面形態は、小型の方形と推定される。規模は東西軸3.34m、南北軸1.27+±m、深さ0.25mである。主軸方位は、N-1°-Eである。

床面は、南側半分ほどが検出された。地山のロームを利用し、緩やかな凹凸をもつ。床面上には微量の炭化物粒子と焼土粒子が確認された。床面は比較的堅く踏み固められていた。

周溝は、調査範囲にかかる東壁、西壁の直下で全て確認できた。また、カマドの敷設される北壁部分でも

第27図 第24号住居跡遺物分布図・出土遺物



検出された。幅30~13cm、深さ5cmである。

柱穴は、北東コーナー部に1ヶ所（P1）検出した。P1は東壁から約0.58mの位置に掘り込まれていた。直径0.18m、深さ0.32mであった。このほか、住居内にはP27、P28が存在する。これらのピットは住居跡を切り込んで掘られていた。

カマドは、北壁に設置されていた。壁からの掘り込みは調査区域外へ伸び不明である。深さは床面からわずかに掘り下げ約8cmほど窪む。左右の袖はローム粘土を積み上げて構築している。カマドの形態は隅丸方

形である。焚き口幅は55cm、燃烧部と煙道部は調査区域外に伸びる。

出土遺物は、土師器坏・皿・甕・台付甕、須恵器蓋などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはなかった。図示した遺物は第27図1~14である。1~7は北武蔵型坏の破片である。器高はやや浅く口縁部にヨコナデを施し、体部に未調整部をもつ。5・6は内面に放射状の暗文が施されている。間隔は粗く、やや太い施文線である。8は土師器皿である。口縁部はヨコナデを施し、体部は全体に

丁寧なヘラケズリを施す。9・11は土師器甕の破片である。9は口縁部の器肉厚く、外傾に大きく開いて立ち上がる。胴部のケズリ調整は口縁部下端を削り込み段をもつ。10・12は台付甕と考えられる。13・14は須

恵器蓋の破片である。13は口唇部の破片で、丸味もち短く折り返された端部である。14はつまみ部分の破片で擬宝珠のつぶれた扁平つまみである。いずれも末野産である。

第28表 第24号住居跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(13.0)	(2.5)		BCDEF	普通	褐色	10	No.5	暗文 暗文 末野産 末野産
2	土師器坏	(13.5)	(2.0)		ABCDEF	普通	褐色	5	No.6	
3	土師器坏	(14.1)	(2.6)		ABCDEF	普通	褐色	5	No.25	
4	土師器坏	(16.8)	(2.3)		ABCDEF	普通	茶褐色	10	No.8	
5	土師器坏	(12.8)	(2.6)		ABCDEF	普通	褐色	10	フク土	
6	土師器坏	(13.8)	(2.4)		ABCDEF	普通	褐色	5	フク土	
7	土師器坏	(14.0)	(2.8)		ABCDEF	普通	茶褐色	5	No.9	
8	土師器皿	(16.2)	(1.5)		ABCDEF	普通	橙褐色	5	No.2	
9	土師器甕	(22.9)	(3.1)		ABDF	普通	橙褐色	5	No.7	
10	土師器小型甕	(14.6)	(2.7)		ABCDF	普通	褐色	5	No.22	
11	土師器甕	(20.8)	(4.9)		ABCDEF	普通	茶褐色	10	No.8・14・15・フク土・カマド掘り方	
12	土師器台付甕		(3.2)		ABDF	普通	茶褐色	20	No.10・20・27	
13	須恵器蓋	(16.0)	(1.5)		ACDE片	普通	灰色	5		
14	須恵器蓋		(1.1)		ACF片	普通	灰色	30	No.26	

第29表 第24号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師坏類	土師甕類	土師壺類	須恵坏類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-24	C	破片数(片)	26	75		2			1	
S J-24	C	重量(g)	117.2	603.6		19.2			7.9	

第25号住居跡 (第26図)

調査C区中央のK-2グリッドに位置する。調査区は幅が狭く、南側、北側は調査区域外となり遺構が伸びる。このため、住居跡は東壁と西壁の一部を確認でき、南側に伸びる東、西壁および北壁、南壁は不明である。住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複関係は、本住居跡の内側に第24号住居跡が位置する。また、東側には第26号住居跡、第27号住居跡が位置する。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸4.50m、南北軸1.42+ \pm 0.18m、深さ0.18mである。主軸方位は、カマドが検出できないため判断できないが第24号住居跡と同様に南北軸方向とすればN-

3°-Eである。ほぼ同じ軸方位で第25号住居跡から第24号住居跡への建て替えがなされたものと考えられる。

床面は、住居跡の中央部分が検出されたが、第24号住居跡と重複しほとんど不明である。わずかに、東、西壁に近い両端が残っていた。地山のロームを利用し、緩やかな凹凸をもつ。

周溝は、調査範囲にかかる東壁、西壁の直下で全て確認できた。幅12~27cm、床面からの深さ10cmである。

調査区が狭いため、柱穴、カマド、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は、少量検出された。

第30表 第25号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師坏類	土師甕類	土師壺類	須恵坏類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-25	C	破片数(片)	1	6						
S J-25	C	重量(g)	3.8	43.5						

第26号住居跡（第26図）

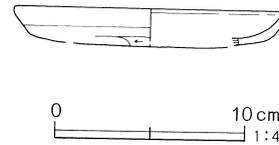
調査C区中央のK-2グリッドに位置する。南側、北側は調査区域外となり遺構が伸びる。このため、住居跡は南壁、東壁の一部を確認でき、南側に伸びる東、南壁は不明である。北側に伸びる北壁も不明であり、住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複関係は、本住居跡の西側に第24・25号住居跡が位置し本住居跡の西側を切り込んで構築している。また、東側には第27号住居跡が位置する。

住居跡の平面形態は、方形と推定される。規模は東西軸2.07+ \pm m、南北軸1.30+ \pm m、深さ0.16mである。主軸方位は、カマドが検出されていないため、東西軸の方位はS-70°-Eである。

床面は、北東コーナー部分がわずかに検出された。地山のロームを利用し、緩やかな凹凸をもつ。床面は比較的堅く踏み固められていた。

周溝は、調査範囲にかかる東壁の直下で確認できた。

第28図 第26号住居跡出土遺物



幅10~25cm、床面からの深さ8cmである。

調査範囲が狭く、他の住居跡との重複がみられることから、柱穴、カマド、貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は、土師器坏・甕などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはなかった。図示した遺物は第28図1である。1は北武蔵型坏の破片である。器高は浅く口縁部にヨコナデを施し、体部に未調整部をもつ。わずかに丸底気味で口縁部は外傾に開いて立ち上がる。このほか、北東コーナー部分の床面上から土師器甕の胴部破片が検出された。張りをもち、やや丸味をもつ形態である。

第31表 第26号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(14.3)	(2.0)		A B F	普通	橙褐色	15	No. 2	

第32表 第26号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師坏類	土師甕類	土師壺類	須恵坏類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-26	C	破片数(片)	4	7						
S J-26	C	重量(g)	18.1	249.2						

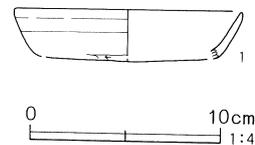
第27号住居跡（第26図）

調査C区中央のK-2グリッドに位置する。南側、北側は調査区域外となり遺構が伸びる。西側には第26号住居跡が存在する。本住居跡はこの第26号住居跡の上部に位置する。断面観察で覆土がわずかに検出されただけである。このため、平面による住居跡の北壁、南壁、東壁と西壁は確認できず、住居跡全体の規模を判断することはできなかった。重複関係は、本住居跡の西側に第26号住居跡が位置し、さらに、西側には第24号住居跡、第25号住居跡が位置する。

住居跡の平面形態は不明。規模、主軸方位も不明である。

床面は、東側部分が検出された。地山のロームを利

第29図 第27号住居跡出土遺物



用していた。壁の立ち上がり不明瞭であり、範囲を確定することができなかった。

周溝、柱穴、カマド、貯蔵穴は確認できなかった。

出土遺物は、土師器坏・甕などを検出した。遺物はいずれも小破片であり、全体の器形を留めるものはなかった。図示した遺物は第29図1である。平底の土師器坏で口縁部は直線的に外傾に立ち上がる。

第33表 第27号住居跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器環	(11.9)	(2.5)		A B C F	普通	褐色	5	フク土	

第34表 第27号住居跡出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師環類	土師甕類	土師壺類	須恵環類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
S J-27	C	破片数(片)	8	9						
S J-27	C	重量(g)	47.9	28.4						

(2) 焼土遺構

焼土遺構 (第30図)

調査区D区のN-2グリッドに位置する。黒褐色土中に焼土の集中する範囲を確認した。第19・20号住居跡の覆土上層に堆積した焼土層である。明らかな性格は不明であるため焼土遺構と呼称した。形態は円形に近く、規模は直径約0.80m、堆積層の厚さ約3cm程であった。住居覆土の地山が被熱を受け焼けていた。焼土粒子、焼土ブロックを伴い若干の炭化粒子を検出した。遺構の性格は判断できない。住居跡の可能性もあり、これに伴う炉跡、カマドとも考えられるが、カマドの底面や灰層とも異なる。炉跡状であるが、壁も検出されず土器焼成遺構との関連も不明である。

出土遺物は、土師器環・甕、須恵器蓋の破片を検出した。図示したものは第31図1の土師器環である。底部は、わずかに丸底気味で体部は内湾気味に外傾に立ち上がり、口縁部はわずかに屈曲をもち開く。内面には、細かな放射状の暗文が施されている。

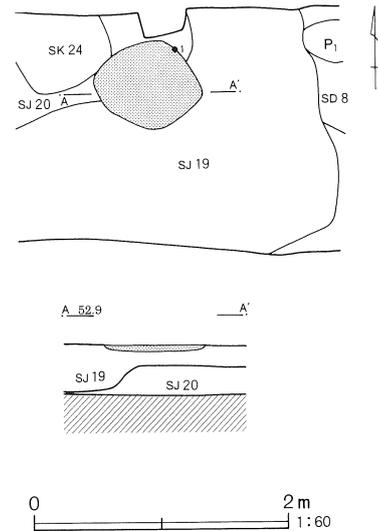
第35表 焼土遺構出土遺物観察表 (第31図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器環	(14.0)	(2.5)		A B D F	普通	赤褐色	15	焼土遺構1	暗文

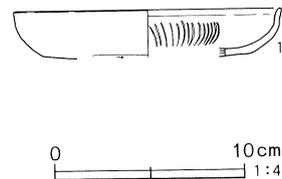
第36表 焼土遺構出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師環類	土師甕類	土師壺類	須恵環類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
焼土	D	破片数(片)	8	27		3				
焼土	D	重量(g)	39.3	111.8		13.1				

第30図 焼土遺構



第31図 焼土遺構出土遺物



(3) 土壙

宮西遺跡から検出された古代の土壙は第24号土壙と第25号土壙の2基である。2基の土壙はいずれも調査区東のD区から検出された。

第24号土壙 (第32図)

調査D区のN-2グリッドに位置する。北側は調査区域外に伸びる。本土壙の上層は第20号住居跡の床面が覆う。形態は方形である。規模は長径1.09m、短径1.00m、深さ0.43mである。主軸方位はN-27°-Wを指す。覆土の堆積状況は柱穴によくみられる様相もっている。断面観察によると第2層が三角堆積層である。第1層は短時間に堆積した様相をもち底面から上面まで占めている。

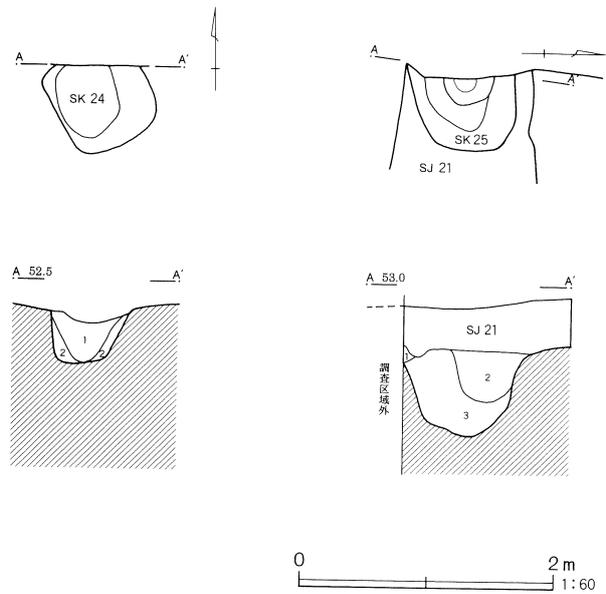
出土遺物は第32図1の土師器坏である。口径のやや小ぶりの丸底の坏である。胎土は緻密で焼成も良く、茶褐色である。

第25号土壙 (第32図)

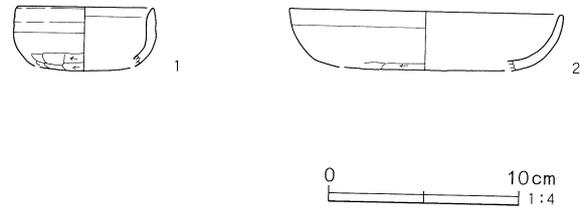
調査D区のN-2グリッドに位置する。西側は調査区域外に伸びる。本土壙の上層は第19号住居跡の床面が覆う。形態は方形である。規模は長径1.30m、短径0.76+ ϵ m、深さ0.67mである。主軸方位はN-4°-Wを指す。覆土の堆積状況は、第19号住居跡の覆土に覆われており3層に分層できた。柱穴によく見られる様相もっている。断面観察によると第2・3層は黒褐色土で、焼土粒子、炭化粒子を含む。特に、第3層にはロームブロックが多量に含まれる点柱穴の可能性が高い。床下土壙の様相はない。

出土遺物は第32図2の土師器坏である。口径のやや

第32図 第24・25号土壙・出土遺物



- 第24号土壙
 1 暗褐色土 (10YR3/2) 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子を含む
 2 黄褐色土 (10YR5/6) 焼土粒子、炭化粒子、ローム粒子を含む
- 第25号土壙
 1 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土粒子、炭化粒子を少量、ローム粒子を含む
 2 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化粒子を多量、ローム粒子、ロームブロック少量、焼土粒子を含む
 3 黒褐色土 (10YR3/2) 焼土粒子、炭化粒子を少量、ロームブロック多量、ローム粒子を含む



大きい丸底の坏である。胎土は緻密で焼成も良く、褐色である。

第37表 第24・25号土壙出土遺物観察表 (第32図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(7.2)	(3.1)		ABCDEF	良好	茶褐色	10		
2	土師器坏	(14.3)	3.1		ABCDEF	良好	褐色	10		

第38表 第24・25号土壙出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師坏類	土師甕類	土師壺類	須恵坏類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
SK-24	D	破片数(片)	5	2			1			
SK-24	D	重量(g)	26.3	9.2			9.5			
SK-25	D	破片数(片)	35	24		2				1
SK-25	D	重量(g)	122.9	127.9		4.7				9.7

(4) 柱穴・掘立柱建物跡

柱穴は各区ごとに柱穴番号を付した。本遺跡の調査に於いて検出した柱穴は全部で55本を検出した。A区2本、B区0本、C区28本、D区9本、E区3本、F区8本であった。全ての柱穴が奈良・平安時代に属するものか判断が難しく、中・近世に属する柱穴も存在する可能性がある。便宜上明瞭な区分ができないため本稿で主な柱穴を報告する。

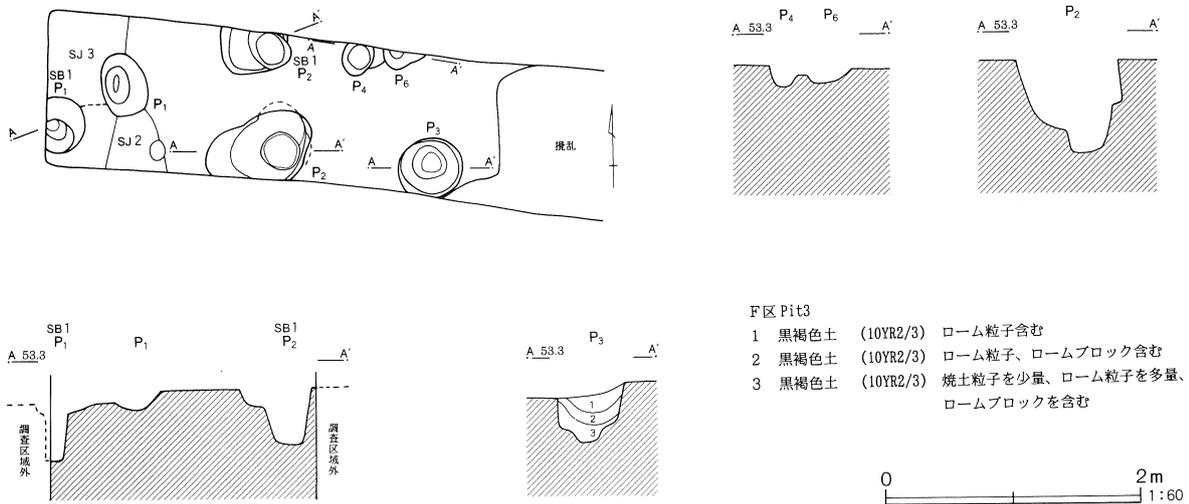
調査区の中でも柱穴が顕著に検出された区は、調査区東側のC・D・F区に集中する。

柱穴は機能や性格を特定することが難しい。出土す

る遺物も極めて少なくほとんどの場合が共伴遺物をもたない。柱穴には断面観察などから柱痕や柱抜き取り痕を判断できることもある。柱穴は、その多くは掘立柱建物跡や柵列を構成するものであるが、調査面積が狭く他の柱穴との組み合わせがつかめず単独の柱穴として調査上処理をしたものである。

建物跡の可能性が指摘できるものは、SB番号を付したが明らかに本来の掘立柱建物跡としての規模や柱間の間数を特定できないため可能性として留める。

まず、掘立柱建物跡の可能性として考えられる遺構が3ヶ所検出された。



第1号掘立柱建物跡 (第33図)

F区西側のH・I-3グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡(SB1-P1・P2)は柱穴を2ヶ所検出した。柱間は柱穴中心で1.80mである。規模や総間数は不明である。軸方向はN-69°-Eである。

第2号掘立柱建物跡 (第34図)

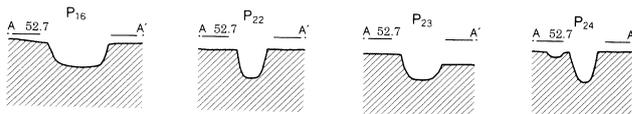
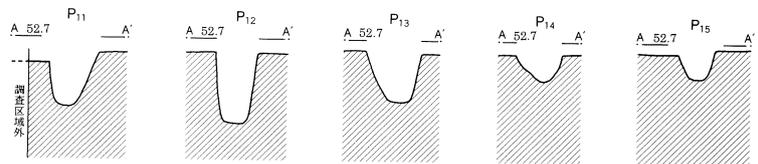
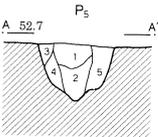
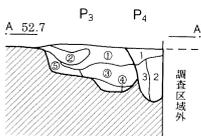
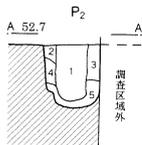
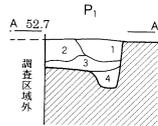
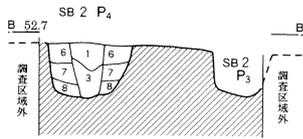
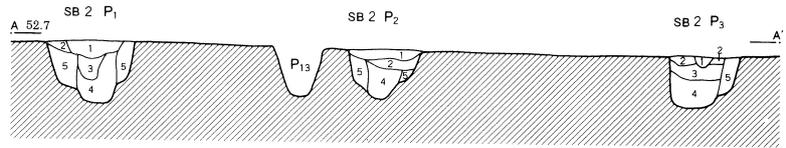
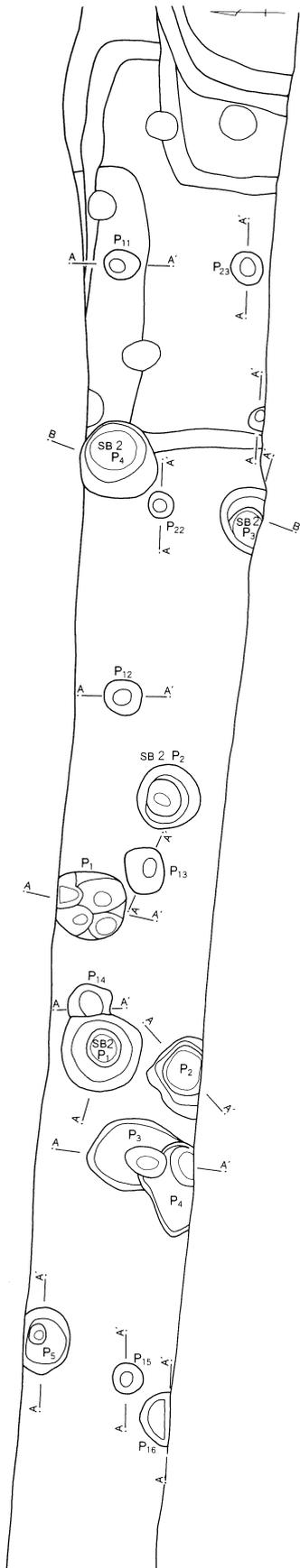
C区東側のL・M-2グリッドに位置する。第2号掘立柱建物跡(SB2-P1~P4)は柱穴を4ヶ所検出した。柱間は柱穴中心でP1~P2~P3は各2.50m、P3~P4は1.45mである。規模や総間数は不明である。主軸方向はS-75°-Eである。出土遺物は柱穴から第37図5・7を検出した。

第3号掘立柱建物跡 (第35図)

C区中央のK-2グリッドに位置する。第3号掘立柱建物跡(SB3-P1~P3)は柱穴を3ヶ所検出した。柱間は柱穴中心でP1~P2~P3は各2.00mである。規模や総間数は不明である。軸方向はS-81°-Eである。

いずれも、近接して検出された住居跡とは建物跡の軸方向が異なることから、柱穴の組み合わせには不安が残るが柱穴であることは間違いない。このほか、調査範囲が狭く組み合わせの明らかにならなかった柱穴も含め少なくとも数棟の建物跡が存在していたものと考えられる。

第34図 第2号掘立柱建物跡



SB 2 Pit1~Pit4

- 1 黄灰色土 (2.5Y4/1) 粘土粒子多量、焼土粒子、炭化物を含む
- 2 黒褐色土 (2.5Y3/1) 地山粒子、炭化物粒子を多量含む
- 3 黒色土 (2.5Y2/1) 径2~3cmの灰色粘土ブロックを含む
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) 地山粒子を多量、焼土ブロックを含む
- 5 褐色土 (10YR4/4) 粘性有り
- 6 黒褐色土 (10YR3/2) 地山粒子、焼土粒子、炭化物を少量含む
- 7 黒褐色土 (10YR3/1) 焼土粒子、炭化物を多量含む
- 8 灰黄褐色土 (10YR5/2) 焼土粒子、炭化物を含む
- 9 褐灰色土 (10YR4/1) 地山粒子を若干含む

Pit1

- 1 黒色土 (10YR2/1) 地山粒子を微量含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子、径2~3cmの地山ブロックを含む
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 径3~4cmの地山ブロックを多量含む
- 4 褐灰色土 (10YR4/1) 地山粒子、炭化物を多量含む

Pit2

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 地山粒子を多量、焼土粒子を少量含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/3) 地山粒子を多量、炭化物を含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子を多量含む
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子、炭化物粒子を多量含む
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) 径2~3cmの地山ブロックを含む

Pit3

- ① 黒褐色土 (10YR2/3) 地山粒子を少量含む
- ② 黒褐色土 (10YR3/1) 径1~2cmの地山ブロックを含む
- ③ 黒褐色土 (10YR3/2)
- ④ 黄褐色土 (10YR5/4) やや粘性有り 黒色土を含む
- ⑤ 灰黄褐色土 (10YR5/2) やや粘性有り しまりよし

Pit4

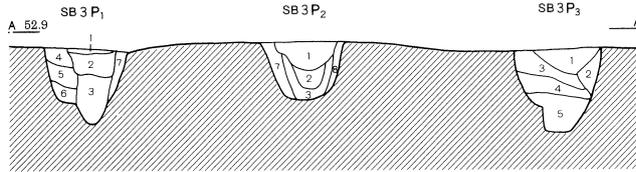
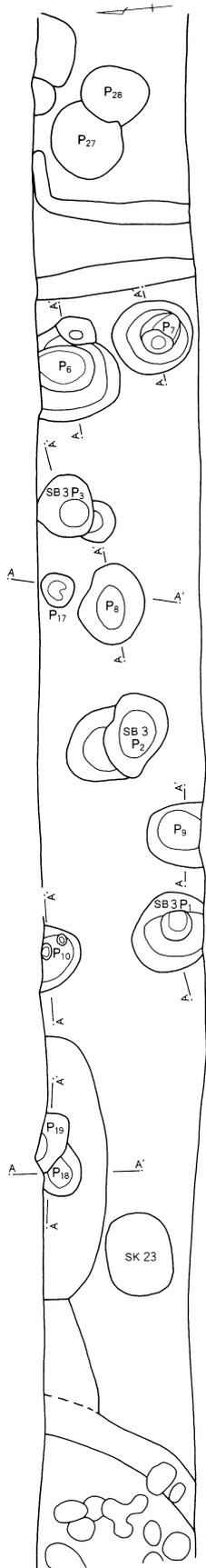
- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子多量、焼土粒子を若干含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子少量、焼土粒子、炭化物多量含む
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 地山粒子、焼土粒子を含む

Pit5

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を多量、焼土粒子を含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子を多量、径1cm前後の焼土粒子炭化物を含む
- 3 明黄褐色土 (10YR6/6) 地山粒子を主体とする
- 4 黒褐色土 (10YR3/2) 地山粒子を多量含む
- 5 黒褐色土 (10YR2/3) 径2~4cmの地山ブロックを含む



第35図 第3号掘立柱建物跡

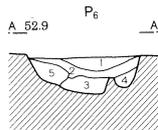


SB 3 Pit1・Pit2

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) しまり良し 地山粒子を多量含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を若干、炭化物を含む
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) 地山粒子を微量、炭化物を多量含む
- 4 黒色土 (10YR2/1) 地山粒子、径1~2cmの地山ブロックを含む
- 5 黒褐色土 (10YR3/1) しまり良し 地山ブロックを多量含む
- 6 黒色土 (10YR1.7/1) しまり良し 地山粒子をほとんど含まない
- 7 黒褐色土 (10YR4/1) 地山微粒子を少量含む

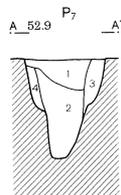
Pit3

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を若干含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/3) 地山ブロックを多量含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子を多量含む
- 4 黒色土 (10YR1.7/1) 地山粒子をほとんど含まない
- 5 黒色土 (10YR2/1) 地山粒子、地山ブロックを含む



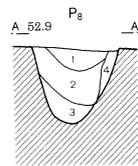
Pit6

- 1 黒褐色土 (7.5YR3/1) フカフカの土 地山粒子を若干含む
- 2 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまり良し 炭化物を含む
- 3 黄褐色土 (7.5YR5/8) しまり良し 炭化物を多量含む
- 4 黄橙色 (10YR6/4) やや粘性有り しまり良し
- 5 灰黄褐色土 (10YR4/2) 径5cm前後の地山ブロックを含む



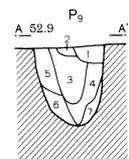
Pit7

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子を微量、炭化物を含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 径2~3cmの地山粒子、炭化物を多量含む
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) しまり良し 地山粒子を少量、炭化物を含む
- 4 黒褐色土 (10YR3/2) しまり良し 地山粒子を多量含む



Pit8

- 1 褐灰色土 (10YR4/1) 地山粒子を微量含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) しまり良し 地山粒子、炭化物を含む
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) しまり良し 地山粒子、炭化物を多量含む
- 4 黒褐色土 (10YR3/2) しまり良し 地山粒子を多量含む
- 5 黒色土 (10YR2/1) しまり良し 地山粒子をほとんど含まない



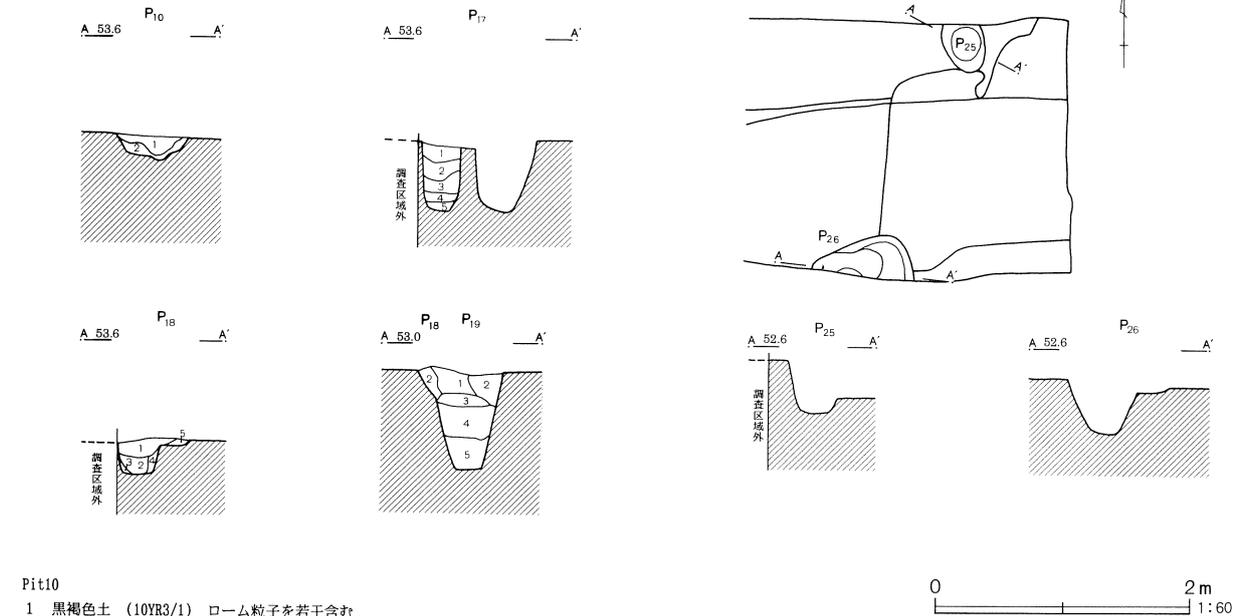
Pit9

- 1 黒色土 (10YR2/1) しまり良し 地山粒子を若干含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) しまり良し 地山粒子を若干、炭化物を含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 地山粒子、炭化物を多量含む
- 4 黒褐色土 (10YR2/3) 地山粒子を少量、焼土粒子、炭化物を多量含む
- 5 褐灰色土 (10YR4/1) しまり良し 径2~5cmの地山ブロックを多量含む
- 6 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり良し 地山粒子を多量、焼土粒子を含む
- 7 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物を若干含む



柱穴からの検出された遺物で図示したものは、第37図 1～7である。1は土師器坏である。体部に緩やかな屈曲をもち、口唇部の内面に丸く突出する。2・3は底部が丸底の北武蔵型坏である。口縁部ヨコナデを

施し、体部下半をヘラケズリ、上半に未調整部をもつ。4は暗文坏である。5は胎土から末野産と判断した坏である。6は胎土中に白色針状物質を含み南比企産の坏である。7は緑釉碗の体部の破片である。

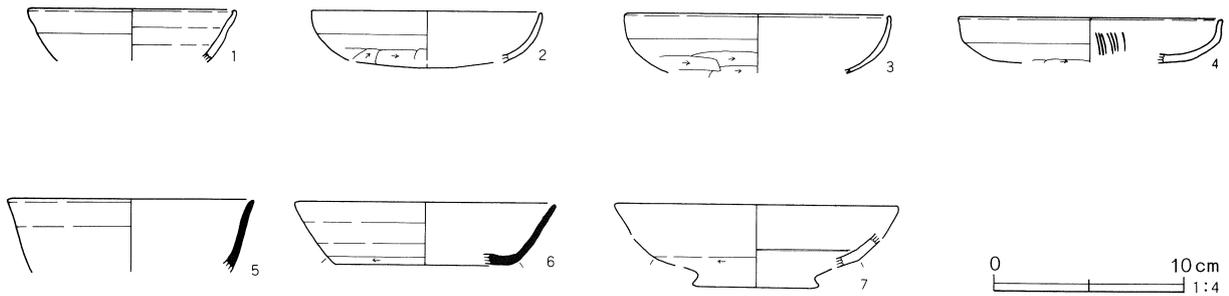


- Pit10
- 1 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子を若干含む
 - 2 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子を多量含む
- Pit17
- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 地山粒子を若干含む
 - 2 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を少量含む
 - 3 黒褐色土 (10YR2/3) 地山粒子を含まない
 - 4 暗褐色土 (10YR3/3) 地山粒子を多量含む
 - 5 暗褐色土 (10YR3/4) 地山粒子を少量含む
 - 6 黒褐色土 (10YR3/1) 炭化物を若干含む

- Pit18
- 1 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒子を微量含む
 - 2 黒褐色土 (10YR2/2) 他の粒子を含まない
 - 3 黒色土 (10YR2/1) 地山粒子を含む
 - 4 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を微量含む
 - 5 褐灰色土 (10YR4/1) 地山粒子を微量含む

- Pit19
- 1 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子を若干含む
 - 2 褐灰色土 (10YR4/1) ローム粒子を多量含む
 - 3 黒色土 (10YR2/1) 他の粒子を含まない
 - 4 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒子を若干含む
 - 5 黒褐色土 (2.5Y3/1) ローム粒子を多量含む

第37図 柱穴出土遺物



第39表 柱穴出土遺物観察表 (第37図)

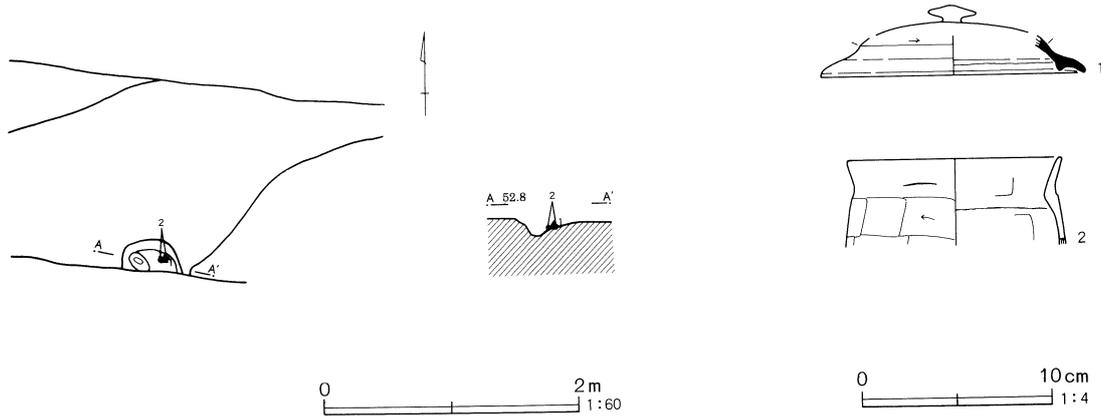
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(10.8)	(2.8)		A B C D	普通	明褐色	5	P-1 (C区)	
2	土師器坏	(12.0)	(2.6)		A B C D F	普通	褐色	10	P-19 (C区)	
3	土師器坏	(13.8)	(3.1)		A B C D	良好	茶褐色	20	P-26 (C区)	
4	土師器坏	(13.9)	(2.4)		A B D	普通	橙褐色	10	P-6 (C区)	暗文
5	須恵器坏	(12.8)	(3.9)		A C D片	普通	灰色	5	S B-2 P-4	末野産
6	須恵器坏	(13.6)	3.3	(9.0)	A B E F 針	良好	灰色	15	P-8 (D区)	南比企産
7	緑釉碗		(1.8)		A	良好	緑色	5	S B-2 P-4	

第20号柱穴は調査C区のI-2グリッドに位置する。南側は調査区域外となる。直径0.54 m、深さ0.15 mである。覆土中から口縁部内側にかえりをもった末野産の須恵器蓋と土師器の小型台付甕を検出した。

第21号柱穴は調査C区のI-2グリッドに位置する。北側は調査区域外となる。直径0.56m、深さ0.20

mである。覆土上面からまともな遺物を検出した。図示したものは第21図1～5である。1・2は土師器甕で、1は「コ」の字状口縁甕の破片である。3は台付甕の脚部破片で、4・5は末野産の須恵器高台付坏である。

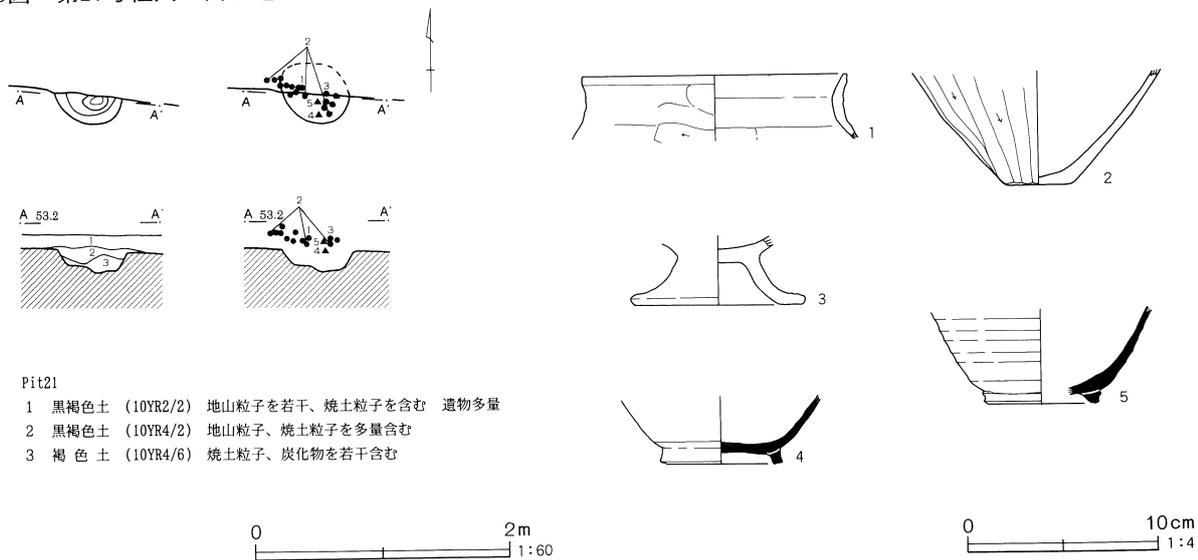
第38図 第20号柱穴・出土遺物



第40表 第20号柱穴出土遺物観察表 (第38図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵器蓋	(14.0)	(2.0)		A D F片	良好	黒灰色	10	No. 2	末野産
2	土師器台付甕	(11.2)	(4.6)		A B D E F	普通	赤褐色	30	No. 1・3	小型 輪積痕あり

第39図 第21号柱穴・出土遺物



- Pit21
- 1 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒子を若干、焼土粒子を含む 遺物多量
 - 2 黒褐色土 (10YR4/2) 地山粒子、焼土粒子を多量含む
 - 3 褐色土 (10YR4/6) 焼土粒子、炭化物を若干含む

第41表 第21号柱穴出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器台付甕	(13.9)	(3.5)		A B D	普通	暗褐色	10	No.18	
2	土師器甕		(6.0)	(3.7)	B F	普通	茶褐色	20	No. 2・7・17	
3	土師器台付甕		(3.6)	8.8	A B D F	普通	褐色	70	No. 4	
4	須恵器高台付坏		(3.6)	5.6	A C F片	普通	褐色	40	No. 1	末野産
5	須恵器高台付坏		(5.1)	(5.7)	A B C F片	普通	淡灰色	20	No. 5	末野産

(5) グリッド

調査D区の西側N・O-2グリッドに遺物が集中して検出された。遺物は住居跡の平面プランを確認できなかったため全体で遺物分布図を作成し、取り上げた。検出された遺物は混在しているものの概ね、完掘した住居跡のプランに合わせて遺物の分布が時期別に判断できる。東側の第19号住居跡の覆土上層は第41・42図5・8・35~39の北武蔵型杯、42~44の暗文杯、29の

須恵器盤、45の口縁部に沈線をもつ須恵器杯、47の返りをもつ須恵器蓋、49の須恵器高台付杯、54の鉄鏃である。第20号住居跡の覆土上層は12の暗文杯、32・33の土師器甕の口縁部破片であった。第22号住居跡の覆土上層からは1・2の北武蔵型土師器杯、11・13の平底気味の暗文杯、20の須恵器高台付杯、22・23・26・28の須恵器蓋、30の須恵器高台付盤、31の須恵器円面硯が出土している。

第40図 グリッド遺物分布図



第42表 Nグリッド出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師杯類	土師甕類	土師壺類	須恵杯類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
G N2	D	破片数(片)	936	1209		162		1	4	3
G N2	D	重量(g)	3130.4	4270.4		1439.0		57.0	98.5	36.3

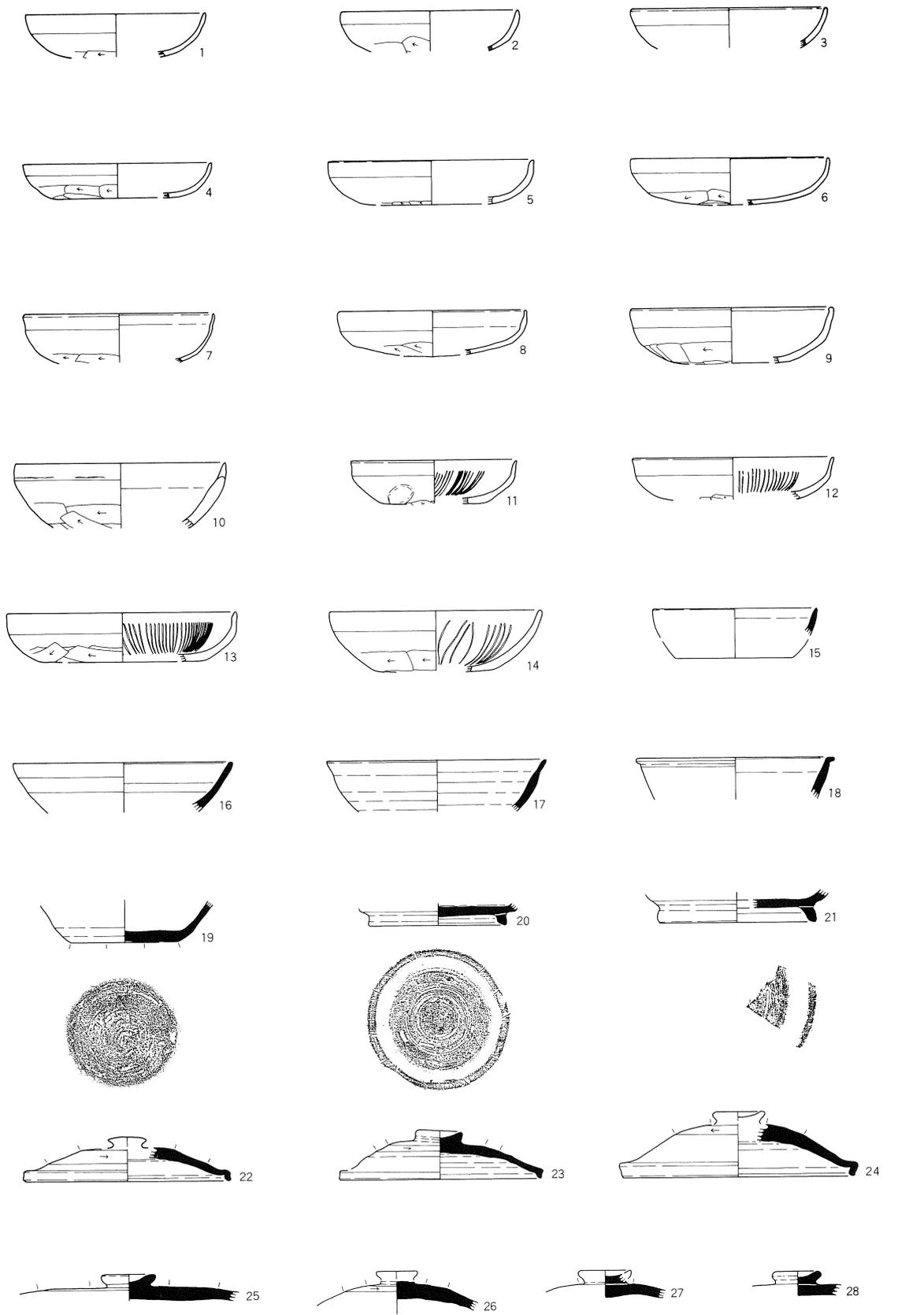
第43表 Oグリッド出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師杯類	土師甕類	土師壺類	須恵杯類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
G O2	D	破片数(片)	83	32		10	2		1	1
G O2	D	重量(g)	384.2	280.1		176.8	28.0		29.0	23.2

第44表 グリッド出土遺物観察表 (第41・42図)

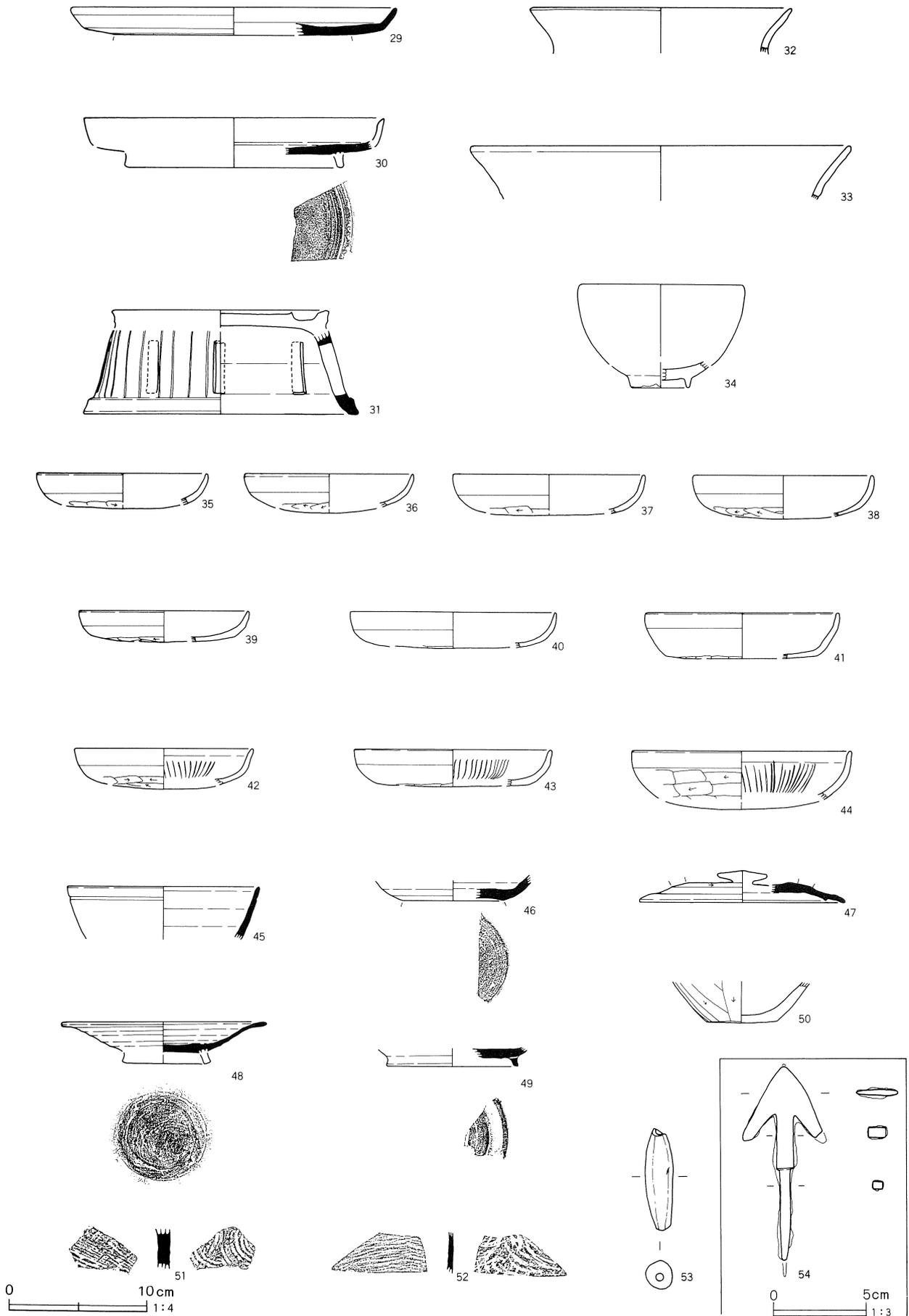
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器杯	(11.9)	(2.9)		ABF	普通	褐色	15	N-2 No.78	
2	土師器杯	(11.8)	(2.7)		ABCF	普通	明褐色	15	N-2 No.66	
3	土師器杯	(12.9)	(2.7)		ABDF	普通	明褐色	20	N-2	

第41図 グリッド出土遺物(I)



0 10 cm
1:4

第42図 グリッド出土遺物(2)

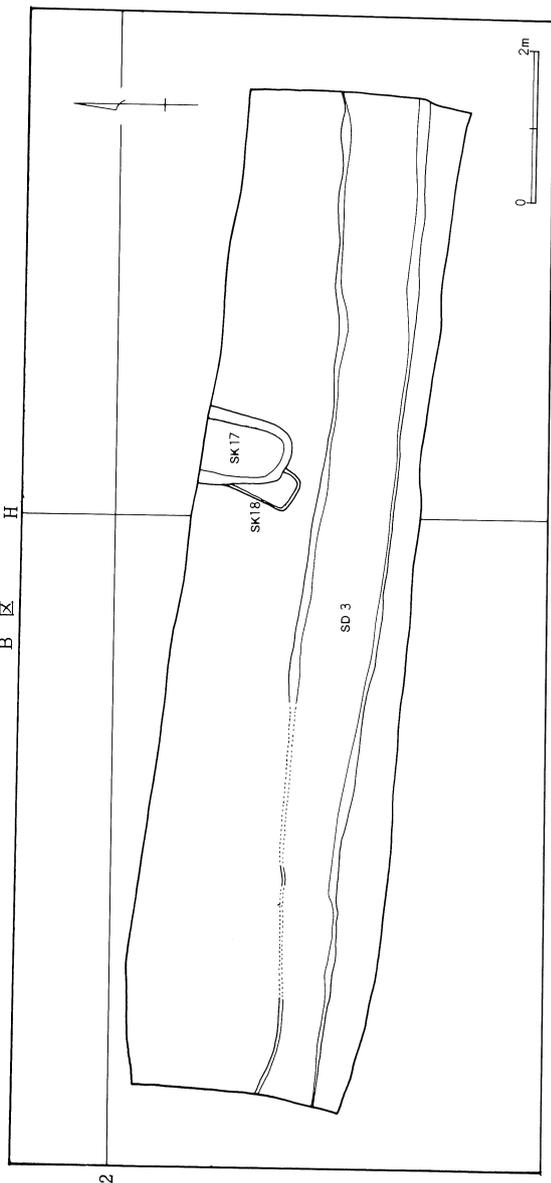


番号	器種	口径	器高	底径	胎土	烧成	色调	残存率	出土位置	備考	
4	土師器坏	(12.6)	2.3		ABDF	普通	明褐色	15	N-2 No.47		
5	土師器坏	(13.6)	(2.9)		ABCF片	普通	明褐色	15	N-2 No.10		
6	土師器坏	(13.1)	3.1		ABDF	普通	褐色	30	N-2 No.4		
7	土師器坏	(12.6)	(3.3)		ABDF	普通	明褐色	20	N-2 No.65		
8	土師器坏	(12.4)	(3.0)		ABDF	普通	褐色	20	N-2 No.81		
9	土師器坏	(13.3)	3.7	8.0	ABCDF	普通	明褐色	20	N-2 No.40・43		
10	土師器坏	(14.0)	(4.3)		ABDF	普通	褐色	15	N-2 No.62		
11	土師器坏	(11.0)	(2.8)		ABF片	良好	赤褐色	20	N-2 No.20	暗文	
12	土師器坏	(13.3)	(2.8)		ABDF	良好	茶褐色	10	N-2 No.26	暗文	
13	土師器坏	(15.3)	3.3	(11.0)	ABDF	普通	暗褐色	20	N-2 No.16	暗文	
14	土師器坏	(14.0)	(4.1)		ABF片	普通	褐色	20	N-2 No.32	暗文	
15	須惠器坏	(10.9)	(1.9)		ADE片	良好	黑褐色	5	N-2	未野産	
16	須惠器坏	(14.6)	(3.4)		ACF片	良好	黑褐色	20	N-2 No.35	未野産	
17	須惠器坏	(14.6)	(3.5)		ABF	良好	淡灰色	25	N-2・3	未野産	
18	須惠器坏	(13.0)	(2.8)		ACDF片	良好	黑褐色	10	N-2	未野産	
19	須惠器坏		(2.8)	7.2	ACD片	普通	灰色	80	N-2 No.12	未野産	
20	須惠器高台付坏		(1.5)	9.2	ACF片	良好	淡灰色	10	N-2 No.83	未野産	
21	須惠器高台付坏		(2.1)	(10.4)	ABDF片	普通	白灰色	20	N-2 No.9	未野産	
22	須惠器蓋	(13.6)	(2.3)		ACDF片	普通	灰色	30	N-2 No.59	未野産	
23	須惠器蓋	(13.5)	3.3		ACD片	普通	暗灰色	80	N-2 No.82	未野産	
24	須惠器蓋	(15.3)	(3.5)		ACD片	普通	灰色	30	N-2	未野産	
25	須惠器蓋		(1.8)		ACDF片	普通	灰色	30	N-2	未野産	
26	須惠器蓋		(2.0)		ACDF片	普通	暗灰色	40	N-2 No.84	未野産	
27	須惠器蓋		(1.5)		ACDF片	不良	暗灰褐色	20	N-2 No.22	未野産	
28	須惠器蓋		(1.6)		ACDF片	普通	灰色	20	N-2 No.57	未野産	
29	須惠器盤	(23.6)	2.0		ADF片	良好	淡灰色	20	N-2 No.14	未野産	
30	須惠器高台付盤		(1.0)		ACDF	良好	灰色	20	N-2 No.80	未野産	
31	須惠器凹面硯		(6.0)	(20.0)	ACD	良好	黑褐色	10	N-2 No.2	未野産	
32	土師器甕	(18.8)	(3.3)		ABDF片	普通	褐色	30	N-2 No.5		
33	土師器甕	(27.4)	(3.9)		ABDF	普通	褐色	5	N-2 No.31		
34	陶器小碗		(1.9)	(4.0)		良好	乳白色	30	N-2	瀬戸	
35	土師器坏	(12.3)	(2.3)		ABCDEF	普通	褐色	10	O-2 No.23		
36	土師器坏	(12.2)	(2.4)		ABCDEF	普通	暗褐色	10	O-2 No.29		
37	土師器坏	(13.8)	(2.8)		ABCDEF	普通	褐色	10	O-2 No.4		
38	土師器坏	(13.0)	(3.0)		ABCD	普通	褐色	10	O-2 No.27		
39	土師器坏	(12.2)	(2.3)		ABCDEF	普通	褐色	10	O-2 No.2		
40	土師器坏	(14.8)	(2.6)		ABCD	普通	褐色	10	O-2 No.35		
41	土師器坏	(14.0)	(3.3)		ABCDEF	普通	明褐色	10	O-2 No.17		
42	土師器坏	(13.0)	(2.6)		ABCDEF	普通	褐色	10	O-2 No.38	暗文	
43	土師器坏	(14.2)	(2.6)		ABDF	普通	橙褐色	10	O-2 No.20	暗文	
44	土師器坏	(15.8)	(3.5)		ABCD	良好	橙褐色	10	O-2 No.14	暗文	
45	須惠器坏	(13.8)	(3.8)		ACDF片	普通	淡灰色	5	O-2 No.10		
46	須惠器坏		(1.9)	(7.4)	ACDF	良好	灰色	20	O-2 No.8	未野産	
47	須惠器蓋	(14.8)	(1.5)		AD片	不良	黑褐色	20	O-2 No.7	未野産	
48	須惠器高台付皿	15.0	(2.3)		ABCF片	不良	灰色	60	O-2 No.33	未野産 高台部分剥離	
49	須惠器高台付坏		(1.3)	(9.6)	ACDF片	普通	灰色	20	O-2 No.26	未野産	
50	土師器甕		(3.0)	(5.1)	ABCDEF	普通	褐色	20	O-2 No.19		
51	須惠器甕				ACD片	普通	灰色		O-2 No.37	未野産	
52	須惠器甕				ADF	普通	淡灰色		O-2	未野産	
53	土錘	残存長 7.4、幅 2.05、孔径 0.6cm、重量 29.0g							90	O-2 No.3	

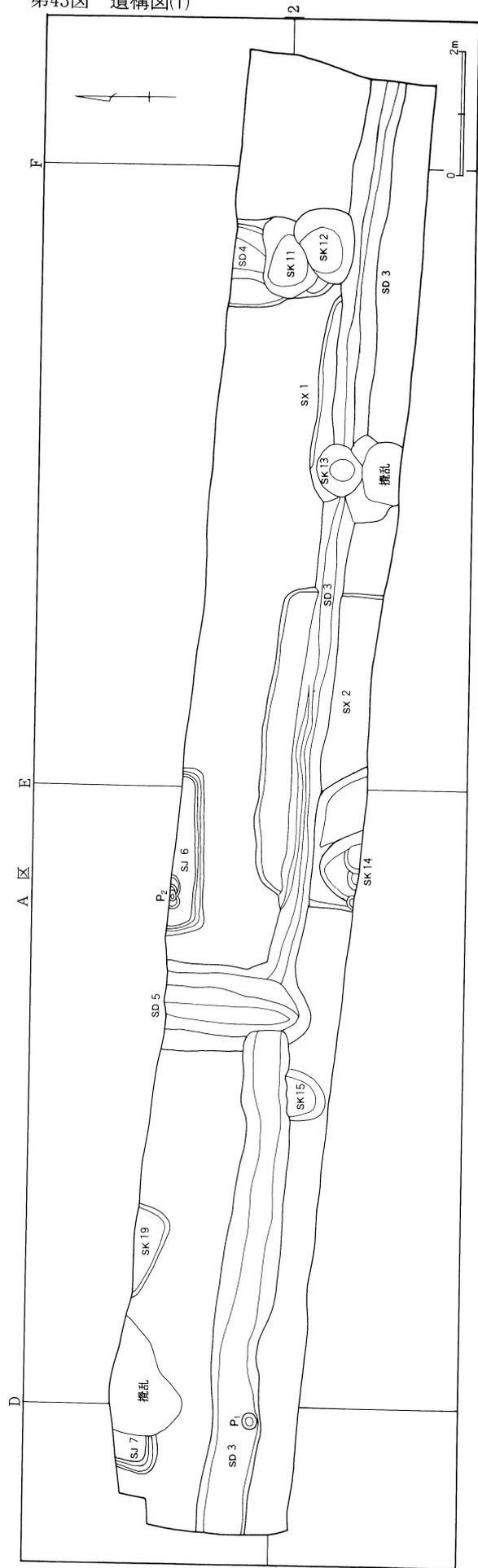
2. 中・近世

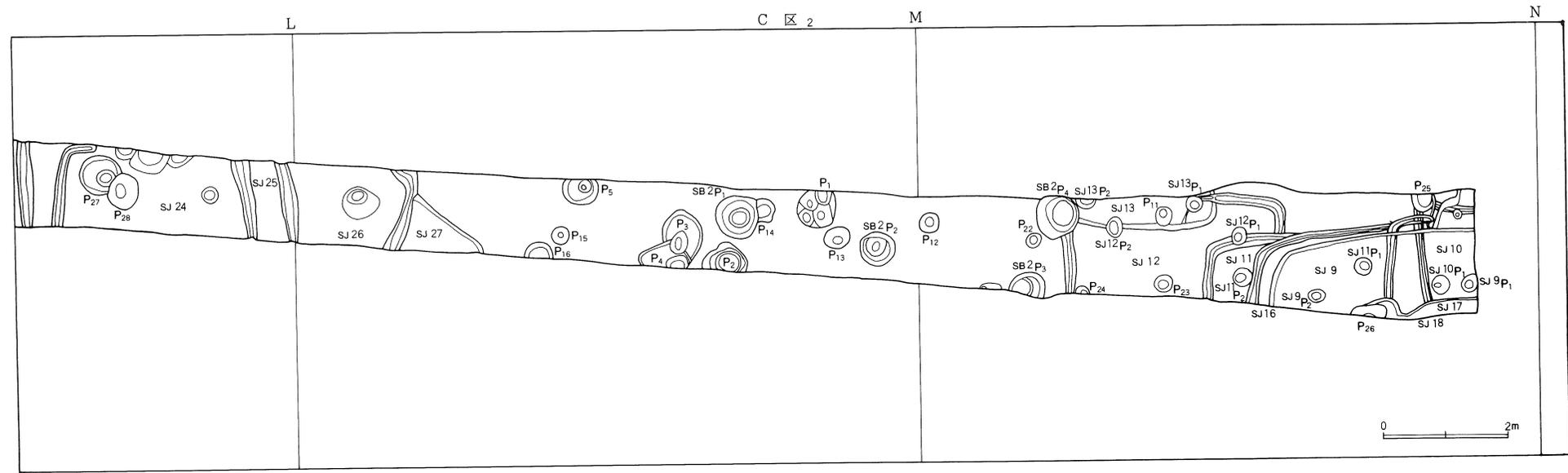
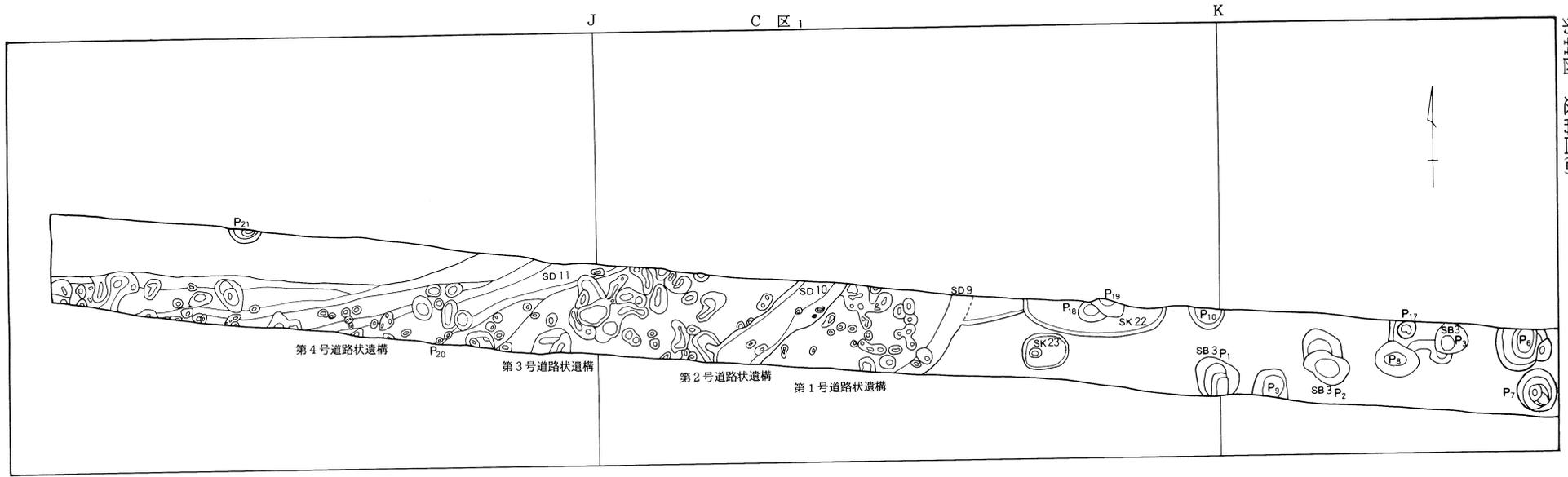
宮西遺跡では、中・近世の遺構と遺物を検出した。遺構は調査区全体にわたって検出された。溝跡11条、土壌20基、道路状遺構3基、性格不明遺構2基などである。遺物は、天目茶碗、瀬戸、青磁碗などである。

宮西遺跡の各区から検出された遺構は、A区からは、第3・4・5号溝跡、第11・12・13・14・15号土壌、第1・2号性格不明遺構を検出した。B区からは、東西方向に伸びる第3号溝跡の続きが検出された。また、第17・18号土壌を検出した。C区からは、第1・2・3・4号道路状遺構を検出し、これに伴う掘り方である第9・10・11号溝跡を検出した。また、第22・23号土壌を検出した。D区からは、第6・7・8号溝跡と第21号土壌を検出した。E区からは、第1・2号溝跡



第43図 遺構図(1)

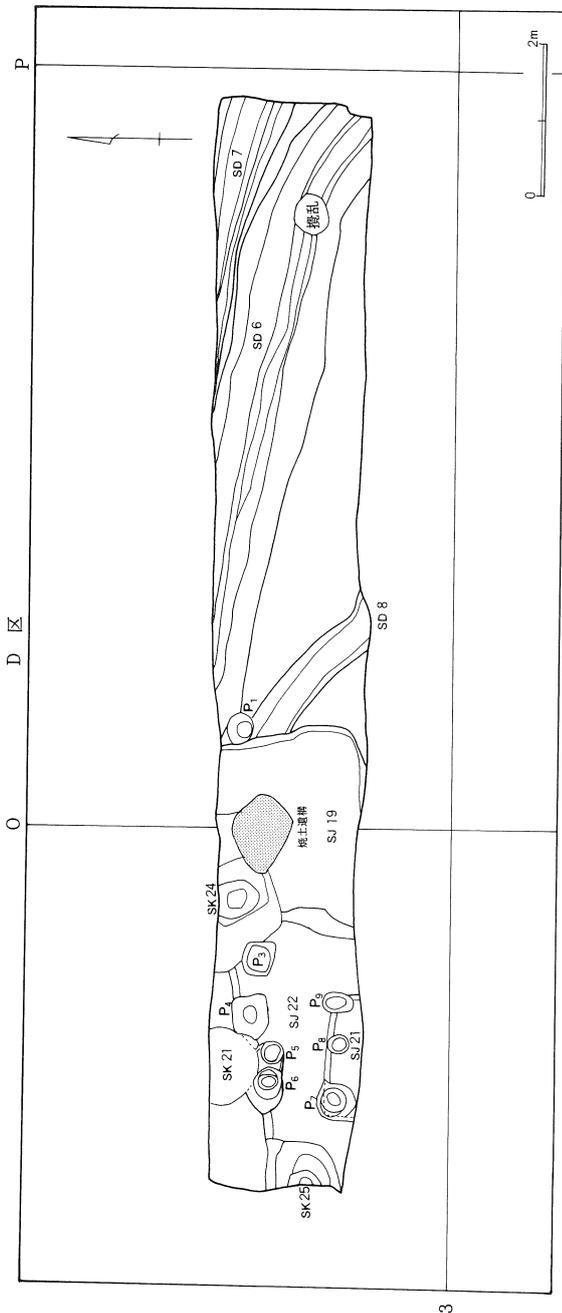




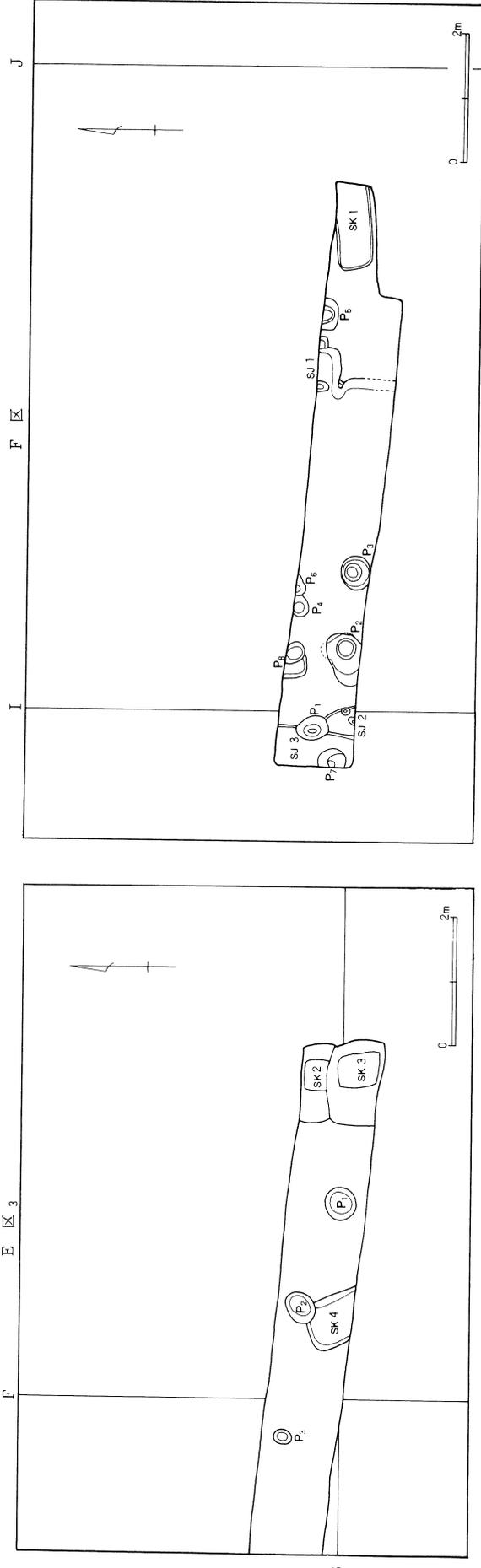
を検出した。また、調査区東寄りに第2・3・4号土壙を、調査区中央に第20号土壙を、調査区西寄りに第6・7・8・9・10号土壙を検出した。F区からは、第1号土壙を検出した。

調査区の北側には、大寄八幡神社が鎮座しており神社との関連性をうかがわせる遺構の存在が期待されたが、検出された遺物も少量であり、調査区も狭く、時期や遺構の性格を明確にする資料としては不十分であった。

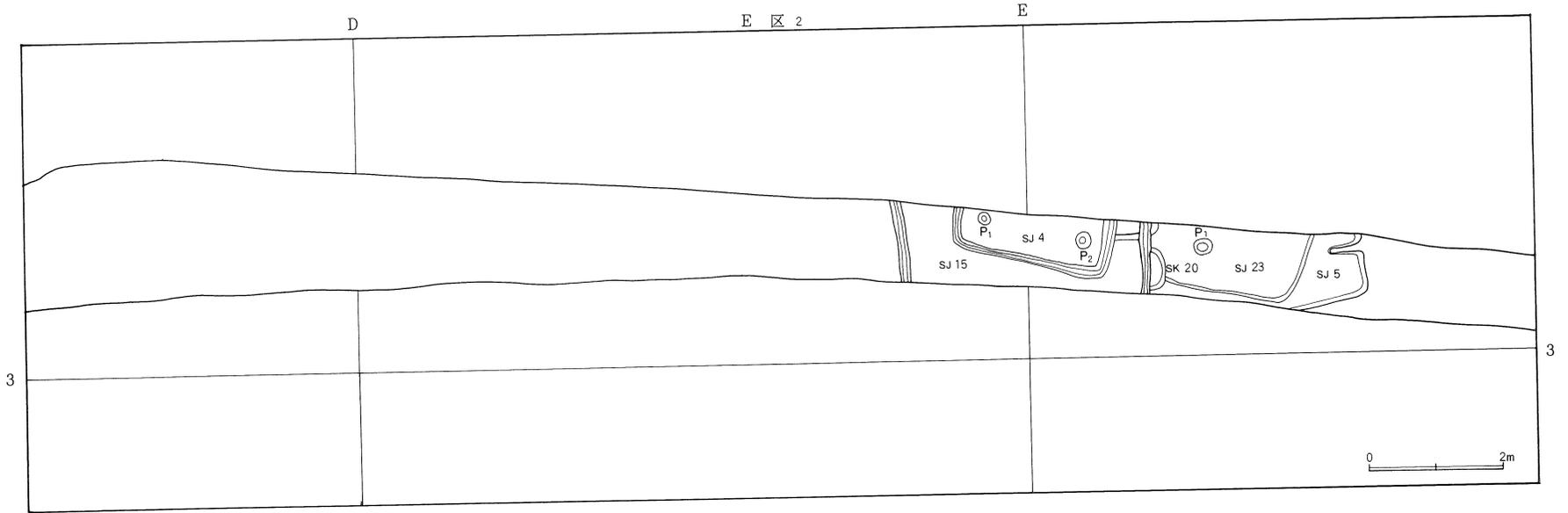
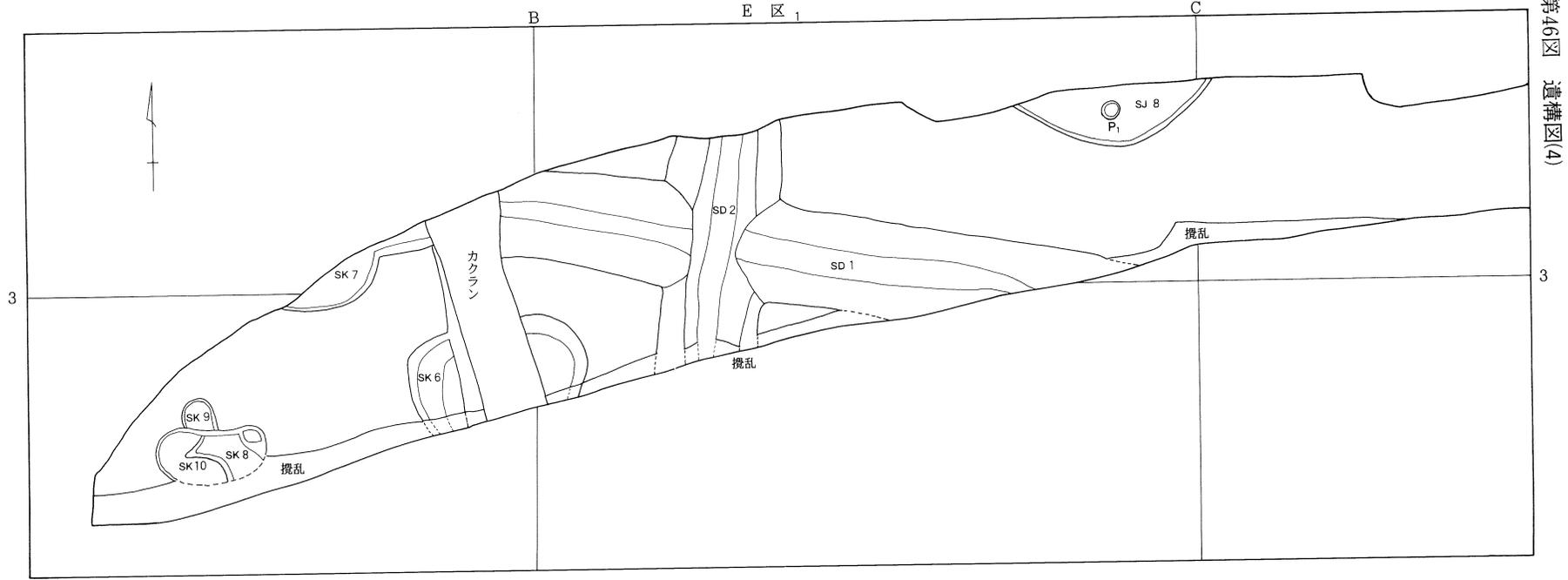
以下、各遺構について述べる。



第45図 遺構図(3)



第46図 遺構図(4)



(1) 溝跡

第1号溝跡 (第47図)

調査E区西端のA・B-2・3グリッドに位置する。溝の形態は、東西方向に直線的に伸び、両端とも調査区域外へ伸びる。重複関係は直交する第2号溝跡が存在し、この第2号溝跡に切られている。西側は一部攪乱を受ける。最西端は第7号土壌に切られている。

規模は、上幅1.53m、下幅0.27m、深さ0.53mである。検出された長さは8.60mである。溝跡の底面の高さは東側で52.88m、西側で52.83mであり、わずかながら西側が低いもののほぼ同じ高さであった。溝跡の主軸方向はS-82°-Eである。

出土遺物は、第50図1～3に図示した。古代の遺物と中世の遺物が検出された。1・2は末野産の須恵器坏である。3は在地産の内耳鍋の底部と考えられる。

第2号溝跡 (第47図)

調査E区西端のB-2・3グリッドに位置する。溝の形態は、南北方向に直線的に伸び、両端とも調査区域外へ伸びる。重複関係は直交する第1号溝跡が存在し、この第1号溝跡を切って第2号溝跡は掘られている。南側の一部は攪乱を受ける。

規模は、上幅1.72m、下幅0.31m、深さ0.83mである。検出された長さは3.33mである。溝跡の底面の高さは北側で52.54m、南側で52.60mであり、わずかながら北側が低いもののほぼ同じ高さであった。溝跡の主軸方向はN-8°-Eである。

出土遺物は、第50図6に図示した。古代の遺物と中世の遺物が検出された。6は渥美焼の大甕の口縁部破片とみられる。また、溝の覆土中からは拳大の石が多く検出された。

第3号溝跡 (第48・49図)

調査A・B区のC～H-1・2グリッドに位置する。溝の形態は、東西方向に直線的に伸び、両端とも調査区域外へ伸びる。重複関係は直交する第4・5号溝跡が存在し、この第3号溝跡を切り込んでいる。さらに本溝跡は第1・2号性格不明遺構を切っている。また、重複する第13号土壌より新しく、第12・15号土壌より

古い。

規模は、上幅0.45～0.94m、下幅0.10～0.62m、深さ0.32～0.50mである。検出された長さはA区で23.63m、B区で13.38mである。溝跡の底面の高さはA区東側で52.825m、西側で53.134mであり、わずかながら東側が低く、高低差は約30cm程である。B区でも東側で52.842m、西側で53.031mであり、高低差は約19cm程である。溝跡の主軸方向はS-86°-Eである。

出土遺物は、E-2グリッドの第13号土壌北側から常滑焼のすり鉢を検出した。

本遺構は、調査区の中間にあたる現道に沿って北側に検出された。第3図の周辺遺跡遺構分布図に示されているように宮西遺跡第2次調査の成果によれば、遺跡中央を東西に走る溝跡が検出されており、本遺構はこの溝に繋がるものと考えられる。時期としては、近世の溝跡の可能性が強い。また、東側の第9・10・11号溝跡は本遺構より古く、この溝とは直接の重複関係を持たないが、第1・2号溝跡も古いと考えられる。

第4号溝跡 (第48図)

調査A区東側のE-2グリッドに位置する。溝の形態は、南北方向に直線的に伸び、北側は調査区域外へ伸びる。重複関係は南側に第11・12号土壌が掘り込まれている。また、本溝跡の南端には直交する方向に第3号溝跡が存在し、この第3号溝跡より新しいと考えられる。

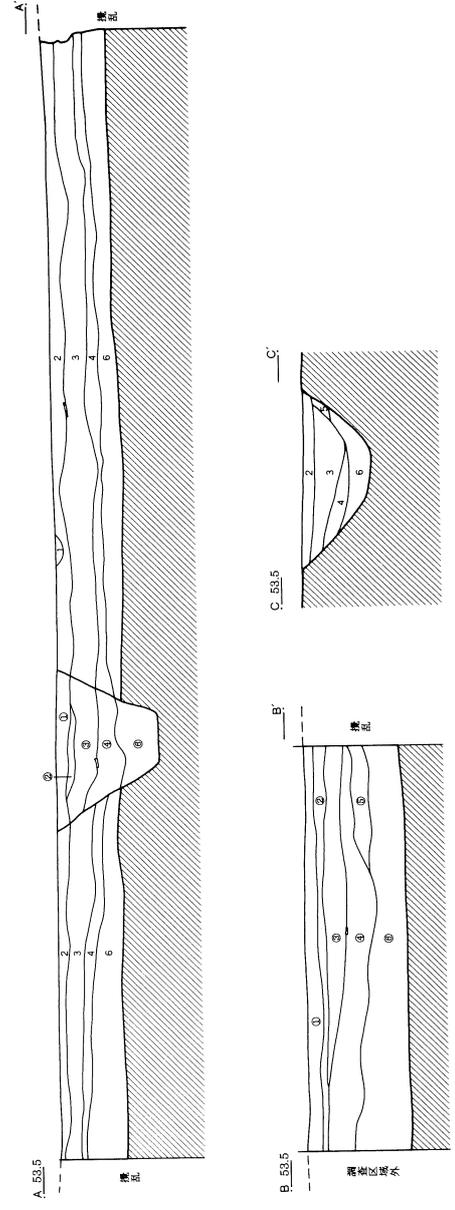
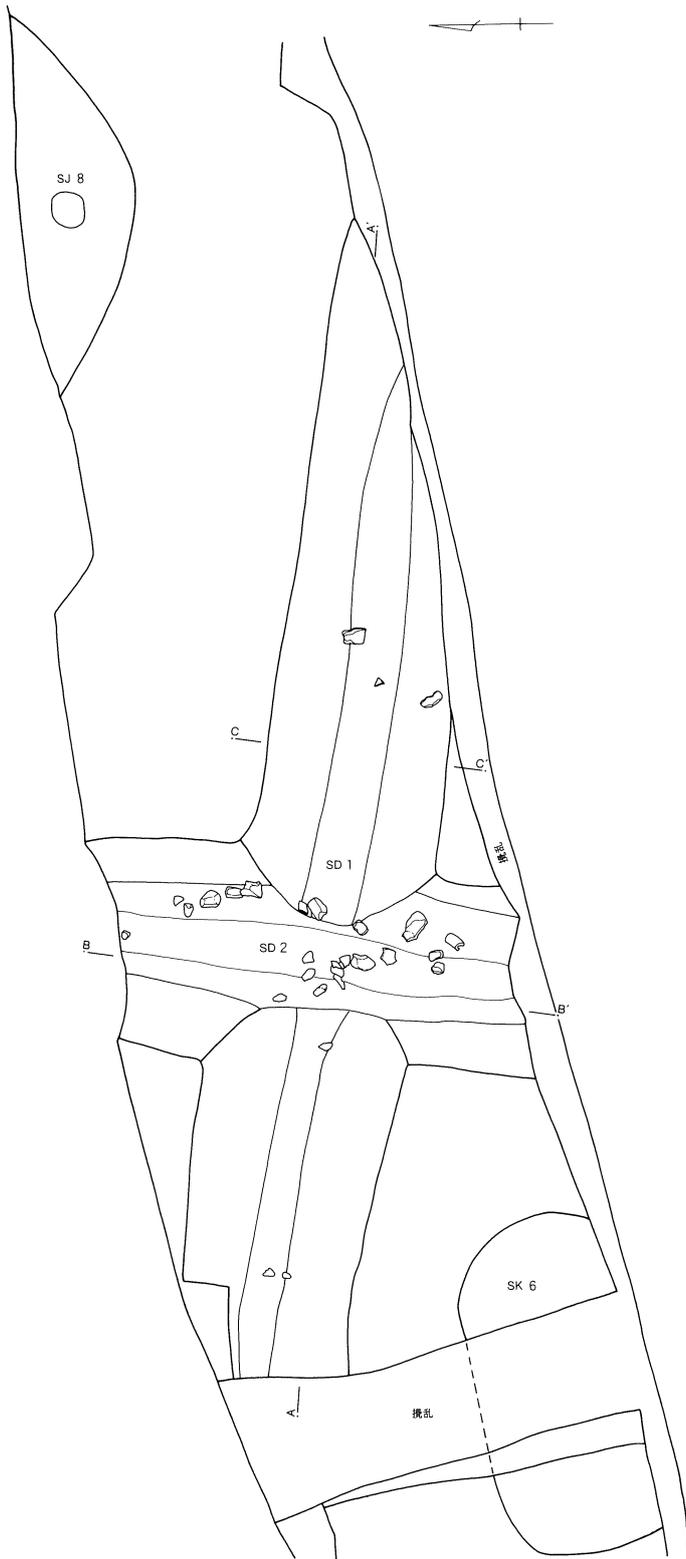
規模は、上幅1.40m、下幅0.50m、深さ0.28mである。検出された長さは1.62mである。溝跡の底面の高さは北側で52.88mであった。溝跡の主軸方向はN-1°-Eである。

出土遺物は、検出されなかった。

第5号溝跡 (第49図)

調査A区中央のD-2グリッドに位置する。溝の形態は、南北方向に直線的に伸び、北側は調査区域外へ伸びる。重複関係は本溝跡の南端に直交する方向に第3号溝跡が存在し、この第3号溝跡を切り込んで造られ新しいと考えられる。

第47図 第1・2号溝跡



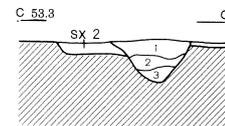
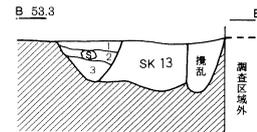
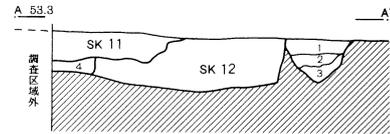
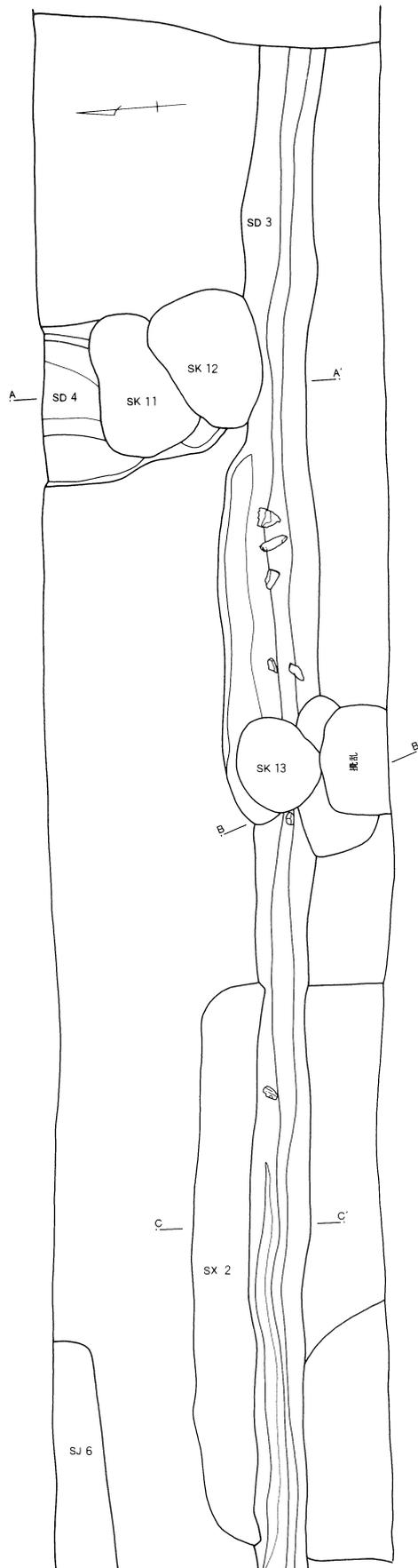
第1号溝

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) しまり良し 炭化物を若干含む
- 2 黄褐色土 (10YR4/3) しまり良し 鉄分、焼土粒子、炭化物を多量含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) しまり良し ローム微粒子を多量含む
- 4 黒褐色土 (10YR2/3) しまり良し ローム粒子を若干、炭化物を多量含む
- 5 褐色土 (10YR4/6) しまり良し 地山粒子、鉄分を多量含む
- 6 褐色土 (10YR4/4) ザクザクの土 地山粒子、鉄分を多量含む

第2号溝

- ① 褐灰色土 (10YR4/1) ローム粒子を多量、炭化物を含む
- ② 黒褐色土 (10YR2/2) やや粘性有り 炭化物を若干含む
- ③ 黒褐色土 (10YR3/2) 地山粒子を若干、焼土粒子、炭化物を多量含む
- ④ 暗褐色土 (10YR3/3) 鉄分を多量、炭化物を若干含む
- ⑤ 黒褐色土 (10YR3/1) やや粘性有り ローム粒子を多量含む
- ⑥ 暗褐色土 (10YR3/4) 地山粒子、鉄分を多量、炭化物を若干含む

第48図 第3・4号溝跡

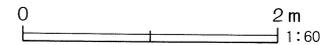


第3号溝

- 1 黒色土 (10YR2/1) しまり良し ローム粒子を若干含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 径2cm前後のローム粒子を多量、鉄分を含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) やや粘性有り

第4号溝

- 4 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性有り ローム粒子を多量含む



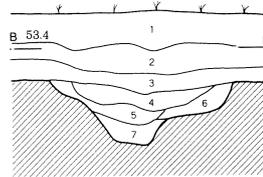
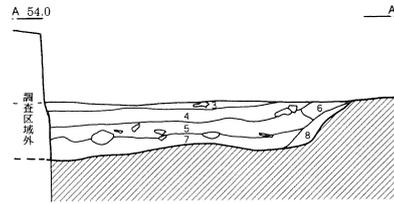
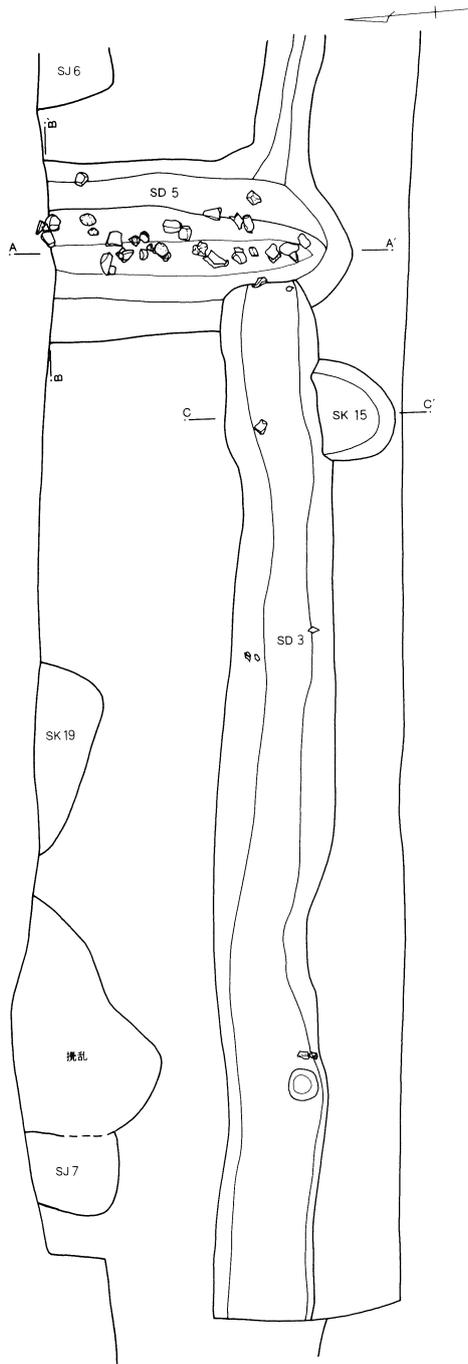
規模は、上幅1.42m、下幅0.20m、深さ0.47mである。検出された長さは2.34mである。溝跡の底面の高さは北側で52.66mであった。溝跡の主軸方向はN-1°-Eである。本溝跡と第4号溝跡の距離は約12mである。第2号溝跡との距離は軸方向で約24mである。これら3条のほぼ同じ主軸方向をもつ溝跡は何らかの関連性があるものと考えられる。

出土遺物は、古代の須恵器甕や土師器甕の破片が少量検出されたが遺構の切り合い関係からみて混入と判断される。また、覆土中層から下層にかけて、第2号溝跡と同様に拳大の石が多く検出された。

第6号溝跡 (第51図)

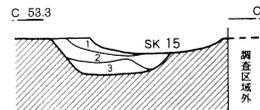
調査D区東よりのO-2グリッドに位置する。溝の形態は、東西方向に緩やかに湾曲して伸びる。北西側と南東側は調査区域外へ伸びる。重複関係は本溝跡が東側に平行して走る第7号溝跡を切り込んでいる。ま

第49図 第3・5号溝跡



第5号溝

- 1 耕作土
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) しまりよし ローム粒子を微量含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子を微量、焼土粒子を若干含む
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) しまりよし ローム粒子を若干含む
- 5 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子、焼土粒子、炭化物を若干含む
- 6 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子を多量、炭化物を若干含む
- 7 黒褐色土 (7.5YR3/1) ザクザクの土、ローム粒子を多量含む
- 8 暗褐色土 (7.5YR3/4) やや粘性有り ローム粒子を多量含む



第3号溝

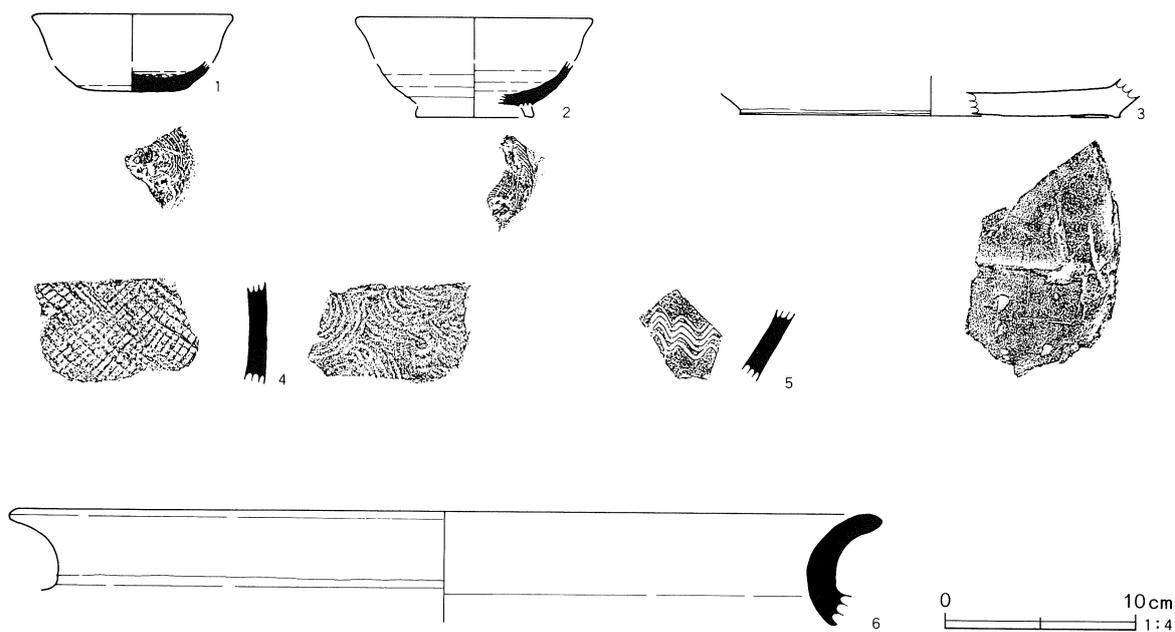
- 1 黒色土 (10YR2/1) しまりよし ローム粒子を若干含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 径2cm前後のローム粒子を多量、鉄分を含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) やや粘性有り



第45表 溝跡出土遺物観察表 (第50図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵器環		(1.6)	(4.4)	A C D片	普通	灰色	20	SD-1	末野産
2	須恵器高台付環		(2.3)		A C D片	普通	灰色	20	SD-1 No.3	末野産
3	鍋		(2.1)	(20.0)	A D	不良	黒褐色	20	SD-1 (F区)	中・近世
4	須恵器甕				A C D片	普通	暗灰色		SD-5 No.6	末野産
5	須恵器甕				A C D片	普通	暗灰色		SD-11 (C区)	末野産
6	須恵器甕	(45.2)	(5.8)		A E	普通	黒灰色	5	SD-2 No.2	中世?

第50図 溝跡出土遺物



た、西側には第8号溝跡が位置する。

規模は、上幅1.23m、下幅0.14m、深さ0.85mである。検出された長さは8.50mである。溝跡の底面の高さは西側で51.74m、東側で51.67mであった。わずかながら西側が高く、東に傾斜する。溝跡の主軸方向は西側部分がS-75°-Eであるのに対し、東端部分でS-45°-Eと軸方位が大きく傾き、溝全体が南方向に大きく湾曲している。

出土遺物は、古代の須恵器や土師器の破片に混じって少量であるが中世の遺物を検出した。第52図1~18は第6・7号溝跡から検出した遺物である。この中で中世の遺物は、4が在地産の甕底部破片、9は天目茶碗の破片である。11・12は中世瓦である。また、16は火鉢の口縁部破片とみられ、小さなスタンプによる巴文が巡る。17・18は内耳鍋である。19は砥石である。

第7号溝跡（第51図）

調査D区東よりのO-2グリッドに位置する。溝の形態は、東西方向に緩やかに湾曲して伸びる。北西側と南東側は調査区域外へ伸びる。重複関係は本溝跡が西側に平行して走る第6号溝跡によって切られている。また、西側には第8号溝跡が位置する。

規模は、上幅0.92m、下幅0.30m、深さ0.40mである。検出された長さは2.70mである。溝跡の底面の高さは中央部分で51.85mであった。溝跡の主軸方向はS-72°-Eであり、第6号溝跡と平行して検出された。

出土遺物は、古代の須恵器や土師器の破片に混じって少量であるが中世の遺物を検出した。第52図1~18は第6・7号溝跡から検出した遺物である。この中で第7号溝の覆土から検出された中世の遺物は、18の内耳鍋と19の砥石である。

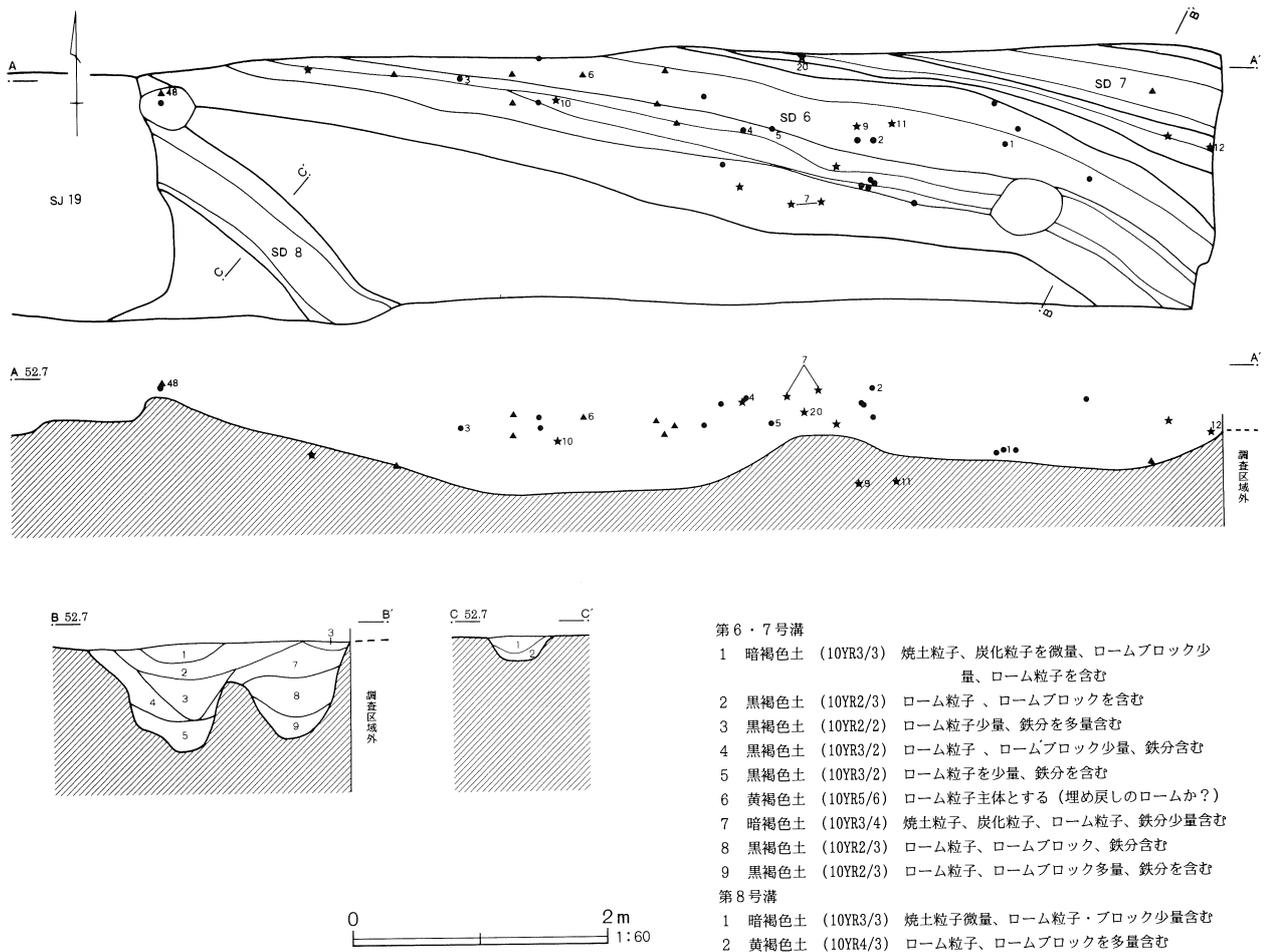
第8号溝跡（第51図）

調査D区中央のO-2グリッドに位置する。溝の形態は、北西から南東方向に緩やかに湾曲して伸びる。北西側と南東側は調査区域外へ伸びる。本溝跡の北西側には第19号住居跡が位置する。東側には第6・7号溝跡が位置する。

規模は、上幅0.50m、下幅0.27m、深さ0.21mである。検出された長さは2.30mである。溝跡の底面の高さは西側で52.35m、東側で52.44mであった。わずかながら東側が高く、西に傾斜する。溝跡の主軸方向は西側部分がS-40°-Eである。

出土遺物は、検出されなかった。

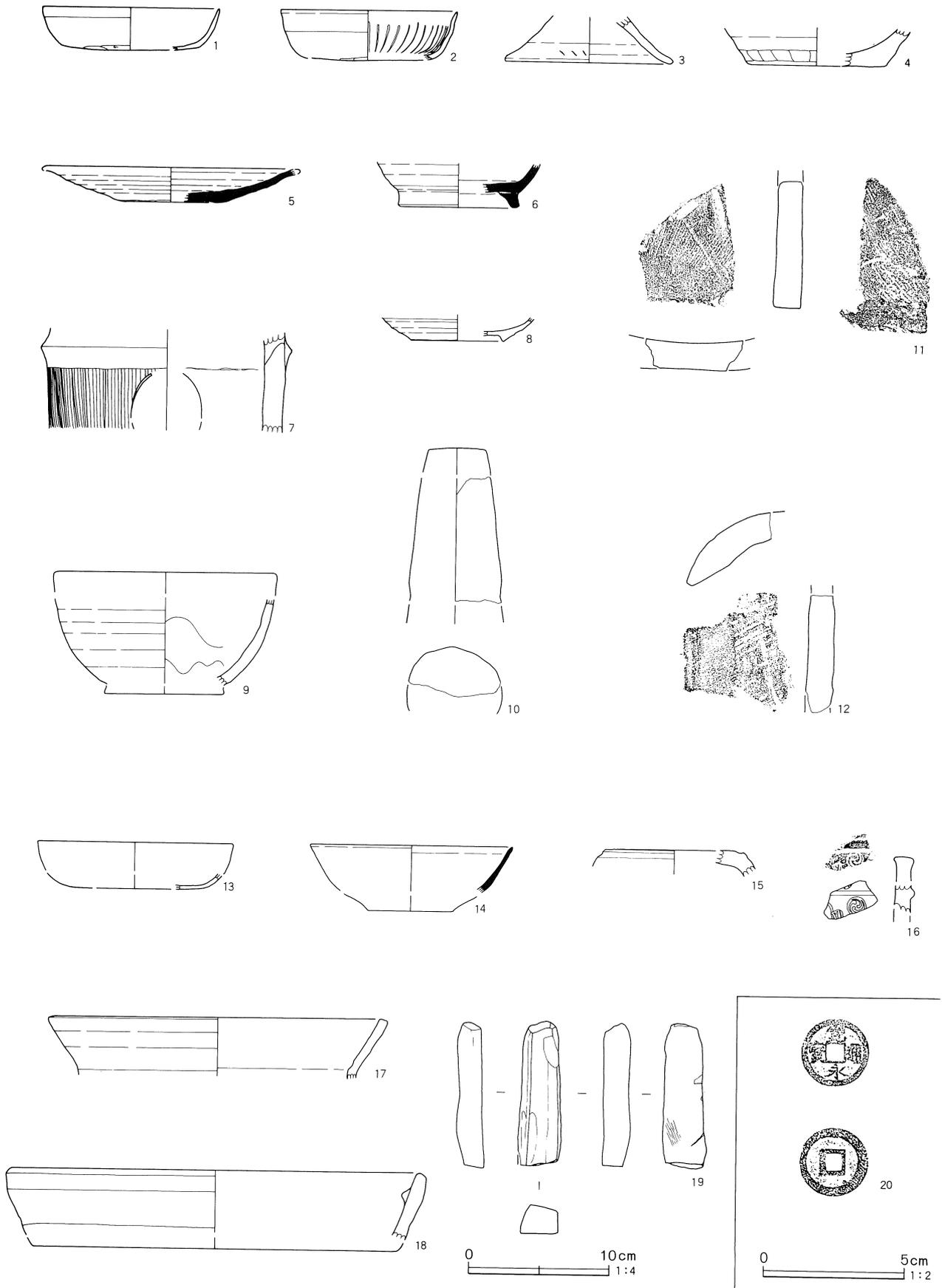
第51図 第6・7・8号溝跡・遺物分布図



第46表 第6・7号溝跡出土遺物観察表 (第52図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器環	(12.6)	(3.0)	(9.8)	ABDF	普通	橙褐色	20	SD-6 No.28	
2	土師器環	(12.5)	(3.5)		ABDF	普通	褐色	20	SD-6 No.21	暗文
3	土師器台付甕		(3.3)	(11.6)	AB C D F片	普通	褐色	30	SD-6 No.10	末野産
4	土釜	(2.7)	(9.9)		ADF	不良	褐色	10	SD-6 No.13	
5	須恵器皿	(2.5)	(8.0)		A C D F片	普通	褐色	40	SD-6 No.14	末野産
6	須恵器高台付環		(3.2)	(8.1)	A C D F片	普通	灰色	20	SD-6 No.5	末野産
7	埴輪				A C D F	普通	橙褐色	0	SD-6 No.15・16	
8	皿(灰釉)		(1.8)	(6.6)	A	良好	灰色	10	SD-6	
9	天目茶碗		(6.2)			普通	茶褐色	10	SD-6 No.27	
10	支脚	残存長 9.0、幅 6.6cm			ABDF	普通	褐色	40	SD-6 No.6	
11	平瓦				ACF	普通	灰褐色	10	SD-6 No.33	
12	丸瓦				AB C D F片	不良	褐色	10	SD-7 No.5	
13	土師器環		(1.0)		A B C D E F	普通	褐色	10	SD-7	
14	須恵器環	(14.3)	(3.3)		A C D F片	普通	灰色	10	SD-7	末野産
15	不明				F	不良	褐色	5	SD-6・7上層	
16	鉢				A F	普通	茶褐色	5	SD-6・7上層	
17	内耳鍋	(24.1)	(4.2)		A F	普通	褐灰色	5	SD-6・7上層	
18	内耳鍋	(29.0)	(4.4)		A	不良	黒褐色	5	SD-7	
19	砥石	残存長 10.2、幅 2.8、厚さ 2.1cm、重量 94.4g							SD-7	
20	古銭	銭径 2.47、穿径 0.57cm、重量 3.56g						100	O-2 No.40	寛永通宝

第52図 第6・7号溝跡出土遺物



(2) 道路状遺構

道路状遺構 (第53図)

調査C区西側のI・J-2グリッドから道路状遺構を検出した。北側および南側は、調査区域外となり検出した長さは南北がわずかに1.50m、東西14.00m前後であった。道路の方向はN-50°-Eである。道路状遺構と判断した理由は、第一に、平面観察および断面観察において硬化面を検出したことによる。第二は、硬化面の直下に凹凸が細かく残されていた点である。第三は、硬化面の下部構造に掘り方を伴い、掘り方内には版築構造とみられる埋土が観察された。しかし、古代の道路状遺構にみられる波板状の掘り込みは認められなかった。

道路状遺構は断面観察によって硬化面が4ヶ所検出された。東側から第1号道路状遺構とし順次第2・3・4号道路状遺構とした。

第1号道路状遺構は、最も東寄りに硬化面を検出したもので、断面観察による第19層が該当する。硬化面の幅1.20m、厚さ6~20cmであった。本道路跡の掘り方は第21層のやや粘性をもち、多量の黒褐色土によって埋め戻されていた。掘り方は第9号溝跡とした。掘り方規模は東西幅約2.00m、深さ8~20cm程である。

第2号道路状遺構は、第1号道路状遺構の西側に硬化面を検出した。断面観察による第4層が該当する。硬化面の幅0.88m、厚さ8cmであった。本道路跡の掘り方は第5層の地山粒子を含む黒褐色土によって埋め戻されていた。掘り方は第10号溝跡とした。掘り方規模は東西幅約0.80m、深さ10cm程である。この第5層は第1号道路状遺構の掘り方第21層を切って掘り込まれていた。

第3号道路状遺構は、第2号道路状遺構の西側に硬化面を検出した。断面観察による第6・7層が該当する。硬化面は蒲鉾状に中央部分が高くなっていた。幅2.70m、厚さ2~13cmであった。本道路跡の掘り方は第8~14層によって埋め戻されていた。第9層は地山粒子を3割、第10層は地山粒子を4割ほど含み良くし

まった層であった。第12層は褐色土と黒色土が3:7の割合で混じり合い、かなり良く突き固められた層であり、第13層は黒褐色土と黄橙色土が混じり合い突き固められ、やや粘性をもつ。第14層は粘性の強い層であった。掘り方は第11号溝跡とした。掘り方規模は東西幅約2.80m、深さ63cm程である。この掘り込みは東側の第2号および西側の第4号道路状遺構を切り込んで造られていた。

第4号道路状遺構は、第3号道路状遺構の西側に硬化面を検出した。断面観察による第17層が該当する。硬化面の幅1.20m、厚さ5cmであった。本道路跡の掘り方は存在せず、地山面直上に硬化面を検出した。

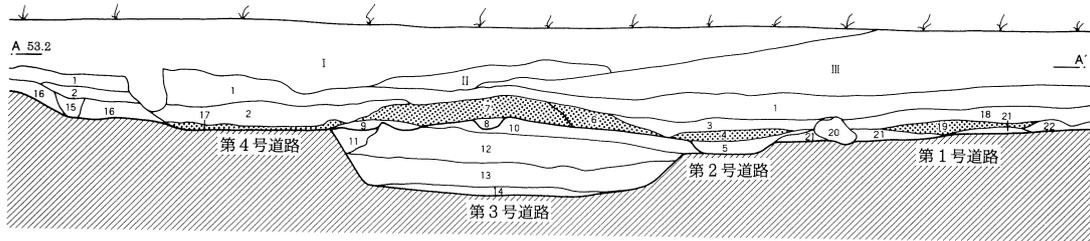
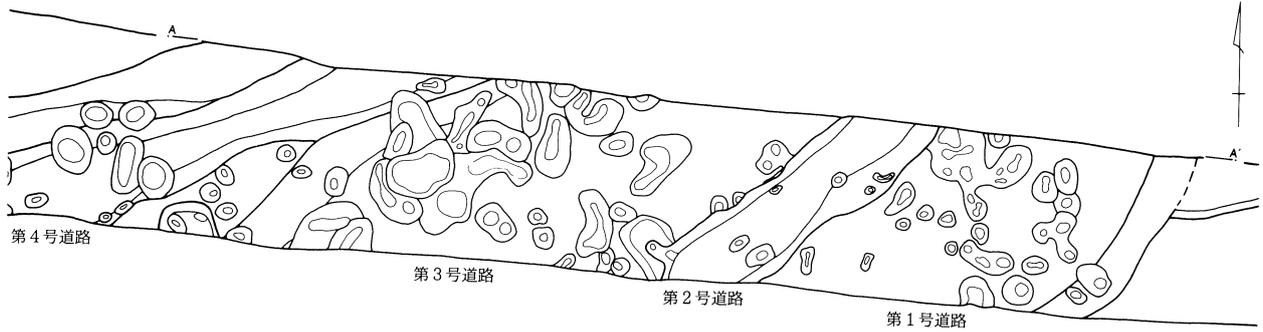
第1~4号道路状遺構のうち第3号は道幅が広く硬化面も他に比較し最も硬い。また、第3号の硬化面には多量の古代の土器片が混入していた。掘り方も深く、版築状の構造をもっていた。第1・2・3号はほぼ併行しており、いずれも掘り方をもつ点で共通していた。第1号は第2号より、第2号は第3号より古いとみられる。第1号は第2号より硬化の度合いは弱く、遺物もほとんど出土していない。第4号は、掘り方をもたず、第3号に壊されていた。第1・2号との新旧関係は不明である。第1~3号は北東から南西方向に比較的まっすぐのびており、第4号は南西方向に湾曲し他の道路遺構とはわずかながら方向が異なる。

いずれの道路状遺構も、硬化面の直下には多くの凹みが見られた。また、第3号は深い箱状の掘り方をもつ点で他の道路状遺構とは異なる構造であった。

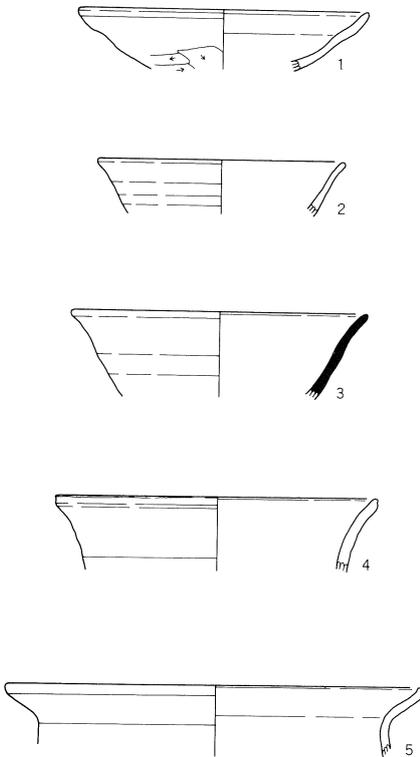
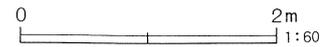
調査区の北側には大寄八幡神社が存在し、本道路跡は神社境内に伸びていることになる。現存する神社がいつの時期にこの位置に建立されたのか、また、道普請の時期には神社があったのかどうか、神社の起源や道路の性格は不明である。

検出した遺物は、第3号道路状遺構の硬化面から図示した第53図1~5である。いずれも、古代の土師器環・甕、須恵器環であった。中世の遺物は検出できなかった。

第53図 道路状遺構・出土遺物



硬化面



C区道路状遺構

- I 表 土 地山ブロックを主体とする
- II 表 土 地山ブロックを主体とする
- III 表 土 地山ブロックを主体とする
- 1 黒褐色土 (7.5YR3/1) しまり良し 地山粒子を少量、軽石を含む
- 2 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり良し 焼土粒子を若干、軽石を含む
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) しまり良し やや粘性有り 地山粒子微量、軽石を含む
- 4 黒褐色土 (10YR3/1) 固くしまり硬化している 径1~2cm前後の小石含む
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物を若干、地山粒子を含む
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) 比較的軟らかい層 地山粒子を多量含む
- 7 黒褐色土 (10YR2/2) 良く固められている 地山ブロック、焼土粒子少量含む
- 8 黒褐色土 (10YR3/1) フカフカの土 地山粒子若干含む
- 9 褐灰色土 (10YR4/3) しまり良し 地山粒子多量含む
- 10 黄褐色土 (10YR4/3) しまり良し 黒褐色土を多量含む
- 11 灰黄褐色土 (10YR4/2) 比較的軟らかい層 10cm大の地山ブロック含む
- 12 褐色土 (10YR4/6) かなり固められた層 黒褐色土を多量、褐色土を含む
- 13 黄橙色土 (10YR6/4) やや粘性有り 黒褐色土、黄橙色土の混合で、つき固められている (12層よりは軟らかい)
- 14 黄橙色土 (10YR7/3) かなり粘性有り 掘りすぎか?
- 15 灰黄褐色土 (10YR4/2) 攪乱
- 16 黄褐色土 (10YR5/6) しまり良し 黒褐色土を多量含む
- 17 黒褐色土 (10YR3/1) しまり良し 硬化している層で比較的薄い堆積
- 18 暗褐色土 (7.5YR3/4) 地山粒子を若干、炭化物を含む
- 19 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり良し ローム粒子多量、炭化物若干含む 硬化の度合いは4層よりも低い
- 20 褐灰色土 (10YR4/1) 攪乱
- 21 褐色土 (10YR4/4) やや粘性有り 黒褐色土を多量含む
- 22 褐色土 (10YR4/6) 黒褐色土を微量含む

第47表 道路状遺構出土遺物観察表（第53図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器坏	(15.2)	(3.2)		A B D F	普通	赤褐色	10	3号道路内	
2	土師器坏	(12.9)	(2.9)		A B D F	普通	茶褐色	10	3号道路内	
3	須恵器坏	(15.5)	(4.5)		A B C F	普通	乳灰色	10	3号道路内	
4	土師器甕	(16.9)	(3.9)		A B C	普通	暗褐色	5	3号道路内	
5	土師器甕	(21.8)	(3.7)		B D F片	普通	明褐色	10	3号道路内	

第48表 道路状遺構出土遺物計量表

遺構名	区	計量値	土師坏類	土師甕類	土師壺類	須恵坏類	須恵甕類	須恵壺類	その他	中・近世
3号道路	C	破片数(片)	37	118		11	6		1	
3号道路	C	重量(g)	63.8	463.0		42.3	82.0		1.7	

(3) 土壇

第1号土壇（第54図）

調査F区東端のI-3グリッドに位置する。北側と東側は調査区域外になる。形態は短冊形である。規模は長径1.38+ \pm m、短径0.52m、深さ0.21mで、主軸方位はS-88°-Eである。底面は平坦で、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

第2号土壇（第54図）

調査E区東端のF-2・3グリッドに位置する。北側、南側と東側は調査区域外になる。南側に位置する第3号土壇に切られている。形態は方形である。規模は長径1.20m、短径0.52+ \pm m、深さ0.37mで、主軸方位はN-1°-Wである。底面は平坦で、壁の立ち上がりはやや緩やかである。

第3号土壇（第54図）

調査E区東端のF-2・3グリッドに位置する。北側、南側と東側は調査区域外になる。形態は方形である。規模は長径1.35m、短径0.87+ \pm m、深さ0.42mで、主軸方位はN-1°-Wである。底面は平坦である。形態、規模主軸方位とも第2号土壇と類似する。

第4号土壇（第54図）

調査E区東側のF-2・3グリッドに位置する。南側は調査区域外になる。形態は短冊形である。規模は長径0.90+ \pm m、短径0.76m、深さ0.15mで、主軸方位はN-22°-Wである。底面はやや凹凸をもつ。

第6号土壇（第54図）

調査E区西側のA・B-3グリッドに位置する。南側は調査区域外となり、本土壇の中央には攪乱が南北

に走る。形態は楕円形である。規模は長径2.70m、短径1.14+ \pm m、深さ0.51mで、主軸方位はN-82°-Wである。底面は西側が大きく掘り込まれ深く東側に向け徐々に浅くなる。

第7号土壇（第54図）

調査E区西側のA-2・3グリッドに位置する。北側は調査区域外になる。形態は隅丸方形と考えられる。規模は長径1.50+ \pm m、短径1.05+ \pm m、深さ0.34mで、主軸方位はN-5°-Eである。底面は平坦で、壁は直立する。

第8号土壇（第54図）

調査E区西端のA-3グリッドに位置する。南側は調査区域外になる。重複する第10号土壇を切り込んで造られている。形態は不整形である。規模は長径0.85+ \pm m、短径0.37+ \pm m、深さ0.21mで、主軸方位はN-73°-Wである。底面は船底型である。

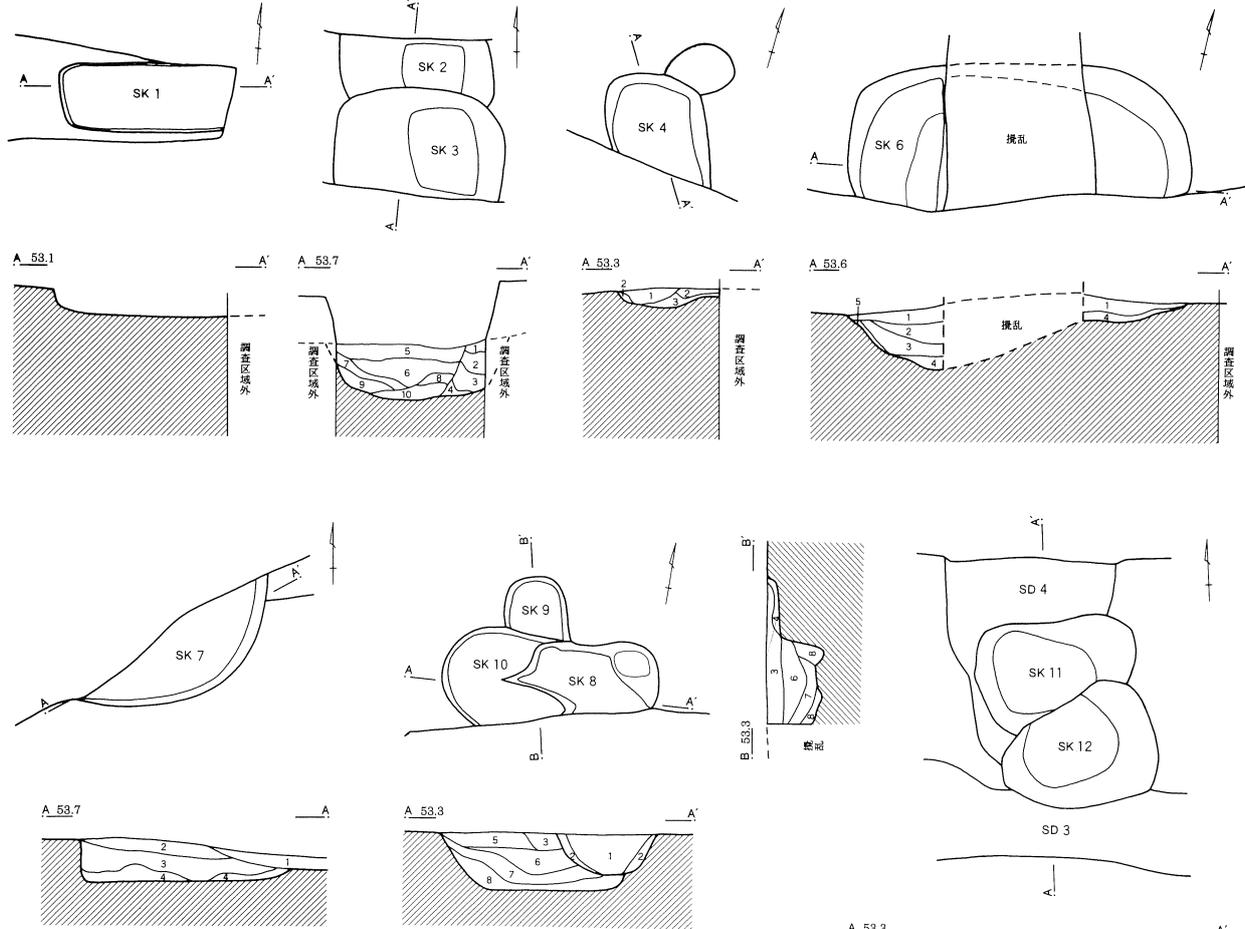
第9号土壇（第54図）

調査E区西端のA-3グリッドに位置する。南側は第8・10号土壇と重複し、第10号を切り込み、第8号に切られている。形態は長方形である。規模は長径1.12+ \pm m、短径0.51m、深さ0.10mで、主軸方位はN-10°-Eである。底面は第10号土壇の第1層を切り込み第2層の面を平坦にして利用されている。

第10号土壇（第54図）

調査E区西端のA-3グリッドに位置する。南側は調査区域外になる。重複する遺構は第8・9号土壇があり、いずれよりも古い。形態は隅丸長方形である。規模は長径1.74m、短径0.78+ \pm m、深さ0.45mで、

第54図 第1～4・6～12号土壌



第2号土壌

- 1 暗褐色土 (10YR3/4) しまりよし ローム粒子を少量含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土粒子、ローム粒子を少量含む
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒子をブロック状に含む
- 4 灰黄褐色土 (10YR4/2) 焼土粒子、ローム粒子を多量、鉄分を若干含む

第3号土壌

- 5 褐色土 (7.5YR4/1) しまりよし 焼土粒子、炭化物を若干含む
- 6 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまりよし 一層に比し焼土粒子、炭化物多量含む
- 7 黒褐色土 (7.5YR3/1) 焼土粒子を多量、ローム粒子を少量含む
- 8 黒色土 (7.5YR2/1) ローム粒子を少量含む
- 9 黒褐色土 (7.5YR3/1) ローム粒子を多量、炭化物を若干含む
- 10 黒褐色土 (7.5YR2/2) ローム粒子を少量含む

第4号土壌

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 径4～5cmの地山ブロックを含む
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物を多量、ローム粒子を含む
- 3 褐色土 (10YR4/6) やや粘性有り しまりよし 炭化物を若干含む

第6号土壌

- 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまりよし 地山粒子を若干含む
- 2 極暗褐色土 (7.5YR2/3) しまりよし 地山粒子を多量、鉄分若干含む
- 3 暗褐色土 (7.5YR3/3) しまりよし 地山ブロックを含む
- 4 明褐色土 (7.5YR5/6) ポロポロの土 鉄分を多量含む
- 5 褐色土 (7.5YR4/6) 地山粒子、焼土粒子、炭化物を若干含む

第7号土壌

- 1 SD1の覆土
- 2 褐色土 (7.5YR4/3) しまりよし 砂質土
- 3 黒褐色土 (7.5YR2/2) しまりよし 焼土粒子、炭化物を多量含む
- 4 褐色土 (7.5YR4/6) しまりよし 地山粒子を多量、鉄分、土器片を含む

第8号土壌

- 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 鉄分を多量、地山粒子を若干含む
- 2 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性有り 地山粒子を多量含む

第9号土壌

- 3 暗褐色土 (7.5YR3/4) 地山粒子、焼土粒子、炭化物を多量含む
- 4 極暗褐色土 (7.5YR2/3) しまりよし 粘性有り 焼土粒子を若干含む

第10号土壌

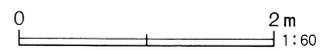
- 5 黒褐色土 (7.5YR3/1) 地山粒子、炭化物を若干含む
- 6 暗褐色土 (7.5YR3/4) ローム粒子、焼土粒子を若干含む
- 7 褐色土 (7.5YR4/3) やや粘性有り 炭化物を若干含む
- 8 褐色土 (7.5YR5/4) やや粘性有り ローム粒子を多量含む

第11号土壌

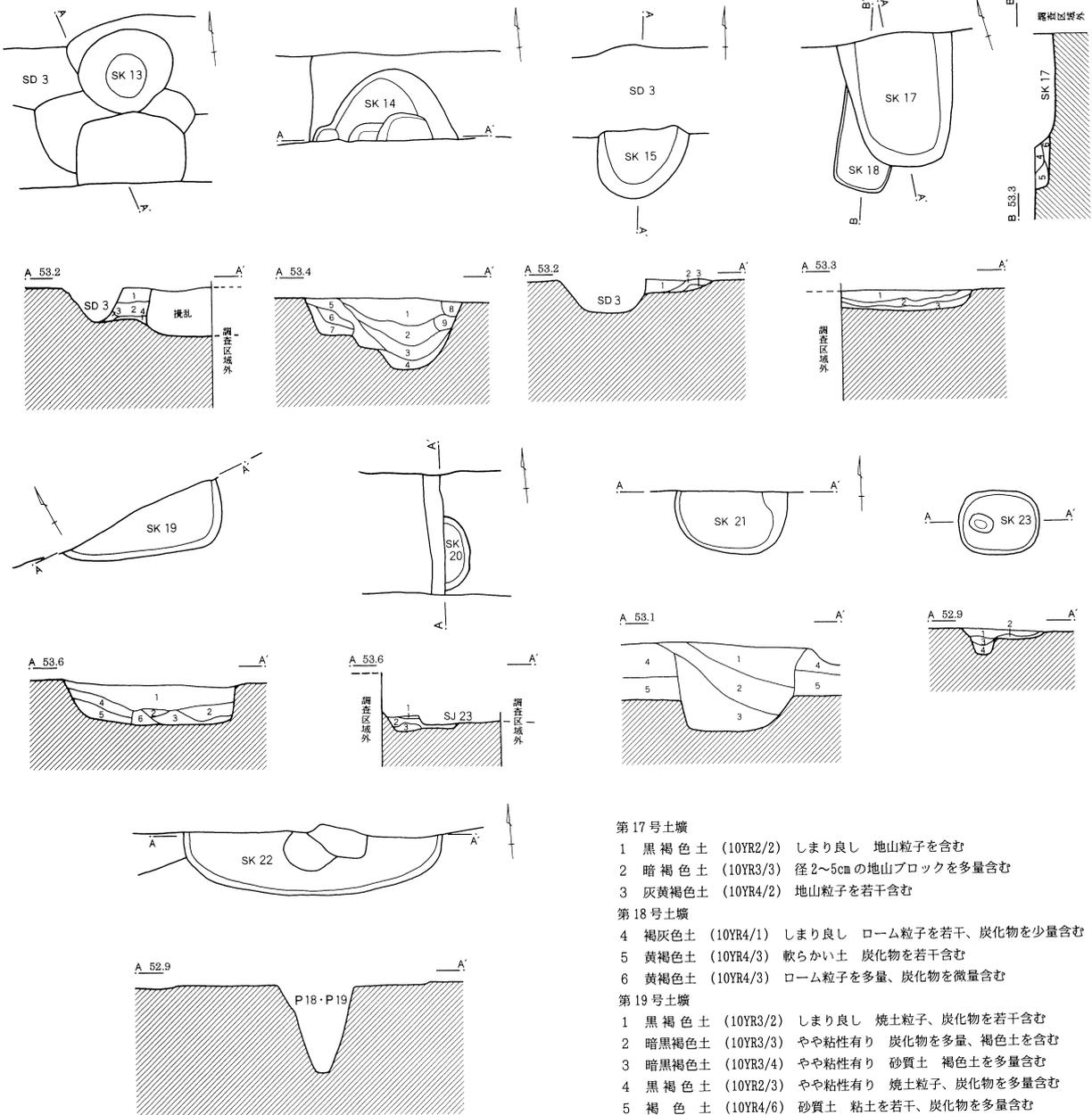
- 1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 焼土粒子、炭化物を若干含む
- 2 黒褐色土 (7.5YR3/2) 炭化物、ローム粒子を多量含む
- 3 暗褐色土 (7.5YR3/4) ローム微粒子を含む
- 4 灰褐色土 (7.5YR4/2) 炭化物を多量、ローム粒子を若干含む

第12号土壌

- 5 黒褐色土 (10YR2/2) しまりよし 炭化物を若干含む
- 6 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒子を多量含む
- 7 褐色土 (10YR4/4) ロームブロックを多量含む
- 8 黒褐色土 (10YR2/3) やや粘性有り ロームブロック含む
- 9 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土粒子若干、鉄分、径4～5cmのロームブロック多量含む
- 10 褐色土 (10YR4/4) やや粘性有り 黒褐色土を多量含む
- 11 黒褐色土 (10YR3/1) ザクザクの土 ローム粒子を多量、炭化物を含む



第55図 第13~15・17~23号土壌



第13号土壌

- 1 黒色土 (7.5YR2/1) しまり良し 炭化物を少量含む
- 2 黒褐色土 (7.5YR3/1) ローム粒子を少量含む
- 3 黒褐色土 (7.5YR3/2) ローム粒子を多量含む
- 4 暗褐色土 (7.5YR5/6) 黒褐色土を多量含む

第14号土壌

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり良し ローム粒子をほとんど含まない
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) しまり良し ローム粒子を少量含む
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) やや粘性有り ローム粒子を若干含む
- 4 褐色土 (10YR4/4) やや粘性有り 黒褐色土を多量含む
- 5 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子、炭化物を若干含む
- 6 灰黄褐色土 (10YR4/2) 黒褐色土を多量含む
- 7 黄褐色土 (10YR6/4) やや粘性あり しまり良し
- 8 黄褐色土 (10YR6/4) 鉄分を多量、地山ブロックを含む
- 9 黄褐色土 (10YR6/4) 鉄分を多量、地山ブロックを含む

第15号土壌

- 1 黒褐色土 (10YR3/1) しまり良し ローム粒子を少量含む
- 2 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子を多量、焼土粒子、炭化物を若干含む
- 3 暗褐色土 (10YR3/4)

第17号土壌

- 1 黒褐色土 (10YR2/2) しまり良し 地山粒子を含む
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 径2~5cmの地山ブロックを多量含む
- 3 灰黄褐色土 (10YR4/2) 地山粒子を若干含む

第18号土壌

- 1 褐灰色土 (10YR4/1) しまり良し ローム粒子を若干、炭化物を少量含む
- 2 黄褐色土 (10YR4/3) 軟らかい土 炭化物を若干含む
- 3 黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒子を多量、炭化物を微量含む

第19号土壌

- 1 黒褐色土 (10YR3/2) しまり良し 焼土粒子、炭化物を若干含む
- 2 暗黒褐色土 (10YR3/3) やや粘性有り 炭化物を多量、褐色土を含む
- 3 暗黒褐色土 (10YR3/4) やや粘性有り 砂質土 褐色土を多量含む
- 4 黒褐色土 (10YR2/3) やや粘性有り 焼土粒子、炭化物を多量含む
- 5 褐色土 (10YR4/6) 砂質土 粘土を若干、炭化物を多量含む
- 6 明黄褐色土 (10YR6/6) ガリガリの地山ブロック含む

第20号土壌

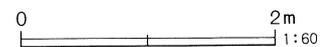
- 1 褐色土 (10YR3/1) 地山粒子、焼土粒子を多量含む
- 2 褐色土 (10YR2/3) 地山粒子を多量、焼土粒子、炭化物を若干含む
- 3 黄褐色土 (10YR6/6) 炭化物を若干、地山ブロックを含む

第21号土壌

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子多量、焼土粒子、パミス状白色粒子を含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子多量、ロームブロック、焼土粒子、パミス状白色粒子を含む
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) ロームブロック多量、ローム粒子、焼土粒子、パミス状白色粒子、緑泥片岩、安山岩片を含む
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土粒子、パミス状白色粒子を多量含む
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子を少量、焼土粒子、炭化物を含む

第23号土壌

- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 地山粒子を含む
- 2 黄褐色土 (10YR4/3) 炭化物を若干含む
- 3 褐灰色土 (10YR4/1) 地山粒子多量、炭化物を含む
- 4 褐色土 (10YR4/4) しまり良し 炭化物を微量含む



主軸方位はN-88°-Wである。

第11号土壌 (第54図)

調査A区東側のE-1・2グリッドに位置する。北側は第4号溝跡と重複し溝跡を掘り込み造られている。南側は第12号土壌と重複し切られている。形態は楕円形である。規模は長径1.38m、短径1.27m、深さ0.24mで、主軸方位はN-86°-Eである。

第12号土壌 (第54図)

調査A区東端のE-1・2グリッドに位置する。南側は第3号溝跡によって切られ、北側は第11号土壌を切って造られている。形態は楕円形である。規模は長径1.65+ ϵ m、短径1.23m、深さ0.42mで、主軸方位はN-85°-Eである。底面は中央部分がやや深い。

第13号土壌 (第55図)

調査A区東側のE-2グリッドに位置する。南側は攪乱を受け、北側は第3号溝跡によって切られている。形態は楕円形である。規模は長径0.88m、短径0.78m、深さ0.38mで、主軸方位はN-2°-Wである。

第14号土壌 (第55図)

調査A区中央のD-2グリッドに位置する。南側は調査区域外に伸びる。北側は第3号溝跡を切り込んで造られていた。形態は楕円形である。規模は長径1.30m、短径0.63+ ϵ m、深さ0.63mで、主軸方位はN-5°-Wである。底面は東側が最も深く階段状に西側が浅くなる。

第15号土壌 (第55図)

調査A区中央のD-2グリッドに位置する。北側は第3号溝跡によって切られている。形態は楕円形である。規模は長径106+ ϵ m、短径0.80m、深さ0.12mで、主軸方位はN-2°-Wである。底面は平坦である。

第17号土壌 (第55図)

調査B区中央のH-2グリッドに位置する。北側は調査区域外となる。第18号土壌を切って造られている。

形態は長方形である。規模は長径1.19+ ϵ m、短径1.03m、深さ0.20mで、主軸方位はN-5°-Wであ

る。底面は平坦であり第18号土壌の底面よりもわずかに深く掘り込まれている。

第18号土壌 (第55図)

調査B区中央のH-2グリッドに位置する。北側は調査区域外となる。第17号土壌に切られている。

形態は長方形である。規模は長径0.90+ ϵ m、短径0.51m、深さ0.13mで、主軸方位はN-20°-Wである。底面は平坦である。

第19号土壌 (第55図)

調査A区西側のD-1グリッドに位置する。

形態は長方形とみられる。規模は長径1.46+ ϵ m、短径0.60m、深さ0.36mで、主軸方位はS-64°-Wである。掘り込みはやや深く、底面は中央部分がやや凹むがほぼ平坦である。

第20号土壌 (第55図)

調査E区東側のE-2グリッドに位置する。第15・23号住居跡と重複する。形態は楕円形である。規模は長径0.65m、短径0.23+ ϵ m、深さ0.13mで、主軸方位はN-1°-Wである。底面は平坦である。

第21号土壌 (第55図)

調査D区西側のN-2グリッドに位置する。北側は調査区域外となる。形態は楕円形である。規模は長径0.98m、短径0.55+ ϵ m、深さ0.78mで、主軸方位はS-82°-Wである。

第22号土壌 (第55図)

調査B区中央のJ-2グリッドに位置する。北側は調査区域外となる。南側に第23号土壌が存在する。形態は長楕円形である。規模は長径2.30m、短径0.57+ ϵ m、深さ0.02mで、主軸方位はS-86°-Wである。底面は平坦である。

第23号土壌 (第55図)

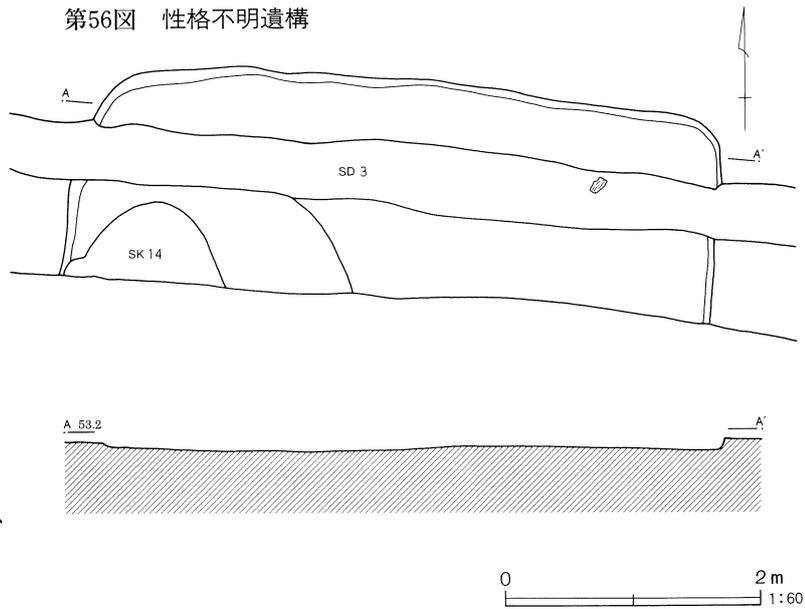
調査B区中央のJ-3グリッドに位置する。北側には第22号土壌が存在する。形態は楕円形である。規模は長径0.71m、短径0.57m、深さ0.08mで、主軸方位はN-84°-Wである。底面は西寄りにピットが掘り込まれている。

3. その他

(1) 性格不明遺構 (第56図)

調査A区中央のD・E-2グリッドに位置する。東側に第4号溝跡、西側に第5号溝跡が位置し、中間に浅い竪穴状遺構2基を検出した。東側の遺構を第1号性格不明遺構、西側の遺構を第2号性格不明遺構とした。南側は調査区域外となり遺構が伸びる。重複遺構は東西方向に走る第3号溝跡によって遺構中央部分を切られていた。また、第13・14号土壌によっても切られていた。いずれも出土遺物は検出されなかった。

第1号性格不明遺構は第3号溝跡の北側に北壁のみ検出され、溝南側は不明である。規模は東西3.80m、



深さ0.03mであった。

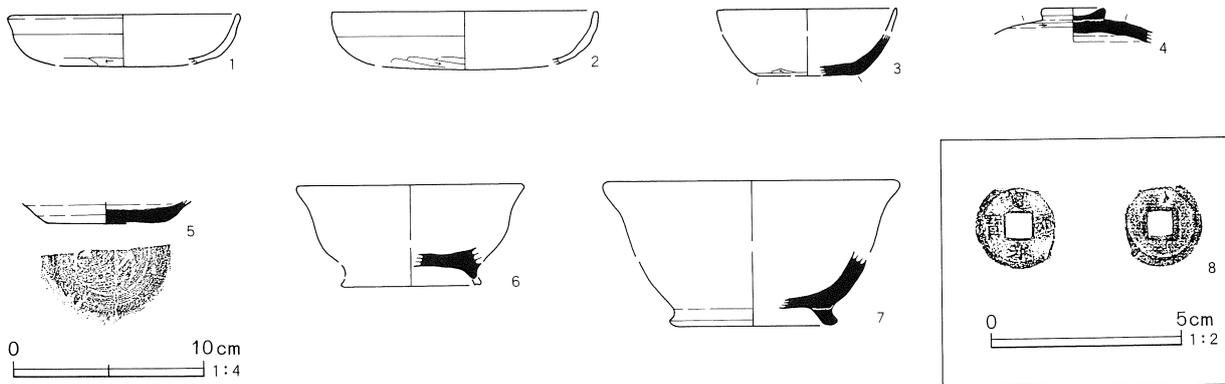
第2号性格不明遺構の規模は東西5.10m、南北1.70m、深さ0.10mであった東西軸はN-7°-Wである。

(2) その他の遺物

調査区内からは、表面採集された資料および後世の攪乱遺構の覆土に混在した遺物が検出された。第57図

は奈良・平安時代の遺物と江戸時代の寛永通宝を図示した。

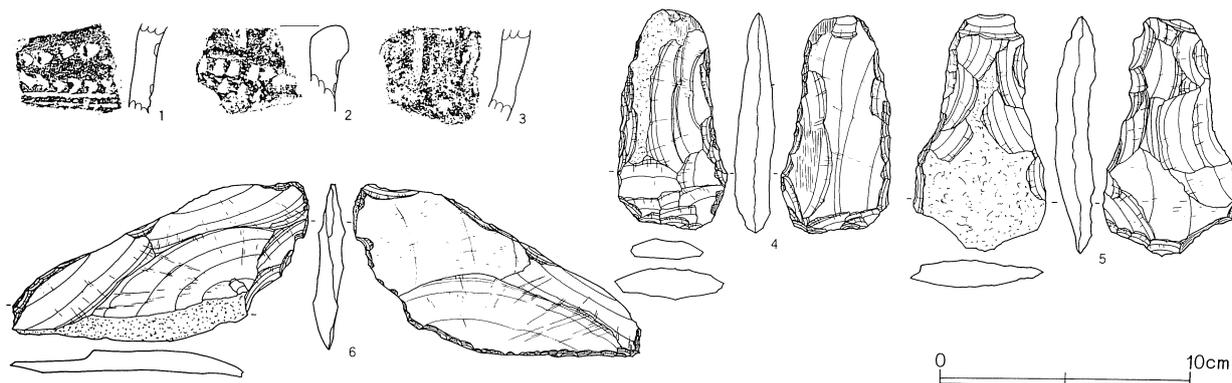
第57図 表面採集遺物



第49表 表採遺物観察表 (第57図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器 杯	(12.0)	(2.6)		AB C D F	普通	褐色	10	SK-21	
2	土師器 杯	(13.8)	(2.8)		A B D F	普通	褐色	20	SK-21	
3	須恵器 杯		(2.1)	(5.1)	A C D E 片	普通	灰色	10	SK-21	未野産
4	須恵器 蓋		(1.9)		A C D F 片	普通	褐灰色	30	表採	未野産 つまみ径 3.2cm
5	須恵器 杯		(1.1)	(6.2)	A C D F 片	普通	灰色	40	SK-1	未野産
6	須恵器 高台付杯		(1.6)		A D F 片	普通	灰褐色	10	SK-1	未野産
7	須恵器 高台付杯		(3.9)	(8.2)	A C D E F 片	普通	灰褐色	10	SK-21	未野産
8	古銭	銭径 2.16、穿径 0.63cm、重量 1.78g						80	C区	寛永通宝

第58図 縄文時代の遺物



第58図は縄文時代の遺物である。宮西遺跡の調査区内からは縄文時代の遺構は検出されなかった。出土状況は後世の遺構の覆土に混入していた遺物および表面採集遺物である。

1～3は深鉢形土器である。

1は胴部の破片である。竹管状の施文具により、刺突文を連続的に施し、その下位に横線を施す。胎土には繊維を含む。前期後半の黒浜式である。第6号住居跡覆土に混入していた。

2は口縁部の破片である。口縁部は肥厚している。竹管状の工具による角押文を施す。胎土中には雲母片を多く含む。中期前半の阿玉台式である。第21号土壇の覆土に混入していた。

3は胴部の破片である。縦位の沈線と縄文による懸垂文を施す。縄文は単節RLと思われるが、摩滅が著しく不明瞭である。中期後半の加曾利E式である。A区表面採集。

4～6は石器である。いずれも完成品である。

4、5は打製石斧である。

4は短冊形に近い撥形である。刃部はやや直線的で、基部は丸みを帯びている。正面に自然面を残している。背面を中心にして、磨耗痕が認められる。長さ8.6cm、幅4.3cm、厚さ1.5cm、重量82.2gである。石材は凝灰岩である。表面採集。

5は撥形である。刃部はV字形、基部は丸みを帯びている。正面に大きく自然面を残している。長さ9.3cm、幅5.2cm、厚さ1.6cm、重量73.0gである。石材はホルンフェルスである。N-2グリッド出土。

6は剥片である。自然面を一部に残している。刃部は細かい調整がなされている。刃部は直線的である。つまみ状に調整が加えられている部位もあり、大型粗製の石匙かもしれない。長さ6.5cm、幅11.4cm、厚さ1.2cm、重量76.7gである。石材は粘板岩である。第5号溝跡の覆土に混入していた。

V 結語

1. 古代の集落形態について

宮西遺跡の発掘調査の結果、奈良・平安時代の集落跡を検出した。調査面積は、現在の道路拡幅に伴う範囲であることから非常に狭いものであった。しかし、竪穴住居跡26軒を検出した。これらの竪穴住居跡は、単独で存在する遺構は少なく、その多くは重複関係をもって検出された。集落は、遺構の集中する個所と散漫になる個所が存在し、このことは、建物が存在する居住空間と畑地や閑地と考えられる非居住空間の集合によって集落が形成されているものと考えられる。このような集落のあり方に注目し、資料的制約は多いが若干の検討を試みる。

まず、宮西遺跡の集落の時期であるが、調査D区の西側から検出されたグリッド出土遺物や第9～11号住居跡、第24号住居跡などからは8世紀前半の遺物が検出されている。土師器はいわゆる北武蔵型坏である。底部丸底で口縁部は上方に立ちあがる。器高はやや浅く体部外面には未調整部をもつ。甕は「く」の字状口縁である。須恵器は、第47図47の末野産のかえりをともなう蓋、29の盤、30の高台付盤が出土し、透かしをもつ円面硯が出土している。さらに、鉄鏝が検出された。本遺跡において、これらの遺物の性格は不明であるが、遺構からは、官衙的性格は認められず、竪穴住居跡を主体とした集落であったと考えられる。第9～16号住居跡出土遺物には8世紀末から9世紀初頭の遺物も混在している。また、第16号住居跡出土の須恵器甕や高台付坏は、9世紀後半とみられる。集落の終焉は、はっきりとはしないが、第5号住居跡のカマド内から検出された第10図1・2の土師器坏が時間的目安として指摘できる。底部形態は推定であるが、平底で体部が外傾に直線的に開いて立ちあがる。中堀遺跡(末木・田中 1997)の第VI期に同様の土師器坏が見られ概ね9世紀末～10世紀初頭頃と考えられる。

このように、宮西遺跡の集落の存続時期は今検討したように8世紀前半から10世紀初頭にかけてと考え

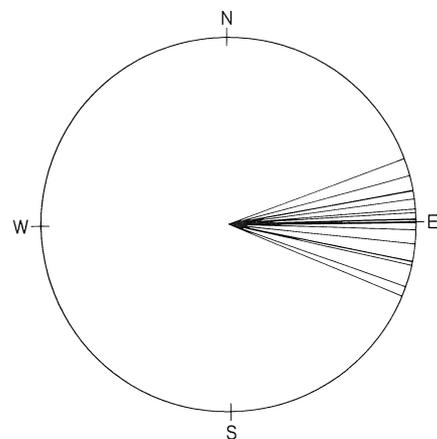
られる。10世紀以降の集落がどのように展開するかは、今のところ不明である。

さて、検出された土器の検討から宮西遺跡の存続時期がつかめ継続的に営まれていた様子が理解できた。次に、遺構について検討を加えてみる。

竪穴住居は重複が多く、しかも、ほぼ同じ方向に建物の軸方位をもち、地形的な立地条件も兼ね備えるとはいえず真北を向く住居跡が多く認められる。カマド位置が不明な住居跡が多く主軸方位ではなく東西軸で住居跡の方位を示してみた(第59図)。そして、わずかながら住居の位置を東西、あるいは南北に移動して建て替えが行われている。

本集落内の遺構のまとまりをA～Dブロックとした(第60図)。建て替えの方法は様々であると考えられるが、Aブロックでは、外側に位置するやや大型の第15号住居跡の中に、小型の第4号住居跡が設けられ、ブロック全体では西から東方向に移動していると考えられる。Bブロックでは攪乱が激しく不明瞭である。Cブロックではやはり、外側に位置するやや大型の第25号住居跡の中に小型の第24号住居跡が設けられ、ブロック全体では東から西方向に移動していると考えられる。Dブロックでは、ほぼ同じ規模の9・10・11・16号住居跡が北壁を同じ位置に設けて建て替えが行われている。ブロック全体では西から東方向に移動していると考えられる。このように、ブロック内における

第59図 竪穴住居跡の軸方位

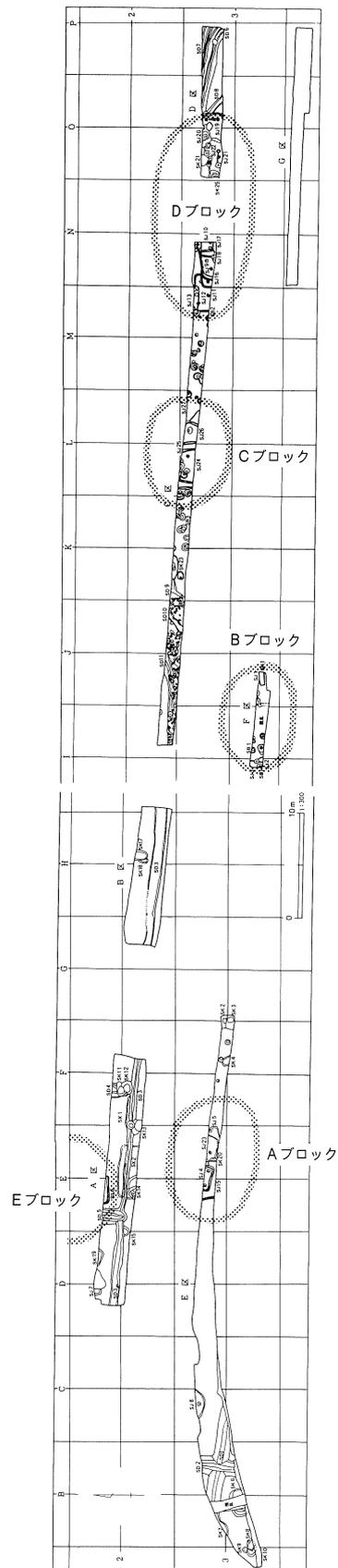


建て替えの規則性が存在すると考えられる。

古代集落に見る遺構の存在形態は、様々な配置をもつ。特に、竪穴住居跡の存在は、各集落や集落の立地条件によって異なると考えられる。同時期に営まれていたと考えられる将監塚・古井戸遺跡では台地上に集落が展開する。調査の結果、将監塚・古井戸遺跡は、186軒の竪穴住居跡を検出した集落であるが、重複する竪穴住居跡の存在はほとんど認められない。埴原・檜下遺跡でも重複する遺構はほとんど認められない。こうした集落間に見る相違はどのような背景を持つのであろうか。宮西遺跡のように遺構の重複が規則的に連続し、継続的に同じ場所を利用する集落は、居住者個々の継続性が存在すると考えられる。一方、将監塚・古井戸遺跡では、遺構の重複が認められず、個々の継続性がない。まったく異なった場所に新たな住居跡を設営する断絶的占地であったといえる。将監塚・古井戸遺跡の分析を試みた鈴木は土地管理システムの存在を想定し、集落域は特定されているが、個別の住居占地は特定の系譜をもたず、継続的な排他的占取を認めない個別住居を超えた上位の機構の存在を想定すべきとしている(鈴木 1997)。このことは、居住は個々の意思で行われたのではなく、特定の場所に一世代のみの居住を想定させる。

宮西遺跡の場合は、このような土地管理システムとは異なり、住居占地に特定の系譜が認められる可能性がある。律令社会では、公地公民制のもとで班田収授法によって個々に口分田が与えられた。しかし、養老7年(723年)には三世一身法、天平15年(743年)には墾田永年私財法が出され公地公民制は崩れ、国家による土地支配に大きな変化がみられた。そのことが、地方における集落の存在形態にも影響を及ぼしたことは十分考えられる。宮西遺跡における住居占地のあり方は、律令社会の変化の中で「計画的集落」の土地管理システムとは違った形態で再編された集落と考えられる。今後、本遺跡の西側で岡部西部工業団地の造成に伴って調査された宮西遺跡第1次・第2次や大寄遺跡の調査成果とも合わせて再考を試みたい。

第60図 宮西遺跡の古代集落単位図



2. 中世の道路状遺構について

宮西遺跡の調査では、調査C区西側のI・J-2グリッドから道路状遺構を検出した。その性格について若干の検討を試みてみたい。

今回の調査によって検出した道路状遺構の長さは南北がわずかに1.50m、幅は4回の改修を行っているため全体で東西14.00m前後であった。道路の方向はN-50°-Eであり、南西から北東方向にのびている。さらに、南側にあたる調査F区からの検出はされていない。検出した道路状遺構は、調査E区とF区の未調査区を抜けるのか、あるいは、調査区中央を東西に走る現道部分に伸びているのか不明である。

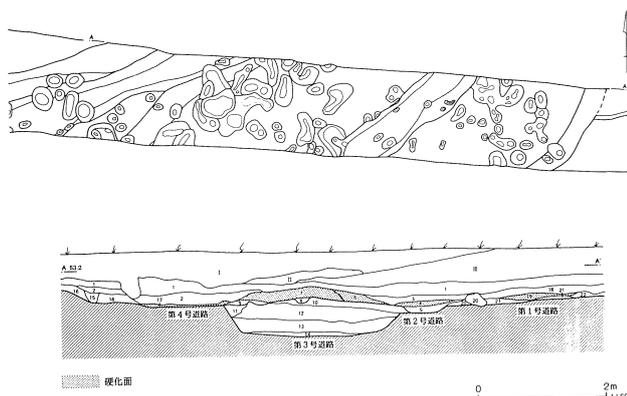
道路状遺構と判断した理由は、第一に、平面観察および断面観察において硬化面を検出したことによる。第二は、硬化面の直下にピット状の凹凸が細かく残されていた点である。第三は、硬化面の下部構造に掘り方を伴い、掘り方内には版築構造とみられる埋土が観察され、掘り込み地業が行われていた。波板状の掘り込みは認められなかった。

道路状遺構は断面観察によって硬化面が4ヶ所検出された。東側から第1号道路状遺構とし順次第2・3・4号道路状遺構とした。

第1号道路状遺構は、最も東寄りに硬化面を検出したもので、硬化面の残存幅1.20m、厚さ6~20cmであった。掘り方規模は東西幅約2.00m、深さ8~20cm程である。第2号道路状遺構は、硬化面の残存幅0.88m、厚さ8cmであった。掘り方規模は東西幅約0.80m、深さ10cm程である。第3号道路状遺構は、硬化面は蒲鉾状に中央部分が高くなっていた。残存幅2.70m、厚さ2~13cmであった。掘り方規模は東西幅約2.80m、深さ63cm程である。第4号道路状遺構は、硬化面の残存幅1.20m、厚さ5cmであった。本道路跡の掘り方は存在せず、地山面直上に硬化面を検出した。

第1~4号道路状遺構は、浅いながらも掘割状の形態をとるものと考えられる。第3号は道幅が広く硬化面も他に比較し最も硬い。また、第3号の硬化面には多量の古代の土器片が混入していた。掘り方も深く、

第61図 宮西遺跡道路状遺構



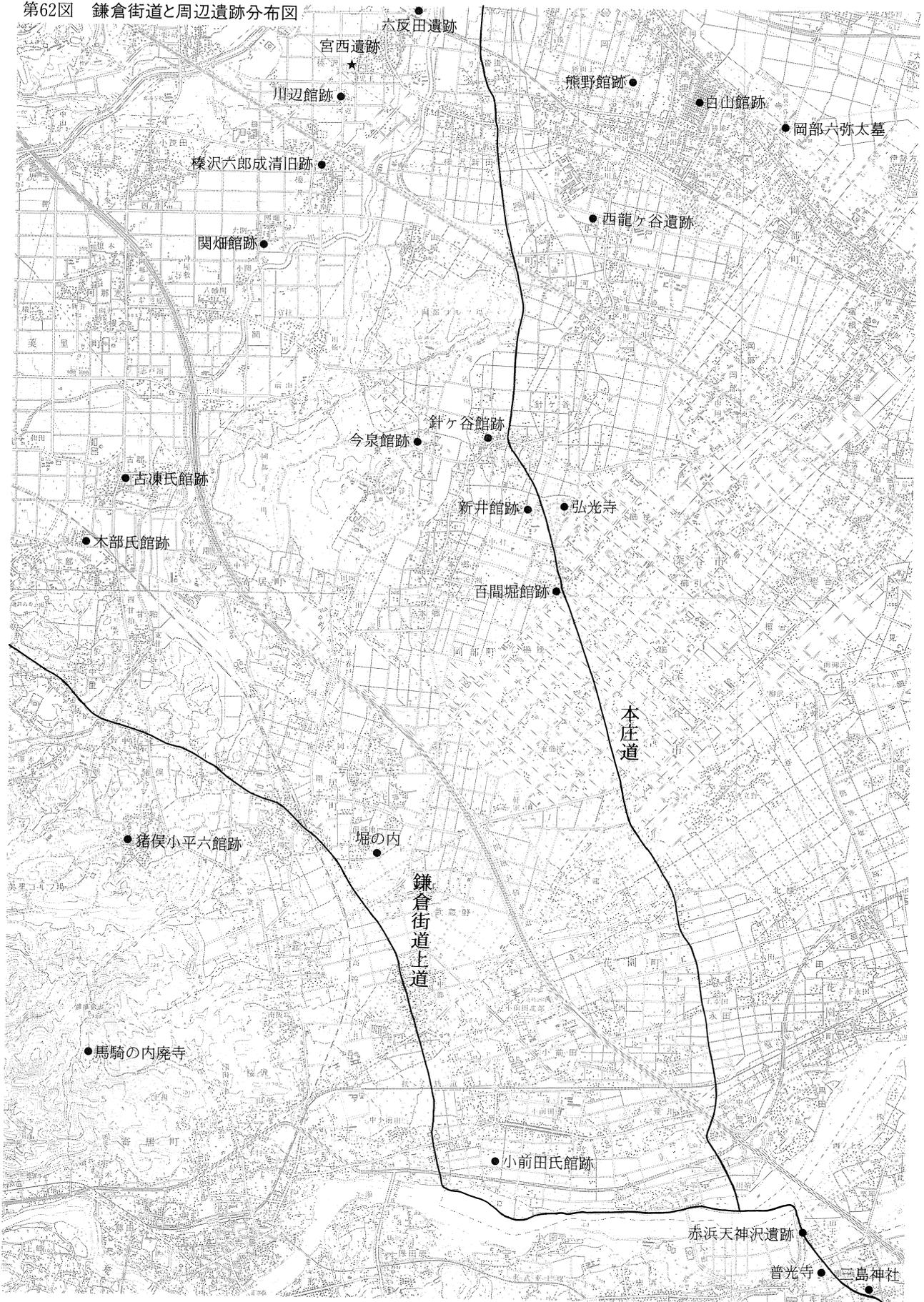
版築状の構造をもっていた。第1・2・3号はほぼ併行しており、いずれも掘り方をもつ点で共通していた。第1号は第2号より、第2号は第3号より古いとみられる。第1号は第2号より硬化の度合いは弱く、遺物もほとんど出土していない。第4号は、掘り方をもたず、第3号に壊されていた。第1~3号は北東から南西方向に比較的まっすぐのびており、第4号は南西方向に湾曲し他の道路遺構とはわずかながら方向が異なる。

いずれの道路状遺構も、硬化面の直下には多くの凹みがみられた、また、第3号は深い箱状の掘り方をもつ点で他の道路状遺構とは異なる構造であった。

道路状遺構からの検出遺物は先に述べたように第3号の硬化面内に土師器・須恵器を伴う、これらの土器群は9世紀第4四半期から10世紀初頭であり、中世の遺物は相伴しなかった。調査区の北側には大寄八幡神社が存在し、本道路跡は、現存する神社境内に伸びていることになる。神社がこの位置にいつ建立されたのか明らかではないが、少なくとも、本道路跡が廃絶した以降と考えられる。このことから、概ね、平安後期から中世段階に造られた道路跡と考えられる。さらに、遺構の構造や周辺の地理的環境をもとに検討を加えてみる。

この時期の道路跡の調査例としては、埼玉県教育委員会が「歴史の道」として中世の道鎌倉街道の現地調査を進め、街道跡と伝えられる掘割状道路遺構の発掘調査が、入間郡毛呂山町市場地区、比企郡嵐山町菅谷

第62図 鎌倉街道と周辺遺跡分布図



館跡西地区、比企郡小川町伊瀬根地区、大里郡寄居町赤浜地区で行われた。毛呂山町市場と小川町伊瀬根では掘割遺構が確認され、底面は平坦で両側に溝をもつ、道路状遺構が確認された。寄居町赤浜では、掘割状遺構と片側のみ溝を検出した。(第63・64図)

その後、寄居町教育委員会によってこの地点を発掘調査が行われた。寄居町赤浜天神沢遺跡(1999 小林)の調査では、掘割状遺構と溝跡を確認した。掘割状遺構は、掘割状に掘削する以外に、波板状の凹凸や地業の痕跡は認められず、道路遺構であった可能性を示すものは部分的に検出された硬化面のみと報告している。また、溝跡は、直線的に約70m検出され道路側溝の可能性が高いと指摘している。さらに、この溝の覆土上面にも硬化面を検出し、側溝としての機能消失後の道路面であるとし、少なくとも二時期の道路遺構が存在したとされた。遺構の時期は13世紀後半から15世紀前半としている。寄居町赤浜の地は鎌倉街道上道が通り、荒川の渡河地点をひかえた交通の要衝である。

埼玉県毛呂山町堂山下遺跡(1991 宮瀧)でも、道路状遺構を検出した。この道路状遺構は鎌倉街道と推定されている。堂山下遺跡の性格は越辺川の渡河地点にあたり14世紀前半から16世紀初頭まで存在した集落と考られている。集落は鎌倉街道に規制されるかたちで方形の屋敷地が存在し、15世紀以降街道に沿って建物が並ぶと指摘し、堂山下遺跡が「苦林宿」の跡との見解が示されている。

東京都町田市野津上の原遺跡では、5本の道路状遺構を検出した。この内、第1号道路状遺構は概ね南北に走り、幅10~12m、深さ2~4.5mと規模が大きく、断面形態は「V」字状である。底面の掘り方には無数のピット状に連続して掘り込みがみられる。

このほか、群馬県では、今井道上道下遺跡、小島田八日市遺跡、吹屋遺跡、小八木志志貝戸遺跡、大八木屋敷遺跡、中宿在家遺跡などで道路状遺構が検出された。神奈川県では、中ノ宮北遺跡、いずみの遺跡A地点、草木遺跡などでも道路状遺構が検出されている。

宮西遺跡検出の道路状遺構は、4回の道普請が行わ

れていた。最終の第3号道路状遺構としたものは掘り込み地業をもち、底面にはピット状の連続する掘り込みを検出した。こうした構造は、町田市野津田上の原遺跡で掘割の底面に掘り込みをもつ構造と類似している。しかし、本遺跡検出の遺構は幅2.8mと非常に狭く、両脇の側溝を検出することができなかった。構造上は中世のものと比較類似点も指摘でき掘割状道路遺構としての性格を備えたものと考えられる。

では、宮西遺跡検出の道路跡はどのような性格の道路跡であったのだろうか、まず、いわゆる鎌倉街道上道についてみると、上道は、第62図に示したように寄居町赤浜地区で荒川を渡河し、二方向に分岐する。上道は現在の花園町小前田、中郷、寄居町用土を経て、美里町、児玉町を通り藤岡方面に向かう。もう一方は、花園町を縦断し、深谷市、岡部町を通り、本庄市方面に向かう(便宜的に本庄道と呼称されている)。

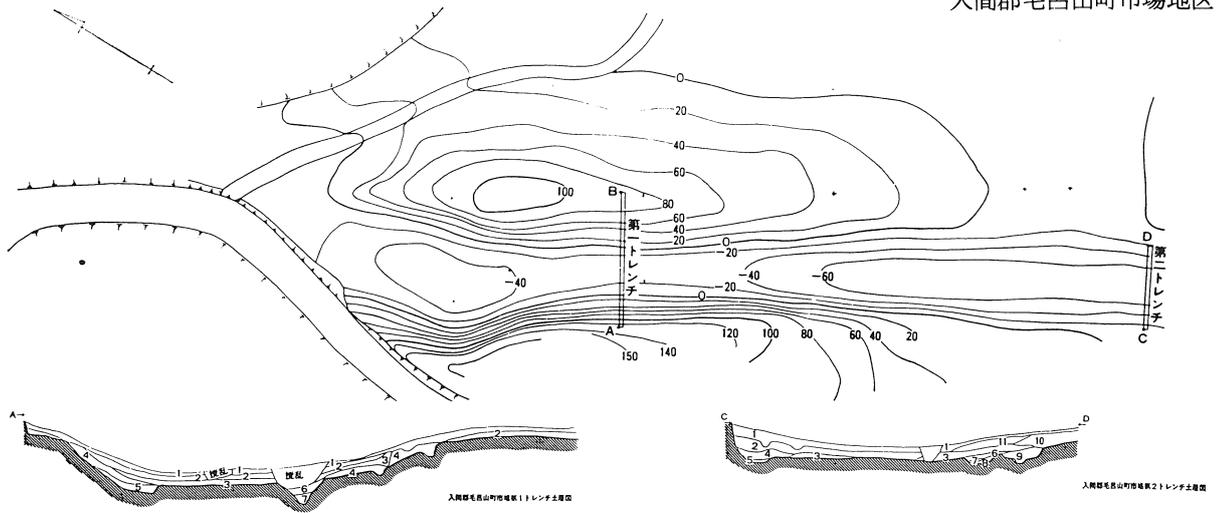
小山川と志戸川に挟まれた後榛沢、榛沢地区は本道からははずれている。このあたりの伝承によれば、寄居町用土方面から山崎山東麓沿いに岡部町今泉に至り、そこから、山崎山を越して後榛沢に抜ける道に鎌倉街道もしくは鎌倉裏街道と呼ばれ、脇街道が存在した可能性がある。後榛沢には榛沢六郎成清墓や安保氏陣屋などの史跡が存在する。街道はさらに、榛沢の集落の南端で榛沢成清の勧請伝説をもつ大寄八幡神社の東側を通り、そこから大きく西にカーブして小山川をわたり、本庄市北堀から西富田を経て上里町七本木辺りに出て藤岡方面に向かったとされる伝承がある。

一方、大正12年に調査された武田良助氏はこの本庄道について、岡部町針ヶ谷から先の伝承路線について西に折れ、今泉に向かい、山崎山から北に残る裏街道に繋がると推定されている。

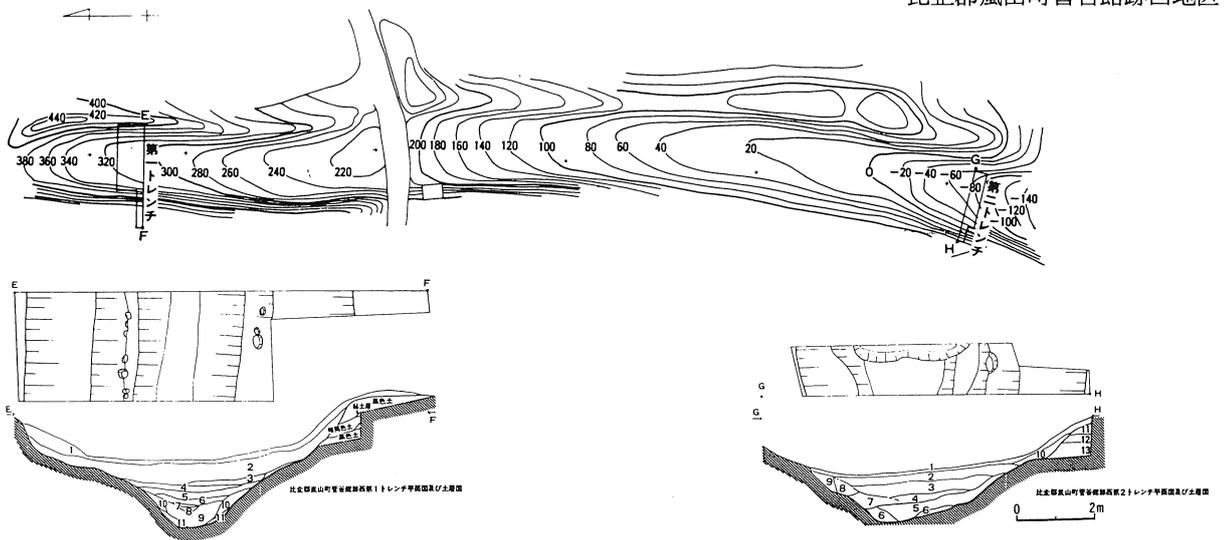
これらの伝承は、鎌倉裏街道と称する道が、岡部町針ヶ谷から西に折れるのか、あるいは寄居町用土から上道と分かれるのか特定はできないが、いずれにせよ、岡部町西部の後榛沢、榛沢地区を通ることにはまちがいないであろう。そして、宮西遺跡の道路状遺構は、道路規模が小型であること、本道にみられる本来の直

第63図 鎌倉街道の調査遺跡 I

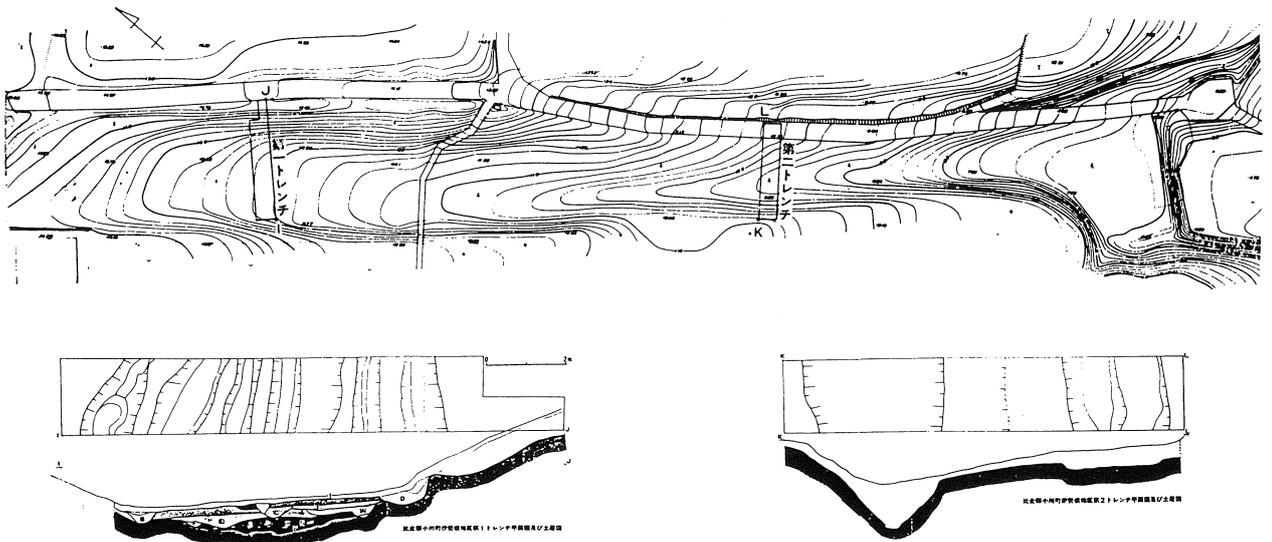
入間郡毛呂山町市場地区



比企郡嵐山町菅谷館跡西地区

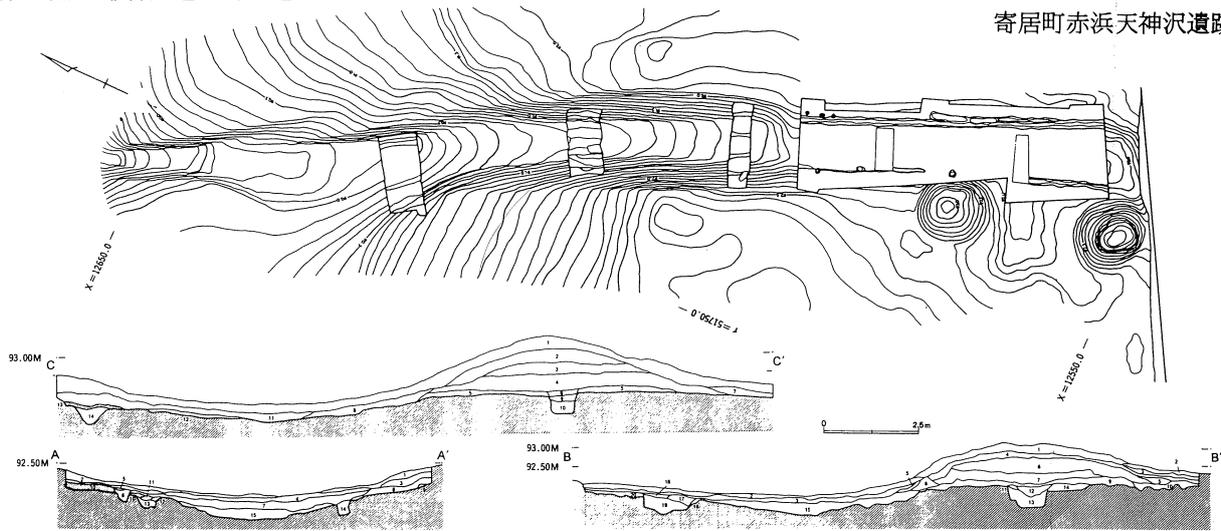


比企郡小川町伊勢根地区

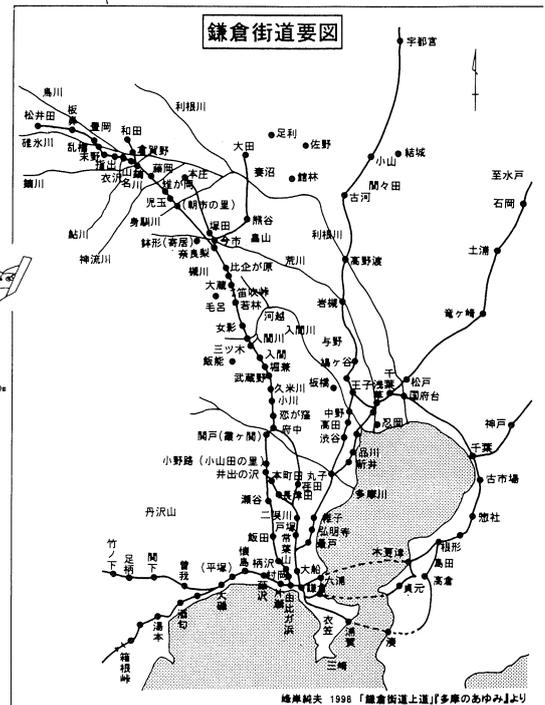
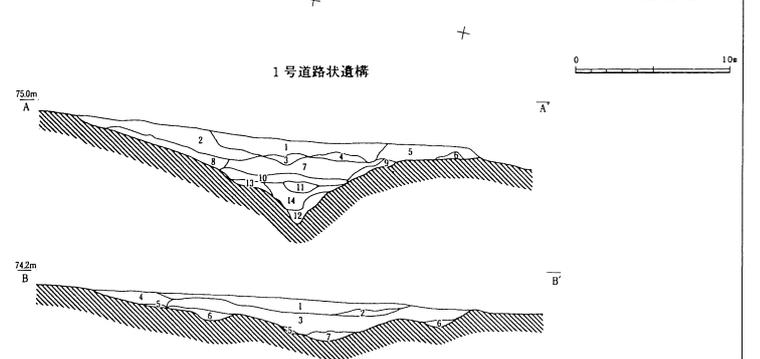
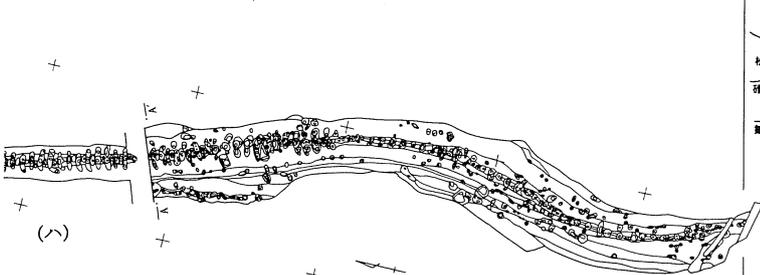
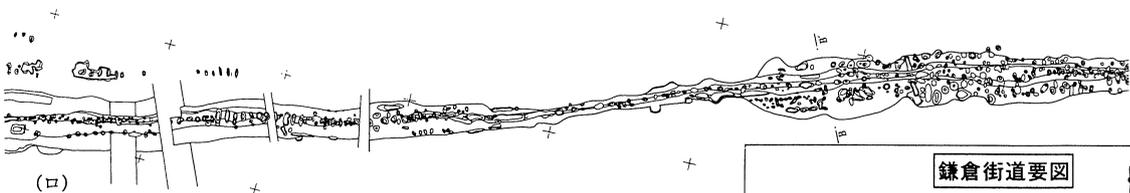
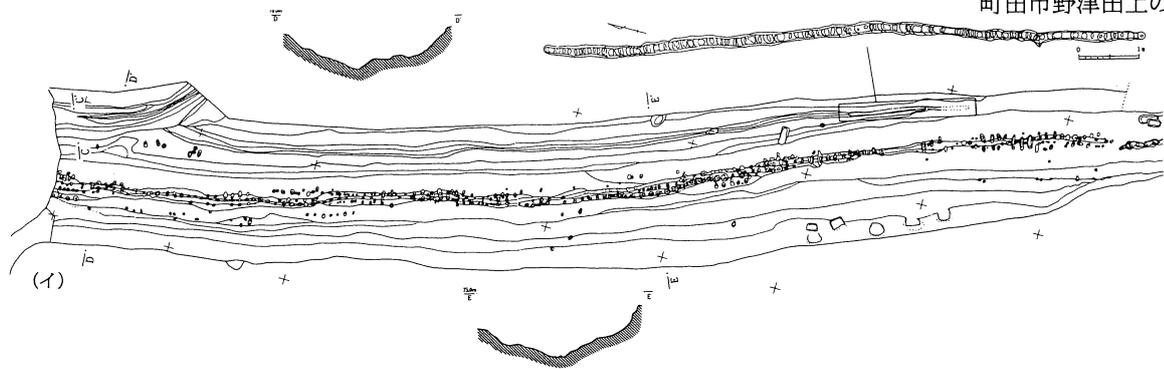


第64図 鎌倉街道の調査遺跡 2

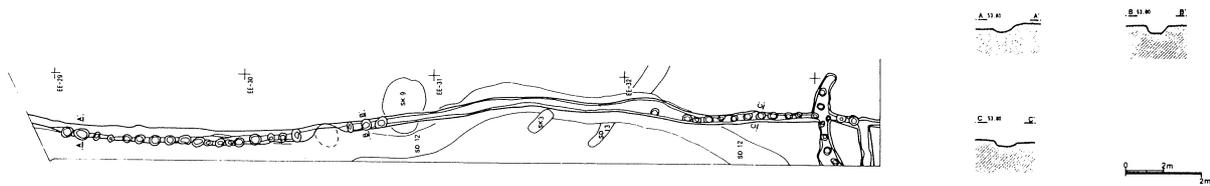
寄居町赤浜天神沢遺跡



町田市野津田上の原遺跡



第65図 沖田Ⅲ遺跡検出の道路状遺構



線的計画線の道路とは異なり、地形や条里型地割りに規制される傾向をもっていたと考えられる。宮西遺跡の西側に位置する沖田Ⅲ遺跡からは、道路状遺構が検出されている(第65図)。検出された長さは22.50mである。覆土には暗灰色の粘質土が硬くしまっており、底面にはピットが連続して検出されている。本調査区の真西にあたり、条里地割の坪線上にあたる。

宮西遺跡から検出された道路状遺構は、小山川と志

戸川に挟まれた後榛沢、榛沢を経て六反田遺跡を通り本庄市五十子城に至る道の存在が示唆されるものの、調査範囲も狭く、調査成果だけでは、系統的な路線を想定することに無理がある。館や集落を結ぶ地域連結の道として機能し、本道に通じる街道の一部である可能性が高いと考えられるが、周辺遺跡の調査成果を待って検討を重ねる必要があり、今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988『将監塚・古井戸―歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
- 赤熊浩一 1999『末野遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第207集
- 井上尚明 1986『将監塚・古井戸―古墳・歴史時代編Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 梅沢太久夫 1981『六反田遺跡』岡部町六反田遺跡調査会
- 木戸春夫 1998『沖田Ⅰ／沖田Ⅱ／沖田Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第231集
- 恋河内昭彦 1997『辻堂遺跡Ⅰ』児玉町文化財報告書第19集
- 小林 高 1999「埼玉県寄居町赤浜天神沢遺跡の掘割状遺構について」『発掘された中世古道』Part 2 中世みちの研究会
- 埼玉県教育委員会 1983『鎌倉街道上道』歴史の道調査報告書第一集 県立歴史資料館
- 坂本和俊 1981『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第2集
- 佐藤康二 1998『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第198集
- 佐藤忠雄 1979『大寄B遺跡・西浦北遺跡』大里郡岡部町教育委員会
- 篠崎 潔 1991『皂樹原・檜下遺跡Ⅱ』皂樹原・檜下遺跡調査会
- 鈴木徳雄 1984「古代児玉郡における土地利用と村落の変貌」『阿知越遺跡Ⅱ』児玉町文化財報告書第4集
- 鈴木徳雄 1991「古代児玉郡における集落設営の計画性」『辻ノ内・中下田・塚畠・児玉条里遺跡』児玉町文化財報告書第15集
- 鈴木徳雄 1997「古代児玉郡の灌漑と地域圏―地域社会における水利権の伝統―」『金佐奈C・児玉条里遺跡上田地区』児玉町文化財報告書第25集
- 鈴木徳雄 1997「古代北武蔵の土地利用と集落」『日本歴史』第592 日本歴史学会
- 田中広明・末木啓介 1997『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
- 中世みちの研究会 1999『発掘された中世古道』Part 2
- 富田和夫・赤熊浩一 1985『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 中村倉司 1999『岡部条里／戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第217集
- 峰岸純夫 1998「鎌倉街道上道」『多摩のあゆみ』第92号(財)たましん地域文化財団
- 宮瀧交二 1991『堂山下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第99集
- 村上泰司 1996「古代集落復元への一視点―北武蔵における竪穴式住居の分析を中心として―」『土曜考古』第20号土曜考古学研究会

写真図版



宮西遺跡遠景



大寄八幡神社



第1号住居跡・第1号土壇



第2・3号住居跡・第1号掘立柱建物跡



F区全景(西から)



第 6 号住居跡



A 区全景(西から)・第 7 号住居跡



第 8 号住居跡・第 1・2 号溝跡



第4・15号住居跡



第4・5・15・23号住居跡・第20号土境



第5号住居跡



C区全景1(西から)



C区全景2(東から)



C区全景3(西から)



第9～13・16～18号住居跡(西から)



第9～11・16～18号住居跡(北から)



第12・13号住居跡(北から)



第19号住居跡



第20号住居跡



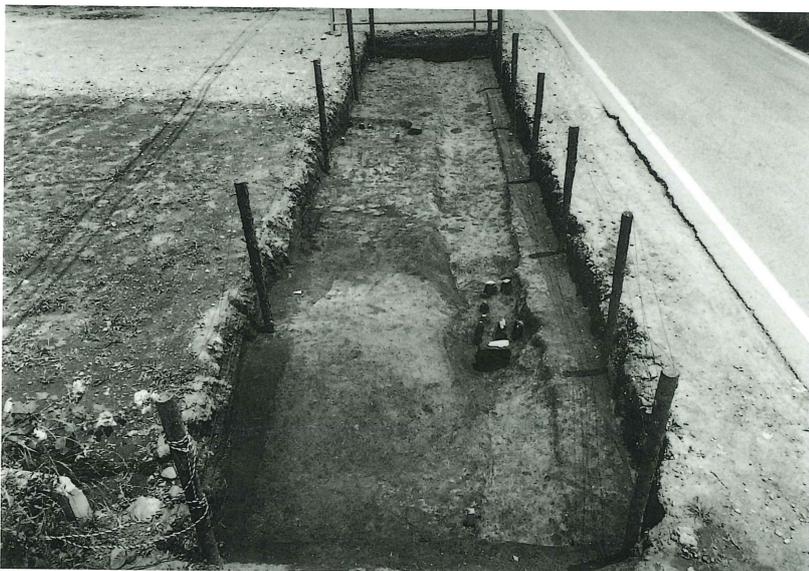
第21・22号住居跡



第1・2号溝跡



A区全景(東から)



B区全景(西から)



第 5 号溝跡・第 15 号土壇



第 3・5 号溝跡



第 9・10・11 号溝跡



第3号溝跡



A区全景(東から)・第3号溝跡



A区全景(東から)



第1・2号溝跡



D区全景(西から)



第9～13・16～18号住居跡



第6・7・8号溝跡



A区全景(西から)



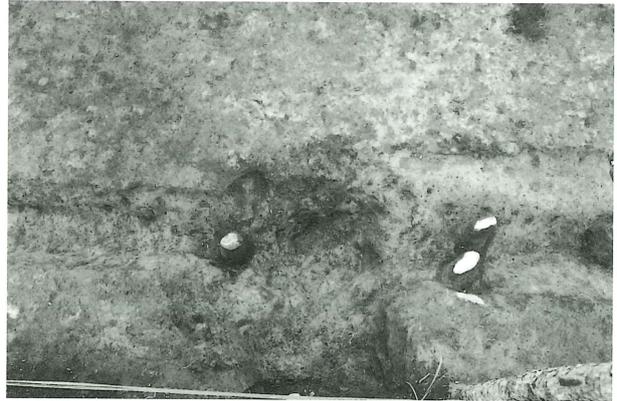
第4号土壤



第8・9・10号土壤



第11・12号土壤・第4号沟



第13号土壤



第14号土壤・第3号沟迹



第17・18号土壤



第19号土壤



第25号土壤



N 2 グリッド遺物出土状況



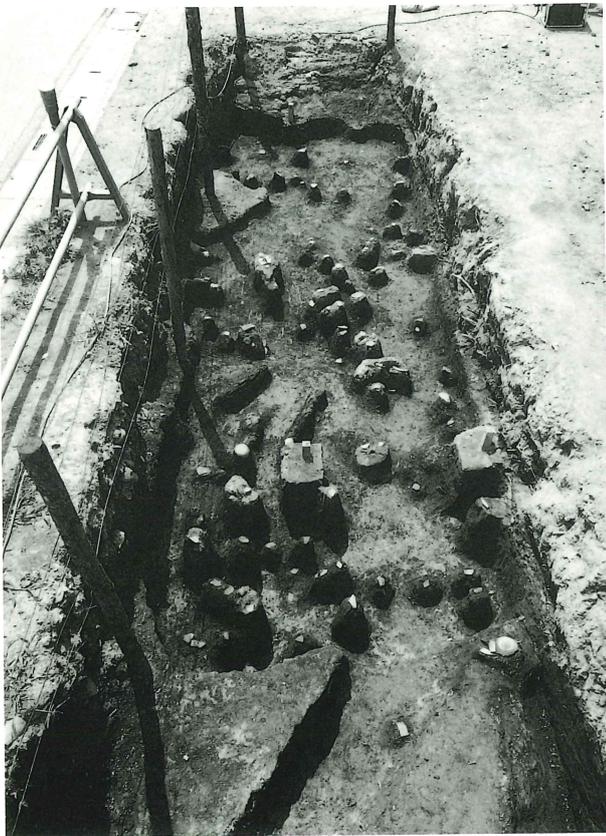
道路状遺構掘り方



第 2 号性格不明遺構



道路状遺構(西から)



N 2 グリッド(東から)



道路状遺構(西から)



第9号住居跡 第16図5



第9号住居跡 第16図4



Nグリッド 第41図14



Nグリッド 第41図6



Nグリッド 第41図13



Oグリッド 第42図48



Nグリッド 第41図23



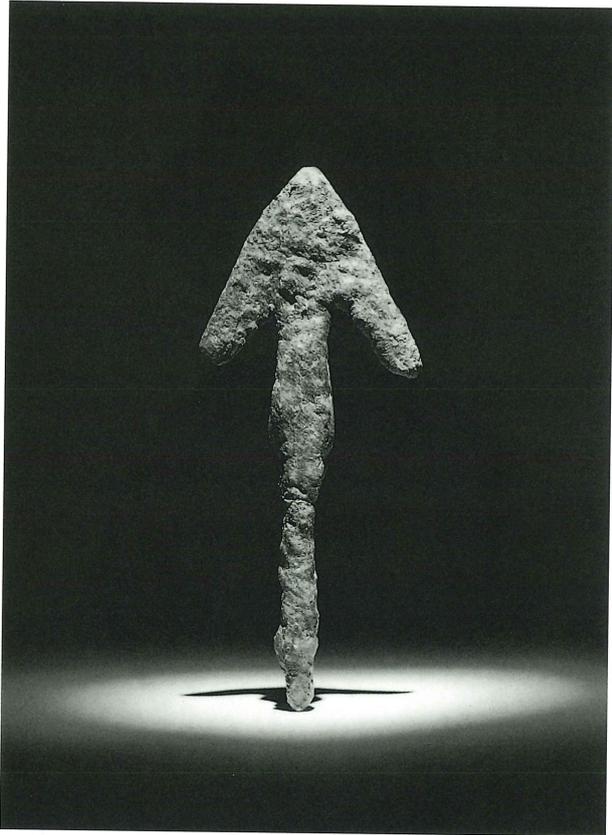
Nグリッド 第42図29



須恵器 第41図19・20・25 第42図30



出土遺物一括 第41図6・13・14・23 第42図29 第16図4・5



O グリッド出土鉄鏃 第42図54



N グリッド出土円面硯 第42図31



土錘 第19図1 第25図5 第42図53



中世遺物 第44図34 第46図8・9・16



報告書抄録

ふりがな	みやにしいせき							
書名	宮西遺跡							
副書名	県道蛭川普濟寺線関係埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	II							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第250集							
編著者名	赤熊浩一							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1					TEL 0493-39-3955		
発行年月日	西暦1999(平成11年)8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやにしいせき 宮西遺跡	さいたまけんおおさとぐんおかべ 埼玉県大里郡岡部 まちおおあざはんざわあざみや 町大字榛沢字宮の にしばんちほか 西528番地2他	11408	111	36° 07' 11"	139° 10' 16"	19970601 ~ 19970731	550	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宮西遺跡	集落跡	奈良時代~ 平安時代	竪穴住居跡26軒 掘立柱建物跡3棟 土壇2基		須恵器・土師器・土 錘・鉄鏃			
		中世・近世	溝跡11条 土壇20基 道路状遺構		天目茶碗・内耳鍋・ 砥石・瓦			

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第250集

大里郡岡部町

宮西遺跡

県道蛭川普濟寺線関係埋蔵文化財発掘調査報告

— II —

平成11年 8月16日 印刷

平成11年 8月31日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 大里郡大里村船木台四丁目4番地1
電話 0493-39-3955

印刷／(株)太陽美術